

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

ウイ

学校—絶
望？
希望？
？



1988 5





札幌時計台

きり絵と文 金子静枝

青函連絡船がなくなって、北海道も陸つづき
になってしまったが、時計台には少しか開
拓時代の匂いがする。

縫 う

おとながカードをいくつも持っているものだから
幼い孫娘も紙を切ってはカードをいっぱいつくって持ち
持ちきれなくてこぼしては拾って歩いていますので
袋をつくってやります

ネルのくまさんのような布

孫娘のパジャマをつくった残りぎれ

布を二つに折って カードに合わせて布を裁ち

針でずぶずぶ縫ってリボンのひもを通してやります

時間というと五分です

マリコも大きくなったらそういうのつくりたい

孫娘はそういます もうすぐ三歳

もう大きくなるのを急いでいる

あわてんぼうのふわふわの子を わたしは抱いてやります

羽生 槇子



新しい家庭科



特集 学校—絶望? 希望?

インタビュー・佐々木 賢さん(インタビュアー 半田たつ子)————— 4

学校に絶望し、なお希望を持つ ●小林誠司 12

私が体験した二つの国の高校 ●大今紀子 16

高校中退の子どもたち ●谷合規子 20

教育に点数はいらない ●竹見智恵子 24

学校—絶望? 希望? ●平井雷太 28

発言

子どもたちは訴える ●水流恵子 32

〈表現〉の中の暮しと子ども ●吉田敦彦 35

●学習の主人公たち————— 38

〈座談会〉学校って、なんだったんだろう—大学卒業を前にして—

新しい家庭科を創るために

小学校では/はじめての家庭科は「よもぎだんご作り」から

●岩瀬志津子 42

中学校では/染めもの(三年共学) ●常陸れい 47

高等学校では/「原発」と食物汚染(2) ●浅井由利子 51

○レポート 女性民教審の公開審議会から

●佐尾和子 58

情報/私たちが願う学習指導要領を作らせるために

出来ることは何? 56



連載

巻頭詩 / 縫う	羽生楨子	1
海の輝く日 / みかんの季節、されど…	佐藤通雅	60
今、子どもたちの世界は / 「遊び」の変化	塚越敏雄	62
経済の目 / 生徒たちの税金への疑問	福島澄香	64
ダブル・ポケット / ⑦アンとロッドの場合 その2	國信潤子	66
歴史の窓 / 乙女になった熊	岡百合子	69
ワンポイント 近代日本女子教育史 / 共産党弾圧と学園	秋枝蕭子	70
KNOW HOW 共学家庭科 / 通信教育 その2	湯沢静江	71
女、そして男 / 男に見える家事の幅	田川建三	72
不思議の国ニッポン / 土地の問題	クレートン・ナフ	73
ひよっこクラブの探険家 / 林の中に家をつくろう	佐多和子	74
何を血迷っているのか / 幸せ気分の演出	井田朋子	75
はなにっき / けし 源氏物語	藤尾知子	76
よそおい	内山裕子	77
波 / 蕨山高校の差別を問う	半田たつ子	80

○今月の読書から 78 ○Weになんでも言おう なんでも聞こう 82
 ○わたくしからあなたに 84 ○Weの読者会だより 86 ○イキイグるうぶ 89
 ○泉 90 ○十字路 92 ○あんでな 94 ○編集室からあなたに 37・55・91



Interview

佐々木

賢さん

“社会全体から「できが悪い」という言葉が
なくなればいい”

インタビュー・半田たつ子

一九三三年生まれ。東京都立立川高校定時制教諭。主著『高校生の意識と生活』『学校はもうダメなのか』『学校非行』『学校を疑う』（以上三一書房『当節定時制高校事情』（有斐閣新書）共著『果てしない教育？』（北斗出版）他
佐々木さんの著者紹介欄は簡単ですねというと、どこの大学出たかなんて関係ありませんよ、と。

中央線豊田駅から徒歩十分ほど、小さな雑木林の前にした佐々木さんのお宅にうかがう。「お待ちしていました。おとうさん」と気さくに迎えて下さった赫子夫人は、児童文学の作家。『あしたは雨』は、私の大好きな作品。
ケンさんは、黒っぽい髪を羽織ったくつろいだスタイル。案内されたのは、半地下の書庫兼書斎。さすがに、三方の壁は床から天井まで書棚で、よく分類された本たちが、居心地よさそうだ。
インタビューの前後、赫子さんも加わって下さったオフレコの雑談は、お互いのダメ親ぶりの交歓で実に楽しかった。

——佐々木さんは、たくさん本を書いていらつしやいます、『学校—絶望? 希望?』がこの号のテーマなので、改めて『学校を疑う』(三一書房)と『当節定時制高校事情』(有斐閣新書)を読んできました。「日本が欧米諸国に比べて遅れているのは『教育の悪さ』などではなく、教育そのものへの反省や疑いが少ない点である」など、実にラジカルな『学校を疑う』の魅力もさることながら、「パートタイム・スクール」は、ほんとおもしろく考えさせられました。この本がおもしろいのは、定時制高校生の気分といったものが、非常によく出ているからでしょうね。

生徒へのつきあい方の変化

佐々木 いやあ。私も生徒へのつきあい方を、いろいろ変えてきてるって思うんですね。一九七五年以前とそれ以後とはかなり変わっていると思います。以前ですと、課題をさまざまに与え、生徒と討論したりしながら進めるのが好きだったのですね。生徒も、かなり問題意識を持っていて、社会問題、時事的な問題について討論し、こちらが生半可なことを言うときと突き上げられたりして、おもしろかったです。

——何年前になりますか「管理教育を超えるには」というテーマで公開ゼミナールを催そうとした時、「こんな大事なことを、どうしても教えたい」という人と佐々木さんのご意

見が噛み合わず、佐々木さんがパネラーを下りられたことがありますね。私はこのことをずつと考えてきて、小・中・高の授業を見せていただきに回りました。そして、佐々木さんがおっしゃった意味がよくわかり、「家庭科以前の問題を掘り起こす必要性」とか、「優秀な先生が練り上げた授業をすればよい時代は、既に遠くに去った——」などと書いたのです。

あの時、佐々木さんは、授業よりも喫茶店でなんということなく話したりする時のほうをはるかに大事にすると言われました。このゼミを開こうとしたころは、まだ教えよう・与えよう・わからせようということが通用していたけれど、いまはもう違う。佐々木さんはあの時、このことを提起されたんだなあ、とわかったんですね。

佐々木 いや、それはね。こういう言い方をするとおかしいのですが、学校によって生徒たちの層が違いますね。大学受験をめざしている生徒、高卒で就職しようとする生徒、やつと高校に來ていて、卒業の資格だけほしい、とかいろいろありますね。高校は偏差値輪切りですから。大学受験をめざしてはいるが、知的好奇心を持っている生徒もいるでしょうが……。一人ひとりの教師にとって、毎日見ている生徒が大変ちがうんですね。例えばぼくの友人で、いわゆる有名私立進学校に勤めているのが、最近、高校生は割合新聞とか本を

よく読んでいるよ、などと言うんです。だが、ぼくのいる学校では、図書館はどんなさびれていき、保健室がにぎやかになっていきます。

こんな現象の違いはあっても、すべての学校で共通して言えることは怠学ではなくて非学——学ぶにあらざるね——こんな気分の広がりをも、十数年前から感じてきたのです。

一 対多のコミュニケーションはイヤ

佐々木 どうも生徒たちは、“一対多”というコミュニケーションを拒否しているのではないか、そう思い出したんです。いわゆる非行生徒が家裁にかかるような事件を起こしたりして、半年ぐらいずつとつきあうことがあります。そうすると、彼らは実に人なつつくくて、なんでこの子がこんな事件を起こしたのだろうと不思議になるくらい。以前は上目づかいで険悪な表情をしていたのが、向うが気を許し、行動を共にしている時は、違った面が現れてくるのです。一対一の時に全然違う姿が見えてくるのです。教壇に立っている時は絶対見えない、わからない。敵対関係でしかないのですが。

——佐々木さんのご本の中にも、一瞬のふれあいを生かせる大人になること、向うが相談を持ちかけてきた時、答えられるだけの状況判断の力を持った大人になること、と書いていらつしやいますね。

佐々木 生徒が変わってきた、と感じた十数年間の経験では、教室での試みはもうダメ。教室外、例えば体育祭・文化祭・修学旅行などにおけるつきあいのほうがはるかにましです。もちろん、体育祭でも、九割の生徒が選手にならないことを望みます。文化祭でも、できるだけ簡単な仕事をしようとしています。できれば一切したくないと思っています。生徒は、教室から、あるいは学校から離れよう、離れようとしています。だから、体育祭などの学校行事などからも離れたほうがいい。事実離れたほうがつきあいがうまくいくのです。こんな体験を重ねてきて、私は学校という体質そのものを疑いたくなったのです。

——いわゆる優等生として育ってきた子も、これまではいつもやらなければならぬことが外から与えられて、それをこなすことで、親・先生の期待に応えられると思ってきた。でも、今、ほんとうに自分からやりたくてしたことがあったのだろうか？ と愕然としているのです。自分の内側から、これをやりたい、と燃えたことがない、と言うんですね。

佐々木 うん、私も大学生から同じような意見を聞いたことがあります。

高校の空洞化

佐々木 いま、かなり多くの生徒が予備校を通ってから大



赫子夫人とともに

学へ行っていますね。それは予備校で受験のテクニクを教えるからかと思っていたんですが、あながち、そうでもない。予備校の先生から、普通高校の先生は何やってんだって話を聞いたことがありますよ。

予備校では、最前列の席を、パアツと先を争ってとらしいですね。受験テクニクだけじゃなく、予備校の先生の中には、かなり深い学識と人間的魅力を持った方もいるらしいです。

予備校の教師をしていて、いま予備校の教師しているのがあるんです。彼が言うんですが、都立高校の時は、ちょっと受験に関係ない話だと控えるようなところがあつたけど、予備校にきて、思い切つてそんな話を出してみると、パアツと受ける。どうも教師の自由度も予備校のほうががあるようなんですね。教師の中にも公憤のあまり、テキストをパーンと叩きつけてしやべするような人も予備校にはまだ

いるが、高校にはなくなっちゃったんですね。

私は、何も予備校をほめているんじゃないのですが、公立学校がどうも機能的に変わってしまったらしい。高校が三原則を掲げて出発したころ持っていた文化が、どんどんそれがれていったんじゃないかと思っています。

——確かに。かつては、どこの学校にも名物先生というのがいらつしやつて……。

佐々木 いましたね。

——いまは先生をしていらつしやるが、かつてはこんな前歴の人だった、なんていうことが伝説めいて語り伝えられて、確かに高等学校が、その土地の一つの文化になっていたと思います。

佐々木 私が最初に出したのは『高校生の意識と生活』という本ですが、昭和23年から30年までの高校生新聞を読んで書いたのです。当時、天文部というのがあればとにかく天文の好きな連中が集まっていましたね。政治的なことにも興味をもっていて、真剣に社会改革をしようと思つていたり……。そういうものが現象としてあつたけれど、ほんの一時期でしたね。すぐ受験がさあつと出てきましたから。そしてこの受験機能は、やがて予備校に奪われますね。

じゃあ、就職機能はあるかつていうと、高卒就職は、ここ三、四年はすごく悪くて、(今年だけは、ややいいのです

が、全体傾向としては求人は減っていますし、生徒も専門学校に行ってから就職しようとしていますね。

こうして、受験機能も就職機能も失って、高校は空洞化してしまつたんですね。これは、制度というよりも、文化の変容、歴史的な労働市場の変化というべきでしょうね。

若者たちの憂鬱

佐々木 定時制の生徒たちの仕事も変わってきました。このごろは、悩みの相談を受けて「仕事をやめろ」ということが解決策になることが多いんですね。いまはコンピュータが内蔵されている旋盤は十日間の合宿でやれるようになるんです。昔の旋盤は五年も十年もかかったんですが。しかし、マニュアルはすごく厚いもので、それをひきながら無限に勉強しなければならいんです。ところが、それでも自分の技能が確かに伸びていくという気がしないんですね。

私の生徒にもMC（マシニング・センター）を使っているのがありますが、「どうだ、おもしろいか」ときくと、「おもしろいってことはない」。「じゃ、くたびれるのか」ときくと、「そうでもない」とも言うんです。機械がやってくれるのだけれど、機械のお相手がうまくできない。若者たちが「おもしろくない、おもしろくない」って言うのですが、それをわがままだ、とも言いきれないんじゃないか。いまは、

おもしろくない仕事ばかりになってしまつたんですね。昔は、例えば水道工事をやつてる生徒は五年十年とやつてきて、仕事はきついいけれど、それなりに自分の技能が伸びていったし、親方から、お前がいるからやつていけるなどと言われた喜びがあつたんですね。ところが、今の資格社会では、ペーパーテストを要求されて、絶えず勉強しなければならなければいけれど、仕事はおもしろくない。いわば、仕事の無機質化が進んでいるんです。要するに準備期間―教育期間がのびただけで、おもしろい仕事につけない社会―労働者からみると、そういう社会ですね。だから、定時制高校生としての現在を、だらだらとした準備期間として受けとめているんじゃないかと思います。

システム社会と学校

——柳展也君から、横浜の「浮浪者」殺傷事件、杉本治君などが提起した問題を掘り下げた『子どもの犯罪と死』（春秋社）をお読みになりましたか？

佐々木 読みました。

——私は、これ読んで、とても刺激され、おもしろかったです。納得できないことも幾つかあつたんですね。その一つは、今どんどんシステム社会に移行しつつある。共同社会からシステム社会に移る裂け目に起きた問題だと位置づけ

ているんです。それはなるほど、と思いました。が、むしろ学校は、いろいろなことまでかかえ込まずに、知識だけを教えるところになってしまえ。システム社会のほうに学校が適応してしまえばよいと言っているところがあって、それは違うんじゃないかな、と思いました。

佐々木 半田さんは、そういうふうに読まれましたか。なるほど。私はね。学校批判をしているところを、ずい分古いなど思っただけです。教師とは、実はシステム社会に入り込んでいて、ぼくもあがいて抵抗してきたが、敗ってきたんですね。細かい規則を作るのに、しきりに抵抗してきたが、最後に多数決などでパツときめられてしまうんですね。

生徒も、例えばタバコの問題なんかやると「退学にさせるんじゃないかやおれはやめなさいよ」って言うんです。生徒が登校拒否などで叫び声を挙げていても、それをシステムの側から制度的に救うことはできないんで、個人的にある瞬間をとらえて、やるしかないのですね。教師はなぜわからないんです？　と言いますが、教師だからわからないんですよ、システム以外のふつうの隣の小父さんならわかりますよ、って言いたいですね。

私はふつうの小父さんとして生徒の横にすわっていいようにするのですが、まだ、教師という顔で向き合う場面が圧倒的に多い。教師はだれでもその両面を持っていると思うんで

す。

もう十分システム化は終わった、という感じを持っています。あの本の著者は、過渡期としてとらえています。が、ぼくは相当進んでしまったと思っています。

——臨教審が、インテリジェントスクールを唱え、あらゆる情報機能を備えたビルの中に学校が入り込めば、「学校へ行ってニューヨークの裏街を見ようということになり、子どもは学校はすばらしいところだと目を輝やかす」といつていますが、何とお粗末だろうと思います。いま、一番やせ衰えているのはコミュニケーションの部分でしょう。人とのコミュニケーションはコミュニケーションが苦手で、機械とでないとコミュニケーションできない子を育てているのに、それをさらに進めるとは……。だから佐々木さんが、生徒と触れ合える時間を大切にす、その瞬間を見失わない感性を磨いておくことを心がけていらつしやる点、すばらしいと思うんです。

いま、生徒が求める学校

佐々木 生産社会、消費社会、共同性の強い社会と三つに分けて考えてみますと、生産社会の学校を臨教審は批判していましたね。単位制高校など、消費社会に向けて学校を推奨していました。しかし、生徒はその両方ともイヤなのです。共同性を生徒はしきりに求めていると思うのです。それ

を求めても、社会にはもうないぞ、と言えばそれはそうなんです、常に頭においておかねばならないのは、生産社会に入る前は、農村のような共同性の強い社会で人間はやってきたのだ、ということ、キチツととらえておかねばいけないと思うんです。

アリエスが、産業生産社会が始まるとともに教育が誕生したといっています。近代に入るまで、教育はなかった。学校はあったが、それは徒弟で見習いだった、と言ってます。教育という言葉も近代になるまで出てこなかったそうですね。

——中・高生や若い人たちは、感性の塊りのようなものですから、これらの人が時代を最も鋭敏にとらえています。しかも、いわゆるいい学校といわれる所で勉強できない人たちが、最も鋭く問題を感じているのではないでしょうか。

私も幾つか学校を回っているうちに、先生がどんなに一生懸命に教えるようにしていても、生徒がそこにノッてこない様子を見ました。先生と生徒の心が触れ合えないままに、何を教えてもダメだということがよくわかりました。佐々木さんが、生徒と触れ合う一瞬を大事にしたい、といわれるのは、こういうことだとわかったんですね。それができるなら、学校はまだ意味のある場所かもしれない……と。

佐々木 触れ合う一瞬というのは、教師が教師性を失った時に起こるんですね。ところが、学校で、そこだけに価値が

あるという、自己矛盾に陥っちゃいます。ぼくが仮に学校をやめたところで、教育社会というのは変わりませんね。たとえば大工さんの徒弟に入ってから身体で覚えていくのを「学びの社会」と呼びますと、今はその学びの土台がなくなっている時期ですね。今は建築素材のあれこれを選び、電気釘打ち機などを使ってパアッとやってしまう。頭で覚えていくのを「教育社会」としましょうか。いまや、中世的な学びの社会から教育社会に突入したのです。ぼくが学校をやめたところで、その教育社会から逃れることはできないのです。

個人的には、切りぬけ方、気分を持ち方などがあります、そんなに簡単な問題ではない。安易に、ではどうしたらいいかなんて答えは出ません。早急に答を出しても、あまり意味がないと思うんです。個人的な身のこなし方は生徒と一緒に考えていきたいですが……。教育社会はこうやったらよくなるという呼びかけはできないけれど、教育社会の起こす様々な問題に対して、的確に認識していきましよう、とは言えるんですね。大工さんというなら、新建築素材を使うのをやめましようと呼え、それを実践するエコロジカルな運動もあります、全体の傾向は、そうなっていますからね。

——なんと難しい時代を招いてしまったことでしょう。

“自我関与”の教育論議

佐々木 最近教育論議がしにくくなったと思いませんか？

——そうですね。

佐々木 心理学用語で「自我関与」というのがあります。

自分の利害に直接関係する部分で発言しますとね。どんなに立派な考えでも、全部反論できるんです。そしてそれがあたっていいんです。教育をめぐって今日ほどさまざまな立場があるということはなかったんじゃないか。ただいくら議論をしても決着がつかないんですね。

たとえば、これは、小沢牧子さんから聞いた話なんですけど、登校拒否の子をもったお母さんと障害児をもったお母さんがいて、ともに大変苦しい思いをしておられますね。障害児をもったお母さんが統合教育をしてほしいと要求する時、ある程度の強制がないと、「障害児はいやだよ」と逃げられちゃうんですね。だから強制してほしいと言う。しかし登校拒否児のお母さんは、一切の強制をやめてくれ、自由にしてくれというわけです。ともに被抑圧的状况にありながら、父母たちの間に対立があり、どちらが正しいとも言いきれない。立場が微妙に分かれてきますね。

教育という議論が、そもそものそういうものだということの認識を持って始めたほうがいいのでしょうか。

——春の公開ゼミナールに「とりあえず言いたい——教育について——」というタイトルをつけましたが、どうなるかな

あ、という心配があります。子どもの年齢によっても、平たい言葉で言えば、子どものできがいいか悪いかでも親の思いは違います。学校の内にいる先生と外にいる親は、当然違います。そこをわきまえる必要がありますね。

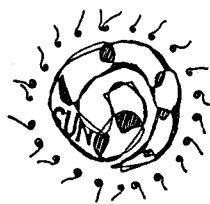
親であること——教師であること

佐々木 シンナーを吸ったり、いわゆる大変な「非行」をしている息子を持った親御さんを知っていますが、警察から呼ばれ、「親の顔が見たい」と言われたり、大変つらい思いを重ねたんです。極端な例だけれど、「息子が死ねばいい」と思った、というんですね。ぼくがその子どもと並んで歩きながら話したりすると、実にいい若者なんです。親だから「死ねばいい」なんて思っちゃうんですね。でも息子からするとどうしてもそうならざるを得なかった、という部分がありますね。世にいう「非行」なんていうのはそういうものです。いわゆる「できの悪い子」が、おもしろい存在だったりするんですが……。社会全体から「できが悪い」という言葉がなくなればいいと思いますね。

——親と教師は、隣の小父さん・小母さんになるのがむずかしい存在ですね。教師という職業の親を持つ子は、二重にづらいでしょうね。長時間、ありがとうございました。

学校に絶望し、なお希望を持つ

小林 誠 司



昨年十月二一日、「担任外し」を不当とし名古屋地裁に提訴した。二年続きの担任外し、持ち上がり希望を無視し生徒との関係を断つための三年続きの一学年所属、生徒指導部入りを阻止するため、校務分掌は五年間連続で視聴覚部に固定。これは教師管理で名高い愛知ですら珍しいといわれる。本校では校長の独断と偏見により校内人事等が決定されている。再三担任外しの理由を尋ねたが、「言う必要なし」と話し合う姿勢の全くない校長の横暴ぶり、接見拒否の市教委の対応が、私を本人自身予想すらしなかった裁判闘争の原告の立場へ後押しすることになった。

私は本裁判の中で、管理取締まり的教育に反対する教師を人事によって排除し、教師の教育権・生徒指導権を剝奪したことを争点とした。同時に、ここ数年来職場では正を求めて

きた体罰による生徒管理、服装頭髪検査をはじめとした子どもを「モノ」としか見ない品質管理、選別の機関としての学校状況を問題提起しなかった。管理職を目指す教師は主体性を失い、生徒は生活の全てを点数で縛られ、父母は我が子の進路に有利な内申書を求め教師に追従させられる、まさに学校ファシズムの完成である。そんな閉塞状況を打破するためにも、学校という密室から、少しは風通しの良いフェアな場において、学校再生に向けて活路を見出したいと願った。

学校とは、子どもらにとって学習、生活の両面において、「なぜ」という問いを皆で考えていく場である。受験偏重教育では、思考の過程は効率上ムダとして軽視され、ひたすら結果の暗記中心となっている。生活上の種々の規則を問う子は、素直さに欠けると見なされる。「なぜシャープペンシル

が禁止なの」と問い、「鉛筆に比べ重いから手首の健康上好ましくない」と答える教師に納得できず使い続ける子を反抗的と叱りつけ、幾度も持ち物検査をし、何十本と没収し廃棄する。粘った子も五本目を捨てられる頃にはあきらめる。今や全校からシャープペンは消えた。肌色以外の救急絆創膏を貼っていた子が規則違反の色だとはがされ、抗議すると、考え方が恐ろしいと皆の前で侮辱され、以来クラス中から敬遠される。この様な色や形に関わる瑣末な規則が日常化している。私はこれらの規則を徐々に緩和し、廃止してきたが、この体制を崩したことが担任外しに至った原因とも言える。また私が担任を外された後にほとんど復活している。服装頭髮の全校一斉検査は、生徒指導体制の要である。頭のてっぺんからつま先まで細かい基準を設け、頭髮係、制服係、スカートの係等に分担された画一的な管理教育に熱心な教師によりチェックする。頭髮専門屋はひたすら髪形、長さ、色、臭いを検査する。前髪は手のひらで押さえて眉から五ミリでもはみ出せばハサミで切る。後髪は顎の線まで。一センチでも長ければゴム紐で縛らないと許されない。ただし色は指定の黒。さらに事前に「結束許可願届」が父母の捺印入りで提出されていることが条件。「もし校内でゴムを外していたら切っている構いません」の文句が印刷されている。

スカート丈は二センチ毎の身長差に対応して規定され、つ

りバンドの調節も許さない。測定の効率を上げた特製のものさしを考案した教師は管理職のおぼえ目出度い。学生服の裏地も基準あり。靴下の折り方、靴のラインの有無、靴底のゴムの色が赤は派手とか。ここまできると単なる個人の好みに全教師が同一歩調で合わせているだけだ。この検査にパスした生徒は皆、同じ頭、スタイル、顔つきまで同じに見える。これで指導は大成功、安心できるというわけである。これを毎月実施し、しかも毎朝正門チェックをし、違反者は帰宅させる。センチ、ミリ単位の異端者も生まれる隙は無い。

持ち物全てから色が奪われる。表紙に絵柄のない無地のノート。白の軍手が好ましいというが、少しはかわいくとユニシャルを刺繍すれば、目立ちたがり屋と取り除かれる。体育大会の応援用ハチマキの色、柄まで事前にチェックされる。生活、行動に関する規制はさらにひどい。他学年の廊下を歩行するだけで問題行動とされ、同学年内であれ、他クラスへの出入りは一切禁止、子ども達が数人集まっておしゃべりすればグループ化してきた、要注意と判断される。廊下も安全地帯ではなくなり、校内に立入禁止区域が広がってきている。狭き門にたどり着くまで、狭き道を一列歩行させられる。生徒は、様々なレースを強いられる。テストの順位競争、クラス・班対抗の平均点競争、清掃コンクール、チャイム着席競争。挨拶競争。虫歯治療率競争。給食準備時間競争、さら

に給食の残菜コンクール。今や点数化・競争原理は生活全般に及ぶ。この成績の一つ一つが担任教師の評価につながるから、教師は個々の生徒の特質、事情を無視し、集団としてしか把えなくなり、競争に血眼となる。勝敗を最優先した教育姿勢をとり、ムダ、ジャマな生徒を排除する。それは鋳型にはまらない個性的生徒であり、競い合うことは他人を蹴落とすことに他ならない事実¹に気付いた心優しい生徒である。

このような管理体制を完成するために、「内申書に書く」という脅しや体罰がある。頬から歯のつき出る程の殴打、後頭部を縫う程の足げりという激しい暴力をはじめ、トイレ掃除、正座、廊下の空ぶき二〇往復など日常的な体罰が横行する。私は幾度も職員会議で問題提起したが、校長の「学校運営上必要」に支えられ、同僚の多くは、「愛のムチ」「親代わり」論に終始した。生徒があるいは怯え、あるいは怒りの爆発寸前だと訴え続けていた折、ある体罰事件が新聞報道され、やっと私の体罰一掃を求める緊急職員会が開かれた。

ところが、会は「誰がマスコミにたれ込んだか」の追及で始まった。私以外にないと疑い、仲間の失態を公にする冷酷非情さを責める。誰がどんな状況で暴行したのか、本人の名も明かさず、釈明・反省も聞けず、生徒指導体制の変革に至らぬ不毛な会に終わった。教師が体罰をふるわないと子ども達が知ったら、明日からの指導が不安だから、話し合った内

容は外部に漏らすなどの確認をする始末。私は会の無意味さ、反省のなさを弾劾するとともに、ニュースソースは他でもない彼等自身が育てた子ども達によるものである事実を明かした。教師に足蹴りを受け、後頭部に三針の裂傷を負い悔し泣きする友人の訴えで、救いの手を外部に求めたという決定的事実を。しかし、驚きの色も見せず平然と閉会するという感性、誰一人として血を流した子の心情に目を向けない彼等との共同歩調から訣別を決意した。

その会から一か月後の服装頭髮検査に、私のクラスは参加を拒否した。私自身はもちろん、生徒達も様々な形で脅されたり、教育的指導²をされたが、全校生徒、父母の支持は私達に集まり、一挙に学校管理体制は崩壊した。そして、翌春私は担任を外された。発表の日、父母代表が私の担任復帰を求め学校と交渉し、生徒達も抗議をしたが、時が経つにつれ学校は再び静かになった。校長は地域父母には事実を歪曲し、私を中傷するデマを流布し、生徒には全校集会の場で度々私の担任外しの正当性を訴えた。常に切札は、内申書であり、校内で私と談笑する生徒はやがて皆無となった。昨日まで挨拶を交わした子が顔を伏せて素通りする。しかしその卑屈な対応は、実は子どもにとって絶望的な苦闘の中で、唯一残された生きるための知恵であったことを知る日が訪れた。

提訴直後、私の転勤阻止、担任復帰を求める署名活動が生

徒の中から起こった。五百名の署名が集まった頃、それをつぶそうと教師達が一部生徒を呼び出し、「教育的配慮」なる厳しい指導を開始、クラブ顧問は「クラブ員で署名した者はすぐ取消して来い」、内申書が悪くなるとの噂も流れるなど……そんな教師の妨害に抗議し、百五十名の生徒が校長室に押し掛け、教師達を慌てさせる場面もあった。「校長先生と小林先生とどっちに味方が多いかわからんのか」「どちらにしたら得か考えろ」「小林先生と一緒に出ていけ」「大人の喧嘩に子どもが入るな」「十八歳までは署名する資格はない」「親に問題あるから呼ぶぞ」等々が、教師の「御指導」だった。

代表者が妨害教師一人ずつと話し合い、署名運動への干渉を表面的には阻止した。そこで校長の登場。月曜日の朝礼がその日は異例の体育館で行われた。校長は二十分以上にわたる話の中で、署名活動の代表者を「やくざまがい」と呼び、教師の人事異動は八年で当然と説明し、暇があったら受験勉強に精を出せと叱りつけた。一時限目が始まり、してやつたりの顔で壇上を降りた校長めざし、私は千数百名の生徒をかき分け進んだ。顔がこわばり震えている校長に静かに抗議して、「連絡があります」と集会委員の子からマイクをもらう。静かに注目する全校生徒、教師達を前に何をどれだけ話せたかわからない。ただ、署名をはじめとする個人の権利、自由などをたとえ学校長たりとも干渉し阻止することは許されな

い。自らの考えで行動したという事実こそ素晴らしい。今後共に話し合っていこうと呼びかけた。

壇を降り、生徒達の中ほどこまでもどると、「おそろおそろ」のざわめきと拍手が起き、それがゆっくりと広がっていった。後ろまで来て前を振返った時、拍手は全体のものとなり館内に大きく鳴り響いていた。いささかドラマチックすぎたが、それまでこぶしを握りしめていた署名運動の代表者達は、ロボット生徒達からの共感の拍手に出あった。処世術ばかり身につけたかに見えた他の生徒達も、実は水面下で苦悩し、希望の灯を燃やし続けていた事実に気付いた。

気恥ずかしさを耐え、私事を述べたが、社会の腐敗を凝縮した学校という修羅場、主体性・人間味を失った教師達から過酷な生活を強いられる生徒達の姿をお伝えしたかった。署名運動の中心生徒達は、その後も校則の見直しを訴えたり、登校拒否生徒の相談相手となったりしているが、相変わらず教師側からは、無視され、他生徒から排除されている。しかし、彼等の孤立しながらも、生活行動は縛られながらも、自分自身の心だけは安売りはしない元気な姿は、微かだが確かな光明を私に感知させ、いつか荒野と化した教育現場を焼き尽くす希望を抱かせてくれる。

（こばやし・せいじ 愛知県春日井市立松原中学校「担任外し」訴訟原告）

私が体験した二つの国の高校

大 今 紀 子



私は、一九七八年に大阪府立池田高校に入学し、二年生の夏からアメリカ合衆国、アイオワ州のレ・グラント高校に留学しました。一年後、二年生に復学して、八二年三月、池田高校を卒業しました。二つの高校を比較しながら、学校というものをとらえ返してみたいと思います。

十五歳の春、私は大きな希望をもって高校に入学しました。高校受験を控えた中学三年生の一年間は、テストや偏差値・内申書などをいつも意識して過ごす毎日で、成績に一喜一憂し、志望校にこだわる自分が恥ずかしく嫌でたまりませんでした。ですから卒業の日、私は醜い自分とさよならし、新しい自分に生まれ変わるんだという喜びでいっぱいでした。ところが、高校は思い描いていたような場所ではないことにだんだん気がついてきました。

例えば、一年生の最初の授業から、有名大学への合格率を

他校と比較し、生徒の競争意識を煽ったり、わからない生徒をほったらかしにして授業をすすめる教師がいました。私は「このままだとまた何も考えずに受験勉強するようになるんじゃないだろうか」と不安でいっぱいになりました。

何かに気持ちをぶつけたくて、私は学校の外の世界を飛び歩くようになりました。ミニコミ誌を作ったり、八ミリ映画を撮ったり、日本画を習い始め、ピアノに熱中し。友だちといつも歩き回り、おしゃべりし。家にいる時はずっと本を読んでいた。そして、朝どうしても学校に行くことができずに休んでしまったり、遅刻・早退をくり返すようになりました。

しかし、いつも「こんな生活でいいんだろうか」と自問自答をくり返していました。「学校、嫌いや」へ勉強するために高校に入学したのに、全然勉強せんと遊んでばかり。甘え

てるんとかやうか」〈学校に行きたくない〉〈それやったら中退して働いたらいい〉〈働くの嫌や。大学行つてそれから就職したい〉〈大学行くんやったらちゃんと勉強せな〉〈受験勉強なんて嫌や。大学で何を勉強したいのか、自分は何になりたいのかからん〉そして、〈進路のことをゆつくり考える時間が欲しい。もつと違う世界を見たい。自分を試したい〉と思うようになりました。そんな時に、アメリカ留学のチャンスが訪れたのです。〈これだ〉と思った私は、すぐ一人で手続きをとり、試験を受けました。高校一年生の秋でした。

合格通知を大喜びで両親に見せるとすごく驚きましたが、費用を出すなどの全面協力をしてくれることになりました。バタバタと準備をすすめ、一九七九年八月、二年生の夏、私はYFUの交換留学生としてアメリカ合衆国へ出発しました。アイオワ州。あたり一面とうもろこし畑と牧場という大農業地帯にあるマーシャルタウン（人口三万五千人）の郊外に、ホストファミリーは住んでいました。私はここから一年間、レ・グラント高校に通いました。

レ・グラント高校は一年生五、六〇人の小さな学校でした。アメリカの高校生と机を並べて勉強し、彼らののびのびとした学校生活に触れながら、私は何度も日本の高校生活との差に驚き、うらやましいと思いました。服装はもちろん私服で、ほとんどの生徒がジーパンにTシャツです。また、女

の子が自分にあつた化粧、おしやれをしているのを見ると、〈すごい！〉とうなつてしまいました。それに男の子と女の子が仲がいいのです。気さくで人なつっこくて、授業中でも放課後でも一緒にワイワイ。

十一学年、十二学年の生徒になると、ステディ（決まった恋人）をもっている人が多くて、学校の中でも肩を抱き合つて歩いているカップルをよく見かけたりしました。在学中にマーシャルタウンで働いているボーイフレンドと結婚式をあげた女の子。同学年の男の子とつきあっていて妊娠し、大きなおなかで通学していた女の子。彼女は、夏期休暇中に結婚・出産して秋から母親に子どもを預けてもう一年通学して卒業すると言っていました。まわりの人たちの彼女らを見ているまなざしの中で、彼女たちは幸せいっぱい自信に満ちあふれていました。

私は、十二年生（高校三年生）として、英作文、アメリカ政経、アメリカ史、代数、美術、音楽、体育の七授業をとりましたが、教師の生徒に対する態度や授業の活発なことなどに、毎日眼を見張らされました。例えば、アメリカ政治経済の時間、選挙権の意義、政治参加の意味といったことを学習する中で、翌年に予定されていた大統領選挙を教材にしました。これまでカーターはどのような政策をとってきたか、それはどのように評価されるか、レーガンはどのように

主張しているか、それについてどう考えるか——などクラスみんなで議論しあう。誰もが自分の意見をもっていて、人と違う意見を堂々と主張する。この授業は私にとって大きな驚きでした。日本の高校では、各政党がどのような政策をもっているかなどの国民として必要な政治教育は一切行われず、生徒の間で政治のことを議論することはほとんどないからです。

また、数学の授業では、教科書の定理を教えて、例題を解いて、宿題を出して、答え合わせをする、という授業のすすめ方は日本と全く同じでした。けれども、日本では嫌な顔をされるので質問できないような基本的な質問でも教師はすぐくていねいにゆっくり教えてくれます。生徒も分からないことと、質問することを恥ずかしいと思っておらず、授業中、先生の話の途中にどんどん食いついていくのです。それが放課後や休み時間でないところがすごい。教師というのは固苦しくて威圧的なものだという私の概念は、レ・グラント高校での生活ですっかり変化しました。

翌年五月、私はレ・グラント高校を卒業しました。私のまわりの友だちは進学する人、就職する人などさまざまでしたが、進学する人たちは、大学でこれを勉強したい、将来はこういう仕事をしたい、という意志をハッキリもっています。また大学の学費や自動車の経費、親元を離れて一人で生

活するために卒業後はアルバイトに精を出していました。同じ年でも日本の高校生とずいぶん違い、経済観念はしっかりしているし、ポリシーはあるし、自分の生き方に自信をもっている。大人だなあ、と感心すると同時に、生徒の主体性を尊重し、個性を認めあう学校や社会のあり方から私は多くのことを学ばされました。

アメリカ留学の一年間、一日一日がとても長く感じられました。ありのままの自分だけが、日々の私の言葉・行動全てが勝負という毎日、試行錯誤の毎日でした。その毎日の中で今まで私が親の職業や小学生の頃の成績、近所の評判、高校生であること、などにいかにとらわれていたか、思い知らされました。見知らぬ風景・人々・暮らし。孤独感はひとりではありませんでしたが、一方でそれは最高の解放感であり、自由でした。ただ自分でありさえすればいい、その自分が見えてきた貴重な一年間でした。

一九八〇年の九月、私は池田高校の二年生に復学しました。改めて池田高校を見直した時、とてもきゅう屈でしんどく感じられました。ほとんどの生徒が制服を着て同じ格好をしていることが奇異に思えただけでなく、みんな表情がなまい、元気がないという印象をもちました。それは授業が始まるとますます強まりました。クラスメートたちは、授業中に発言したり質問したりすることはほとんどありません。私が

時々質問すると目立ってしまい、また教師も質問にまともに答えずに、「分かるように説明してる」と不機嫌になるなど、居心地の悪いことこの上ありませんでした。

また、体育の授業でも驚くことがありました。体操服の色は学年ごとに統一されていました。私は一年ずれて二年生に復学したわけですが、初めての体育の授業で一年生の時に購入した緑色のジャージを着て校庭に出て行くと、N先生が「コラッ！ おまえだけ何で違う色着てるんや！ 一人だけ色が違ったらめざわりじゃ！」と怒鳴りました。N先生は私が一年生の時も体育担当で、私が復学したことを知っていました。「これは私が入学した時に買ったものでまだ着られるし、何でこれやったらあかんのですか」と抗議し、その後もそのジャージを着通しましたが、何度もみんなの前で注意を受け、とても嫌な思いをさせられました。「何で教師は生徒一人ひとりの事情を配慮せず、みんなが同じであることを要求してくるのか」と無性に腹が立ってきました。このように私は、アメリカ社会ではなかなか人前で意見をちゃんとさえ言えずに苦労しましたが、今度は意見がハッキリあり過ぎてなじめないということになってしまいました。

そして、生徒の個性・主体性を尊重しない学校に嫌気がさしてまた朝、登校できなくなったのです。けれども今度は違いました。

〈行きたくない時は休む。勉強したい時は行く。言いたいこと言って、やりたいことやって、卒業したい〉。私は自分のペースで登校し、クラブ活動や自治会活動に精を出しました。三年生の一学期、九月に予定されている文化祭をめぐって生徒と教師が対立した時、私たちは学校のやり方を批判しようとした。ところが、壁新聞・ビラを出そうとすると、教師たちはよってたかつて「検閲」してくるのです。私は、学校の中では表現の自由がないのかと、とても腹が立ちました。生徒が自主的な活動を行うとつぶされることを眼のあたりにし、池田高校の生徒は元気がないと思つたのは、学校のやり方に大きな原因があるからだと思つきました。

私はアメリカでの留学生生活をふくめて四年間高校生として過ごしました。日本の高校とアメリカの高校を比較して強く感じることは、日本の学校は、生徒を一人前の人間として認めておらず、憲法に保障されている基本的人権——思想・信条・良心の自由、表現の自由——すら守られていないということです。人種・民族・宗教の違いの中で多様な価値観が共存しているアメリカ社会は、一見まとまりがなく雑然としていますが、他者を受け容れる柔軟さがあります。日本の学校も、教師はこうあるべき、生徒はこうあるべきと決めつけず、一人ひとりのあり方をお互いに認めあえる方向に向かつていってほしいです。

(おおいま・のりこ)

高校中退の子どもたち

谷 合 規 子



高校中退者が年間十一万人を越えている。

「今どき、高校ぐらいいは出ておかないと……」という言葉は、今や一億総日本人の通念になってしまった観がある。だからこそ高校全員入学を叫ぶ声にも迫力が出てくる。

が、そのかたわらで、これほど中退者が多いのでは毎年百校近い高校が、年度の途中で自然消滅しているに等しい。

一体なぜ?

「これ読んでみて下さい。彼らがどんなに勉強したがっているか、わかるでしょう」

こういつてK氏は、分厚くファイルされた作文集を二冊ほど、どんと私の目の前にさし出した。「私の中退理由」という題名で、三百人分はある。

四〇歳近いK氏は、有名予備校の事務局々長代理、四年前

わが国で初めて、大学入学資格検定のための受験コース開設以来、中退者に深くかかわってきている。

きびきびと応待する物腰は教育者というより、やり手ビジネスマンだ。ファイルは、コースの合格者のふりわけのために課せられた作文集である。

「アメリカの学校に比べると、まるで少年院のごとく規則を押しつけて、自分の個性などほとんど無視され、画一的な人間をつくりあげようとする学校にはどうしてもなじめなかつた」

というのは、高一のとき、父親と一緒にアメリカに行き、一年間経て帰国した少年A。外国での高校の単位が日本では認められず、留年しなければならぬ扱い、国際化にむけ、今後は是正されることになった。

しかし、Aは、「留年し屈辱だが、それにもまして、少年院のような高校生活が耐えられなかった」と告白する。

いったん、自由な気風の中で学ぶことを味わった留学経験者は、目からウロコが落ちたように共通して訴える点である。

留学したわけではないが、少女Bの話もこれに続く。

「髪の長さ、ネクタイの結び方、スカートの丈等、週一回の服装検査は、中庭に全員整列し、一人ひとり順に前に出て受けるんです。あやしいとなると、髪の毛を濡らして、天然バームかどうか調べる。前髪をオデコにくつつけて、まゆ毛にぶつかれば、ジョキ、ジョキ切られます。検査のあと、中庭のすみに切られた髪の毛が山の様になっていることもありま

す。何かでひつかかると全員の検査がすむまで、正座して待つんですが、人工芝で脚がチクチクした痛みは一生忘れられないと思います。あの服装検査さえなければ、がまんできたかもしれません」

こういう学校の教師こそ、ぜひ狭い日本から一度は出て両眼にはりついたウロコを落としてきてもらいたいものだ。

少女Bはさらに言う。

「先生の中にも、私の担任のようにあんな検査いやがる人はいます。こんなの教師のやる仕事じゃないって。でも学校全体が、そういう雰囲気で、生徒指導や学年主任は、検査好き

で、ムチ持って生徒をどなるようなタイプ。うちの担任なんか気が弱くて何も言えないみたい。

それで、クラス中で先生励ましたんです。『先生、こんな学校いやだよ。公立の採用試験がんばんなよ、公立いけばこんな検査しなくてすむよ』って。担任は、大学出るとき、公立の採用試験落ちてるんです」

生徒も教師も公立高から振り落とされた妙な連帯感。自分たちは三年間の辛棒ですむけど、一生じや大変と教師をおもんばかりる彼らの心の幅の広さに、胸が痛くなる。

「服装検査なんて、つまらないことに厳しいのは、偏差値が低い高校ばっか。あたしら、バカだから厳しくないと、どんなカッコすんかわかんないって先生たち思ってるでしょ」

規則づくめの学校批判は至るところで耳にするが、アソコの学校の生徒はキチンとしていたりとか、派手なカッコの子が多いから、ウチの子は行かせたくないなどという親の学校評価基準がこんな校則に結びつくのだから、根は深く広い。

「私の中退理由」の中には病氣、ケガによるものというのがいくつかあった。神経病や盲腸炎で、試験を受けそこない単位がとれなくなった。授業がわからなくなった。出席日数が足りなくなったというものだが、生身の人間にケガや病気がつきものだ。

しかし彼らの訴えを読んでいると、人生八十年の長さの間

でも、高校生活三年間だけは、ケガ・病気は厳禁という感じが強くしてくる、学業不振や出席日数不足につながり、原級留置ということになると、これが中退のひきがねになりやすい。

異年齢の友人と遊ぶ機会もない現代っ子が中学生にもなると、先輩・後輩の序列は明確化し、さらに神格化にまで至る。

「一年生が平民なら、二年生は皇族で、三年生は天皇みたいに偉い絶対者」と先輩のしごきに耐えられずに中退した野球少年が証言するように学年別階級社会を前提に考えないと、留年によって抱く劣等感・屈辱感は容易に理解できない。「留年するくらいなら、死んだ方がまし」は大げさでない。

「クラスがうるさい。授業もまともに行われるのは、五十分のうち、三十分くらい。そんななかで一人だけ一生懸命勉強しようとしたら、みんなと協調が失われ、浮き上がってしまう」

と荒廃し、学ぶ雰囲気を失った高校の様子を訴える作文も目立つ。

高校は何も有名校じゃなくてもいい。自分自身が目標を持ってがんばれば、希望の大学に入れると、Cは両親の影響を受け、そう考えていた。父親がそういうコースを歩んできたからだ。だから中学校は部活に熱中し、それに悔いはなかった。

た。が、高校間格差の現実は一学期間通って、愛想をつかし、大検コースへと切り換えた。

「ちよつと悪いとすぐなぐる、ける、そして切り札が『文句ある奴はやめてしまえ』なのです」

と教師の暴力の告発もある。

高校は、気にいらぬ生徒を追放する権利を持っている。ここが、中学校とは決定的に違うところだ。

中退といっても、大多数が形の上では自主退学。ハマコーが予算委員会の議長をやめさせられるときも、高校生がやめさせられるときも、同じ原理・原則が働く。

「日付けない退学届」というのがある。

けんか、オートバイ、飲酒など高校生としてあるまじき行為を犯し、自宅謹慎を言いわたされた少年や少女の話だ。三日とか、一週間の謹慎処分が晴れて解けて、登校する際、この日付けない退学届を提出するのだという。そして再びあやまちを犯したとき、即座に日付けを入れ、自主退学は成立する。

少年Dの父親は、この届に納得できないと、押印を渡した。まともな教育機関がやることではないと憤然とする父親に、Dは書類がそろわないと、明日から登校できないからと懇願した。

やがて半年後、Dは校庭で喫煙していると、見とが

められ、職員室にひっぱられ、退学届に、日付けだけを書き込んで、学校を追われたのである。

大検コースの生徒募集と選考について、前述のK氏は、「偏差値はあまり問題じゃありません。要は本人の学習意欲です」

と語るように、意欲こそ、人の能力を測るにふさわしいとしたら、

「あそこは、中退生のなかでもエリートが集まっているところですよ。あんなところで、中退生の話聞いたって実態はつかめませんよ」

となかば抗議するように、私を批判したS氏の悩みは深刻だ。彼は中退者の親でつくった会の発起人である。

彼の息子がなぜ、高校に行かなくなったのか、今もって理由はわからない。学ぶ意欲の有無すら、外側からは判断しにくい。親よりも大きくなった身体で、怠け者のように一日中家の中に閉じこもっている。その責任追及で夫婦の仲までおかしくなる。

小学校、中学校でも存在する登校拒否症だ。小・中学校では落第もせず、気長にとり組んでくれる機関を通じ、見事立ち直り、二、三年のブランクはとりもどしたというケースを知っているが、高校の場合は中退で片づけられてしまう。小・中学生なら、先もあると、親は多少の余裕も持てるが、

成人間近い年齢の高校生となれば、親の苦悩も測りがたい。「わが子は、人と違って回り道をしながら、清らかな小川を探し求め、鳥のさえずりに耳を傾けようとしているのではないか。それならいつそ、親も価値観を変え、子どもとともに一緒に歩いて、進む方向を考えていこう」と呼びかけるS氏。

それでも、と、私は思う。中退生にエリートがいるなら、中退生をもつ親にもエリートはいる。S氏もさしずめその一人だ。子どもが中学を出るまではとがまんしていた母親が家を出たり、離婚したりが自立つのもちょうどこのころ。家庭崩壊のはざまで、心の支えや、生活の基盤を失い、学校どころではなくなってしまう子どもいる。家庭から、学校から見放され、社会に放り出されている未成年中退者の生活実態は深刻だ。

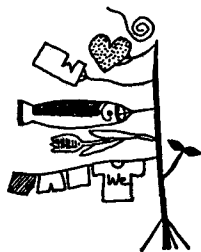
水商売の女と同棲し、「金が欲しくなると土方をやって二十万円くらい稼ぐから」とシンナー吸いながら青白い顔であどけなく笑った十七歳のE。

教育のゆがみ・ひずみが形となって現れたような中退生。学校と社会のかけ橋もないところに、落ちこみもがいて中退生。文部省の調査によれば、六割は「やめてよかった」「今の生活に満足している」と答えている。

(たにあい・のりこ フリー・ライター)

教育に点数はいらない

竹見 智恵子



勉強には、テストや点数がつきものの？

学校で勉強すると、そのあと必ずテストがあり、テストの結果は点数となって子どもたちに返ってくる——、全国どの学校に行っても変わらないこのパターン。

私たち親の世代もテストや点数は学校につきもののだったし、またその親の世代も同様だったので、勉強をすれば、その結果をテストでためされたり、測られたりするのはいくらでも、という考えが私たちには体質のようにしみついてしまっています。

でも、ほんとうにそうなのでしょうか。勉強して得た知識や教養は、いちいち測ったり、点数をつけたりしなければな

らないものなのでしょうか。

学ぶということには、それ自体よろこびがあります。書物や他人の話から、自分がそれまで知らなかったことを知っていく過程は、なんだが自分の内側がひらかれ、ふわあっと自分ひろがっていくようで、いくつになっても、それはほとんど本能的といってもいいようなうれしさがあります。胃袋がいっぱいになると人間ってしあわせなように、知袋（そういうものがあるとして）がいっぱいになっても、しあわせを感じるのだと思います。

ところが、そうは思わない人たちが「学校」をやっているのです。人間というものは、特に子どもというのは、尻をたたかないと勉強しないものだとその人たちは、テンから信じ込んでいるようです。これは、自分がそういう性癖だからな

のか、それとも自分たちエリートはともかく、一般愚衆は牛馬のように尻をたたかないとダメと考えているのか、とにかく文部行政をつかさどる文部省やその司会で忠実に動いている学校現場には、この「尻たたき」思想が動かしがたく存在しています。

この「尻たたき」思想は、親のあいだにもすっかり感染してしまっているようです。「ホントニ、うちの子はなまけもので……」とか、「この子ったら、言われないと何もやらないのだから……」と、不遜にも、子どもをなじる親がいます。ついこのあいだまで、好奇心いっぱい、「なぜ?」「どうして?」を連発していたわが子の姿に目を細めていたのに、よその子との比較に一喜一憂しているうちに、子どもを見る目に「狂い」ができてしまうのでしょうか。

ともあれ、勉強したらテストをするもの、テストをすれば点数がつくもの、と思い込んでいるおとなたちが世の中には満ち満ちていて、そのおとなたちが熱心に教育すればするほど、子どもたちはますます不幸になっていくという構図を作り出しているように見受けれます。

いつの間にか、点数中毒にかかっている

子どもは、尻をたたかなければちっとも勉強しないという

「尻たたき」思想を端的にあらわしているのがテストであり、点数ではないでしょうか。

もう七、八年も前のこと。息子が入った小学校ではテストをしても点数がつきませんでした。そのことを茶飲み話の時に友人に話したら「へエー、テストをしても点数がつかないの。それじゃ子どもたちはもの足りないんじゃない?」という返事が返ってきました。別に尻をたたくつもりはなくても、いっしょうけんめい勉強してテストを受けたのに、「点数がつかないなんて、それじゃあ、もの足りないわ」と感じるのには、ごくごく一般的な受けとめ方のようです。

でも、ここに、テストに点数がつかないことをとつても新鮮に受けとめ、点数があるとないとではこんなにちがうと書き残している少年の文章があります。

東京・三鷹市にある私立明星学園では、一九七八年度から学校の方針としてテストに点数がつかなくなりました。テストをやっても、あっている答には○、まちがった答には×がつくだけです。この時期にたまたま中学三年に在学していた照井伸也君と原田実基夫君は雑誌『ひと』にのせた文章の中で次のようにいっています。まず原田君は、「(テストに点数がつかなくなつて)自分のわかつていないところを直視できるようにになった。というのは、点数がついていた時は、80点以上の点数をとると、わかっていない20点ぶんのところを見

のがしていた。というより「いい点数をとれた」で、そのテストはもうしまいこんでしまつて、わからなかった20点のところをやりのこしてとおりすぎていた。点数がなくなると、ヤケに×になっている問題が目につく。だから、点数というものがテストにつけてあると、そちらに目をとられて、かんじんの、わかつていない問題が見えなくなつてしまふ」といっています。

同じようなことを照井君も感じたようです。「いままでのように点数をつけると、その点数だけしか見ないで、どこをまちがえたかよく見なかったのである。それが○か×かだと、そこをところをよく注意してみるようになったのである」。

つまり、二人がそろつて言っているのは、テストに点数がつくと、その点数のよしあしだけが気になつて内容はどこかにすつ飛んでしまふ。反対に、答があつているものには○、まちがっているものには×がついているだけだと、「あれ、ここはどうして×なのだろう」と、まちがえた箇所を見直すようになるというのです。

これはとてもだいいじな指摘です。もし、テストをする目的が多くの専門家がいうように、授業で学んだことが子どもの身についているかどうか確かめるため、あるいは教師の側からいえば、自分が教えたことがそれでよかつたかどうか確認

するため、というのであれば、子どもにしてみれば、自分はここはわかつていけるけれど、こつちはまだよくわからないとか、教師なら、この部分はクラスの大多数が理解しているが、この点はまだわからないようだ等と、授業内容とテストの結果の関連こそ検討されるべきであつて、点数をつけることなどまったく必要ないということになります。

点数が人と人とを分断する

点数をつけることに關して、照井君も原田君も、他にもたいへん興味深いことを書いています。点数を競い合うことの弊害は、たとえばいじめをめぐる論議などでおとなちもとりに上げていますが、照井君はそのことを自分の言葉で次のようにいっています。「(テストに) 点数がついていると、100点をとつた人と50点をとつた人とのあいだにすきまがあいちゃうと思う。『あいづは100点をとつたから、オレみたいに50点しかとれない人間とはちがうんだ』という意識がいつのまにかできあがつてしまふと思う。そして、比較的に高い点数をとる人はとる人同士かたまり、比較的に低い点数をとる人同士かたまって、クラスの中にいくつものグループができてしまふと思う」といっています。点数がクラスの仲間を分断してしまうようすを「すきまがあいちゃう」といういい方で表

現しています。学校で学ぶということは、独学では得られない仲間たちと共に学ぶという大きな意義を持つているわけですが、点数はここでもいらぬ邪魔だてをして子どもたちの共学の道をはばんでいるわけです。

また原田君は、テストに点数がつかないものの足りないのでは、という一般的風潮に答えるかのように、「(テストに○と×がついてくるだけで点数はついてこないが)、でも、ぜんぜん不便ではないし、不満ということもない」と言い切っています。そして、今、世の中全般点数が満ちあふれ、いずれ自分たちもそこに出ていくわけだが、「でも、もう、たとえ点数がついていても、自分がわからないところをちゃんと見つけ出せるだろう。そのテストが80点以上だろうと、50点以下だろうと、何点であろうと、わからないところをもう一度やりなおして、その問題の答を出して、なぜ、その答えになるかという理由をわかっていけるためのテストにすることができよう」と頼もしいかぎりの感想をのべています。点数がつく授業と点数がつかない授業の両方を体験したこと、だいじょうぶ、これなら点数に満ちた世の中でもまどわされることなくやっていけると感じられたのでしょう。真に学ぶということは、学んだことを知識としてそのままあたまに詰めこむことではなく、学んだことを血肉にして生きる力にしていこうことでしょう。それには点数で追い立てなくたつ

て、いいえ、点数を追い払ってこそ、じゅうぶんな、真に生きる力となる勉強ができるのだと思います。

ところで、「点数のない教育」について考え続けていると、テストだっていらぬのではないかという考えになってきます。学ぶことに根源的なよろこびが感じられ、授業の中で知袋がじゅうぶんに満たされれば、「学びっぱなし」でもいっそうにかまわなはずです。

ところがそうもいかないという事情があります。それは、学校にはただ子どもたちを教え育てるだけではなく、一定の学業を終了したと認定する機能があるからです。ここが町のカルチャーセンター等とはちがう、学校の学校たるゆえんだし、学校からテストを追放するわけにいかないと教育の専門家たちがいう根拠です。

でも、ほんとうにそうなのでしょうか。次の機会にはテストはどうしてもなくせないのか、そのあたりを書いてみたいと思います。

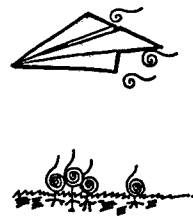
(たけみ・ちえこ「点数序列のない学校をつくる会」会員)

学校―絶望？ 希望？

―批判と攻撃でない

もう一つの活動のやり方を学校で学ぶ―

平 井 雷 太



息子は六歳になると、地域の区立小学校に通い始めました。「今の学校はひどいところだから」と息子を説得して学校に行かさない程の勇氣もなく、息子の希望するままになりゆきまかせで行かせた学校でした。というより私が学校の肩代わりをしてわが子を見るなんてそんなしんどいことはしたくないというのが本当のところですよ。かといって自由教育を看板に掲げている理想(?)の学校に行かせ、特別のいい(?)教育を受けさせる気もありませんでした。

いい教育、いい教師によって子どもがいい子になるなんて思えない、学校ばかりでなく教育的行為そのものになんの期待も持っていなかったからです。どうせ期待していいい学校なのですから普通の学校でいいと思ったのです。

塾をしながら、学校で傷ついているたくさんの子どもたち

と出会い、また数学教育協議会や幸福学園運動(日本にイギリスにあるサマーヒルスクール〔A・S・ニール〕を創る運動)の中で出会った数多くの先生方からも、いかに学校が荒廃しているかの話をさんざん聞かされていきました。息子が公立の小学校に入るにあたって不安になる情報しかまわりになかったのです。にもかかわらず、学校に息子が通う日が近づくにしながらって小学校が楽しみなってきたのです。

入学前、息子に私は勉強を教えませんでした。息子が独力で学習出来る教材を作成しただけ。教材で育った息子が学校でどう振る舞うかがまず第一の楽しみ。そして、第二は「問題の学校」をいつ私を感じるかが楽しみになったのです。

とはいっても、学校の父母懇談会に顔を出すのは気がひけました。平日の昼間にノコノコ私が顔を出しては、「教育熱

心な父親」か「暇な自由業」と思われる。まして、そこで何か発言しようものならよほどの変人かと……そんな中でPTAの委員でも押しつけられたら冗談じゃないと意識的に顔を出さないようにして無関心を装っていました。しかし、ある日こんなことがあったのです。

懇談会から帰ってきた女房が話すのです。「A君のお母さん、仕事を辞めるように先生に言われたんですって。A君が落ち着きがなくて、椅子におとなしく座っていないのは、母親が家庭にいないので情緒が不安定になっているからだっていつてたらしいわよ。クラスで落ち着きのない元気な子どもは、みんな学童保育の子どもなんですって」。話を聞きながら怒りがこみあげてきて、気が付いた時には学校に電話をかけていました。そして、教師に本当にA君のお母さんに対して仕事を辞めるように言った事実があるのかどうか確認しました。こんな話を聞かされ、息子を学童保育に預けている親としては、黙っているわけにはいかなかったのです。電話ではラチがあかず、学校まで出掛けていって教師に真意を正しました。

「学童保育の子どもたちを差別はしていません」と繰り返すのみ。謝罪の一言もないのです。仕方なく教頭・校長にまで話を持ち込みました。その結果、校長が自分の学区の学童保育所の場所がどこにあるかも知らず、家庭訪問の時でも学童

保育に通う子どもたちのことをなんら配慮していないことも明確になりました。学童保育の子どもが学校の意識の中になかったのです。この先生の発言がきっかけになって問題点をはつきりし、事態は好転しました。おかげで、それまで開かれたことのない学童保育の指導員と小学校教師、父母を交えた交流会が開かれるようになったのです。

こんなことが学校に関わりを持つきっかけになって、息子が二年生になった時に初めて日曜参観日に出席したのでした。ここで問題が起きました。

算数の授業参観の後、懇談会で誰も発言する人がいないのをみかねて、よせばいいのについこんなことを言ってしまったのです。

「今日の授業は大変興味深く拝見させていただきました。3ケタ・3ケタの引き算で間違えた答えを黒板に書き、どうして間違えたのかを子どもたちに発見させるという授業でしたが、よく子どもたちが発言して楽しそうでした。でも、一つ気になったのは誤答の例を学習したあとで、その間違いと同じ間違いをする子どもが増えていたことです。このような授業は十歳以上の子どもには効果的かもしれませんが、小二の子どもには不適當のように思うのですが、いかがでしょうか？ この年齢の子どもは真似て覚えるのが一番得意ですから、間違え方まで真似てしまったと思うのです」

先生はどう答えていいか戸惑っている様子で黙っています。気まずい沈黙が続きました。その沈黙を破って進行をしていたPTAのクラス委員の方がこう言ったのです。

「そういう発言は、先生の授業への批判になりますから止めて下さい」

「先生を批判するつもりで言ったではありません。何か意見がないかと言われたので感想を言っただけです。思ったことを言わずに帰るより、授業をみてどう感じたかをはっきり話す方がいいと思ったから言ったまでです。それよりも、せっかくの意見をそうやって制止することの方が問題ではないですか。そんなことをするからPTAでは本音の話が出来なくなるんですよ」と私はきつい調子で反発しました。その場はそれで終わったのですが、その数日後いろいろな人から言われました。

「また、あなたPTAで問題起こしたでしょ。昨日の運営委員会では大変だったそうよ。二年生に問題の父親がいるって評判よ」

たったこれだけの発言がこんな問題になるとは、本当にPTAとはうっかり口もきけないところだと思ったのです。その頃学童保育の父母会で熱心に活動していましたから、その雰囲気の違いに愕然としたのです。しかし、学童保育の父母会には熱心でも、PTA活動にはまるで無関心。「どうせP

TAなんか」とあきらめてしまっている一部の親の姿勢にもなじめないものがありました。そこで本気でPTAに関わってみる気になったのです。

息子は三年生になり、クラスも担任も変わっていました。また、気になることが起きたのです。学年で毎月発行している通信にこんなことが書いてありました。

「忘れものが多くなっています。忘れものが多いいのは親の責任です。家庭で十分配慮して下さい」

なぜ親が子どもの忘れものの心配までしなくてはいけないのか。冗談ではない、と思ったのです。しかし、これを日曜参観日の後の懇談会で言ってはまたみんなのひんしゆくを買うかもしれません。問題の親だとのレッテルがついては地域で塾をやっていくにも支障があります。そこでどうするか、去年の失敗を繰り返さないためにはどうするかを考えてみました。

なぜ問題発言になったのか？

私がいくら批判ではない、単なる意見として提案しただけだと思っても、相手にはそうは伝わらなかったわけです。ということは、私の気持ちの中に、教師を困らせてやろうという気持ちがあったから批判として伝わったのでしょう。たくさんいる父母の前で、経験の少ない教師を経験のある塾の教師がはじめた。そこで、これはまずいとPTAの委員さんは

私の口封じにかかったというわけなのです。本当に教師のことを考えていたなら、教師を育てたいと思っていたならこんなことはしないはずです。ここで言わなくても、教師と二人だけの時に話してもいいはずですが、でも、そうしなかった。私の方が教師より、物を知っているぞと親の前で披露したかったのかもしれない。先生に恥をかかせることで、それが塾の生徒増につながるかもしれないという計算もどこにあったと勘繰れば勘繰れないこともないのです。

考えれば考えるほど非は私にしかなかったと結論するしかなかったのです。

それから、私の学校への関わり方はまるで変わりました。一切の批判を止めたのです。忘れものを親が注意する件について事も事前に担任に会って話しました。

「いろいろな親御さんがいますから、学校がこう書きたくなる気持ちも分かりますが、うちでは本人に一切任せています。どんなに困っても、困るのは本人なんですからうちの子どもが忘れものをしてほっておいて下さい。ただこんな書き方をすると、学校に行く前に必ず忘れもの点検する親が出て来るのではないですか。今度の懇談会でこんなことを話題に出したいのですが、よろしいでしょうか。先生や学校のやり方を責めるつもりで言うわけはありませんし、このことでクラスの他の親御さんがどう考えているか話し合えたらと

思っている問題提起ですから気にしないで下さい」

「実は忘れものことでは困っていたんです。教科書を忘れたり、鉛筆まで忘れる子どもがいるんですから。かといって貸せばいつも忘れるし、忘れものを表にしても忘れものが減るわけでもないし……是非話題にして下さい」と、先生の方が意外なほど積極的です。そこで、こんな提案もしてみました。

「先生は学級通信を出される気持ちはないですよ。今、クラスの親で学級通信を出そうという話があるのですが、そんなことは可能ですか？」

思いもかけず、OKの返事。この後、この学校始まって以来親の手による学級通信「O—E—N号」が二年間にわたって出るようになりました。その後、PTA委員を引き受ける羽目になるのですが、三年間の活動は、私にとって自分自身を変える上でとてもなく貴重な体験となりました。自分のやりたいことをやり、言いたいことを言って、それが通らなければ他を批判するというような態度ではつとまらなかったからです。

私は、PTAに関わることで批判と攻撃でないもう一つの活動のやり方を学ぶことができました。絶望しながら関わった学校での最大の収穫でした。

(ひらい・らいた すぺーすらくだ主宰)

子どもたちは訴える

水流恵子

私は相談員として、様々な訴えを持つ子どもたちやその家族の方々と会ってきました。相談員として子どもたちにかかわっている私が、「子どもたちは訴える」と、子どもたちに代わって言える立場にあるのかどうか、おそらく子どもたちからは「ちがうでしょう」と言われそうな気がします。それでも、家族でも学校の先生や友だちでもない立場から出会う者の一人として、訴えの一部を伝えるように思います。

相談の内容はいろいろで、子どもたちをとりまく状況も個々に異なっています。ただ、子どもたちが相談にくる時の状況というのは、「今の私は生き生きしていませんよ」「今のままでは嫌だよ」「なんとかしたいよ」「なんとかしてよ」と、言っているように思います。

例えば、「学校に行かない、行けない」という場合についていうと、学校に行かないでいるその事が訴えである、と言えるでしょう。登校していない事実を見つめることができ、生

き生きと生活できる場を新しく求めているのなら、かわるまわりの人たちがその意志を尊重し、何らかの形で支える力を持つていかどうか、問われるのではないのでしょうか。

一方、「登校したいのに登校できない」「登校しなければならぬのにできない」という思いの中で、日々の生活を辛く感じている子どもたちもいます。登校しなくなってきたきっかけは、腹痛、微熱、朝起きれない、対人関係でのトラブル（家族・友人・先生）、学習の不振、けがや病気をきっかけに、学校のテンポから遅れてしまった感じなど、あげられます。

子どもたちとは、本人が直接訪れたり、電話してきたり、家族に誘われたりしての出会い、また家族の依頼によって、家族のやりとり、電話、家庭訪問という形をとることもあります。

私は、最初に会った時、自己紹介の後、「何がきっかけで、誰に誘われてこようと思ったの」と聞いたりします。そのことがきっかけで、その子の今いる状況の話を聞ける場合もある

りますし、やつとの思いできたかもしれない時、「会えてよかった。何か一緒にできるといいね。何か好きなこと、見つけられるといいね」ということを伝えるだけの場合もあります。次の機会にまた会えることや、出した手紙が破られずに読まれているらしいことは、その子のいる状況を変えていく、何らかのきっかけになるかもしれない、という思いに支えられてかわり続けていきます。何でもいい、少しでも気持の動くこと、例えば本を読んだり、絵を書いたり、卓球をしたり、ゲームをしたり、お菓子をつくったり、赤カブの種を蒔いて育てたり、話をしたり。

子どもたちと経過をふり返って話し合う時、「学校に行っていないことがとてもみじめだった」「同じ年頃の子どもたちのように、友達と話をしたり、買い物をしたりしてみたかった」「このままでどうしよう。どうなるのだろうと思うと辛かった」など、出てきます。そのような状況での孤立感、その状況にいる人でなくてはわからないのでしょうが、恐ろしいほど深いのだと思います。登校できなかった過去にとらわれ、これから先の可能性も見い出せないまま、どうしたらいいのだろう、という気持の中で今の時を過ごしている。

どうしてそこまで追い込まれたのだろう、家庭も学校も地域のどこも、支える力とはなり得なかったのだろうかと私は思っています。そして学校へ行かないことが、なぜこれ

ほどの挫折感・孤立感をもたらすのか。この世に生きて学校だけが全てではないのに、と外にいる者には思えても、現実には生徒である子どもたちにとって、学校とのかかわりがなくては、社会との大きな絆が断たれたように思えるのではないのでしょうか。自分にとってかけがえなく大事な人とのかわりが、崩れてしまったと考える時、全ての人とのかわりもまた崩れてしまうように思えるのではないのでしょうか。

今、生きている自分をいとおしく、かけがえのないものと思えること、自分を支え、自分もまた支えている人たちに気づくこと、自分の心と身体を生き生きとさせること、そのためには人とのかわりが大切なことに思えてなりません。

身近な親しい人とのかわりをより豊かに育む場合もあるでしょうし、今まで近いと感じていたものと、距離を置いて新しい出会いの場で体験を育ていく場合もあるでしょう。

そして、空想や本や映画の中のことがらのように、もともとと現実から離れたところで、自分と自分をとりまくものとのかわりを見つめなおしていく場合もあるように思います。

多くの子どもたちは人と共にいるうれしさ、人と共にふるまうことの楽しさ、人と共にいるからこそ、些細なことでもおもしろく思える事をよく知っているように思います。だからこそ、それが実現されない時の悲しみは一層深いのだと思います。自分らしく在ることを自分自身で、また人からも認

められるような集団であれば、そのかわりは、どんなにか多様で、自分も、人をも豊かに育て得るものとなるでしょう。現実にもそういうことを目指している場や活動が、家庭や学校や地域の中にあり、そこで支えている人たちがいることを思いながら、相談の場での子どもたちの訴えは、相談員である

私、家族の一員であり、地域に生活している者の一人としての私への問いかけと思えてきます。相談の場で出会った子どもたちとの、今、ここでのかわりを大切にしながら、それがより拡がりのあるものとなるよう、育てていかなければと思います。

「若さで勝負」——のタイトルを考えていた編集部には『何を血迷っているのか』にしたいとお返事がきた。ガーンと頭を叩かれた思いだった。

We.の創刊2号目に、JES(日本教育規格)

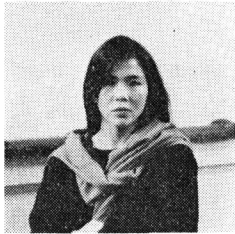
について書いたのが、17歳の時、日本の教育を手厳しく批判している。「あの頃のほうが、今より理屈っぽかった」と笑う。

まだ登校拒否がメジャーになっ

ていない頃、高校を一年で中退。高校に行かなくなつて「解放された気分」だったと。
「両親は、弁護士の井田邦弘・恵子氏。私はワルだったでしょ。それを周囲から、母親が働いているから、家にいないからと見

られるでしょ。母が、がんばっているのをマインスイメージでとられるのが、すごくイヤだった。女が働くのは、権利として当然だと思っていましたから」

〈何を血迷っているのか〉の 井田 朋子さん



中退後、アメリカ全土を四カ月半、バス旅行。「怖くはなかった。かえって日本にいて周囲からの窮屈さから離れて、予定の期間の二倍、楽しんできました」

昨年、大学を受験して、今年二年生。哲学を専攻。

「学びたいと思うようになったら、大学は行きたいと思っていたので、大検はとっておいたの。大学は学ぼうと思えば、いくらでも学べるどころ。大学生活はとても楽しく、今は学びたいことがいっぱい。以前は哲学なんて反感をもっていたんですけど。」

現在に、あまり興味がなく、情報をシャット・アウトした生活にも、不安を感じない若い人。

「詩をかく」ことをライフ・ワークにしたいと、井田さん。そろそろ元気を出したいナーと思っていたので、今回、連載を引き受けたのだそうです。

(青木)

ひと



〈表現〉の中の暮しと子ども

——グアテマラ高原・手織りの世界から——

吉田 敦彦

御依頼のあったテーマは、「子どもたちは表現する」だった。「表現」という言葉が響いてきて、書いてみたくなった。奥行きのあるステキな言葉だ。この言葉を伸びやかに使ってみることで、「学校」や「家庭科」「人間生活科」を語るときに感じる息苦しさが、少し解き放たれるような気がした。人間が生きているということは、つまりは表現していることなのだろうと、そう思う。

ふとある風景が蘇る。中米・グアテマラ高原の山あいにアティトランという名の湖がある。豊かな湖水を深く湛え、周囲の山々を静かな湖面に映す。この湖に寄り添うようにして、ここにも旧くから人間が棲みついていた。高地マヤ族と呼ばれる人々。男たちは、湖に舟を浮かべて小魚たちの影を追う。山に分け入って薪を担ぐ。そして女たちは……。

女たちは、朝早くから母や姉の家へ集まってきて、その軒

先で手織りを始める。傍らに子ども。サンホルへという小さな部落を歩いていたときのこと。彼女たちが織り込んでいる色彩に目を奪われて、ある家の前で立ち止まってしまった。色が日差しを照らし返して樹々の緑と交響する。しばらくして一人のおばさんが立ち上がってこちらに近より、少しはにかむように、何がほしいのか、と尋ねる。見せてほしい、と答えると、庭の中へ招き入れてくれた。静かに腰をおろす。日だまりの中で手仕事が続けられる。リズムのあるあざやかな手つき。浮かびあがってくる色模様。楽しい。すると、そこにいた女の子が小走りに庭をとび出していった。すぐに一組の織りかけの織物と道具を抱えてもどってくる。お母さんに手伝ってもらって一方の端を軒に吊り下げ、他方の端をしっかりと自分の腰にゆわえつけて縦糸を張りつめる。そして居ずまいを正して構える。チラチラとこちらを伺うようにし

ながら織り始めた。三分の二ほど織りあがっている。お姉さんたちのものと比べても見事なものだ。幅は女の子が両手を伸ばしてやっと届くほど広いし、糸の色も多様で模様も複雑だ。きれいだね、上手だね、と声をかけると、彼女はクリクリとした目を輝かせて、真直ぐにこちらを見つめ、誇らしげにほほえんでみせた。

十歳になったその子は、この大作を完成させたとき、一人前の大人の仲間入りをするのだという。手つきこそまだぎこちないけれど、ときどき手ほどきを受けながら、じつと糸を見つめて横糸を縦糸に通し、両手を伸ばして板を握りしめ、懸命に糸を絞めあげていく。その一本一本の横糸が絞められるごとに、彼女は一步一步着実に大人になっていく。彼女の身体的な動作そのものはそれほど大きくはないのに、一つ一つの動きのなかに、生き生きとした生命があふれ出していく。躍動し生成する生命。それが彼女の小さな身体を通して「表現」してくる。生命を「表現」していくことが、人間が人間になるということ。「表現」という言葉をこんなふうに使ってみたくなる。

彼女を通して「表現」されてくる生命は、一枚の織物の中に織り込まれて、具体的な生活の中に結実していく。それは抽象的な虚空の中に霧散するのではない。人間が生命を「表現」する、そのことと日々の暮しが一体となっている世界。

「表現」の中に暮しがあり、子どもがいる。そのような暮らしの中では、暮しの厚みそのものが子どもを育てる。子どもは、自分が大きくなるということが、この世界の内に自らを「表現」していくことであることを、具体的な手応えをもって知ることができる。

彼女たちの織物を見ると、ただキレイだではすまない不思議な力を感じる。原色を組み合わせた強烈な色彩。織り込まれた様々な生き物たちのユニークな図柄。その、ときに幻惑的な色彩は、薬草による陶酔状態で見える幻覚に由来するのではないか、などと近代人は言ったりする。意識の底の深みから、生命の根っこから噴き上げてくる生々しい原色の世界。視ることのできないものは非合理なものとして脱色し漂白してしまった近代的な意識には、幻覚としてしか見ることでできない世界を、彼らは日常の生活の中で息づかせている。その世界の中に彼らは、混沌とした魔性だけではなく、すべての生命あるものたちが共存共生する調和的な宇宙の秩序を見てとっているのではないか。そしてその生命のコスモスを織り込んで身にまとう。彼らの風姿が一つの小宇宙として「表現」してくる。

「手織りの世界」と「機械織りの世界」。「手織りの世界」では、糸一本ごとに「表現」されてくる生命と出会い、宇宙と対話しながら、織物を織るその過程自体を生き尽くしていく



編集室からあなたに I

◆'88年度夏季フォーラム、楽しい企画を立てよう！

すてきな人との出会いの場として、大人も子どもも楽しみながら学ぶ場として、大勢の方が楽しみに待っていて下さる夏季フォーラム。関西の方たち、お待たせしました。今年は大阪です。大阪といっても、自然がふんだんに残っている能勢、清流猪名川の上流、背後に行者山・剣尾山を控えたルーテル能勢研修センターです。12,000坪の敷地に恵まれ、Weの活動にはぴったりの環境です。ぜひ、この夏のプランに組み入れておいて下さい。

- 期日 8月6・7・8日(土・日・月)
- 場所 ルーテル能勢研修センター (〒563-03 大阪府豊能郡能勢町山辺409 ☎0727-34-0157)
- 交通 阪急宝塚線「川西能勢口」で能勢電車に乗り換え「山下」下車。山下駅から阪急バス「能勢町宿野」行、終点にてデマンドバスで「能勢の郷」へ。
または、「能勢の郷」行乗車、「能勢の郷口」下車。
タクシー利用の場合、山下駅から約20分。
車利用の場合、大阪・京都・神戸から約1時間半。
- テーマ “ゆたかさを紡ぐⅡ”

一ひとがひとと向き合うところで――

- 実行委員長 入江一恵さん (☎078-912-0482)
多彩な実行委員の方たちが、何回となく集まって、プランを練っていますが、ぜひアイデア、分科会・交流会、子ども活動の希望などをお寄せ下さい。直接入江さんのもとへでも、ウイ書房へでも結構です。なるべく至急をお願いします。企画が完成してしまわないうちに。
詳細なご案内は、7月号、8・9月号にチラシを綴じこみますから、お早めにお申し込み下さい。

◆ウイ書房7冊目の単行本は

羽生慎子さんの詩集です。

タイトルは『木、鳥、娘たちとわたし』すてきでしょう？ Weに書いて下さった作品を含めて。羽生さんのほんものの詩の世界は、このせわしい、トゲトゲしい、世の中でいら立つあなたを、柔らげ、うるおすことでしょう。5月半ばごろでき上がります。予価1000円、あなたはもちろん、ぜひお友達へのプレゼントにもなさせて下さい。羽生さんは、毎号Weをていねいに読み、必ず感想をお寄せ下さいます。Weの読者の方を知りたいから、と。Weに書くことで詩の世界が広がりましたと。うれしいことです。

ことができる。一人びとりの織り手の個性を「表現」することもできる。「機械」は、効率よく結果を得るためにできるかぎり過程を省略し、画一的な規格品を大量に製造する。「機械織りの世界」の中の私達の「学校」。

「手織りの世界」の「表現」的な豊かさとは経済的な貧困。機

機械織りの世界「の「表現」的な貧しさとは経済的な豊かさ。二つの世界の二者択一ではなく、二つの世界を一つにして生きていく道はどこにあるのだろうか。その道を私達の前に切り拓き一歩ずつ踏み固めていくこと、そこに、この国でこの時代を生きる私達自身の「表現」のあり方を見出していきたい。

学校って、なんだったんだろう

—大学卒業を前にして—



今年の春に某女子大学を卒業することによって、十六年という長い学校生活と決別することになっている四名の女性が話し合いました。O（私）、Rさん、Yさん、Lさんの四人。全というのは、全員が口をそろえて言ったということです。

○ ○ ○ ○
O みんな、今年の三月できっぱりと学校というものからお別れするわけだけど、今頃になってでもふつふつ湧いてくる感慨なんかありませんか？

L 大学の時もっと勉強しとけばよかったな
って思う。卒論にしたって、もうちよつと時間があったら何かしうがあつたらうけど、あれは、妥協なものもあつたもんじやない。

でも学校っていつても大学だけじゃないわね。

O うん、そう。でも、自分の中学、高校時代って、大学に入ることがすべてみたいなのこなかった？ 中学の時も高校の時もすごく笑ったし、楽しいことも随分あつたけど、成績なんかのことがいつでも心を支配してて、ひきずってて、心の中がどことなくどんよりしてた。

Y 私は、どんよりどころか高校の時、思い出せないくらい思い出ないの。笑ったこともないくらい。

O え！ 笑ったことがないノ

Y というのは大袈裟だけど、学校へ行って家へ帰って来て、ただそれだけの繰り返しで、学校は、大学へ入る前のただの踏み台

たいなものだった。だから、大学へ入ってほんとにいろんなことやろうと思つてたの。

L 私は、そんなに切羽詰まつた受験勉強という感じじゃなかったけどな。周りが勉強を楽しくやつた節があるし、私は大学より高校の方が好きだった。まだ、あの頃の方が純粹だったっていうか、何ていうのかな、今にして思えば、なんであんなことで腹立てていたんだろうということになることがあるけど、

大学に入るとそういうことは、ああ、これはこんなものなんだなあつてすませてしまふ。

O Lちゃんのお父さんとかお母さんは、Lちゃんの大学行きについてどんな風に思つたの？

L 学歴とかにあまりこだわらない人たちで、大学自体も行こうがどうしようが何もいわなかった。兄貴なんか大学へ行つてない。

でも私は、小学生の頃から大学へ行こうと思つてた。漠然とだけど、勉強したいと思つてたから。だから、親のプレッシャーなんてなかった。期待もされなかったけどな。

R へえ、みんなそれぞれ違うんだ。私、みんな同じような高校時代を送つたのかと思つた。

Y じゃRさんのはどんなだった。

K 予備校のような学校だった。日曜日には試験があるし、夏休みは課外があるし、三年になったら週に何時間は六時間目終わったあとで一時間、補習やったりとか。これでも、愛媛県では楽な方で、ひどいところなら、朝一時限の前にも課外があった。

それに、男女交際が禁止されていて。例えば、男の子と女の子が二人で町を歩いていたりするじゃない。そしたら、みかけた町の人々が、自転車通学する子の自転車にはプレートがついているんだけど、自転車番号何番の生徒が二人、球場へ向かって歩いていきましたって通報するの、学校へ。町自体からしてそういう町で。気持ちの中でどんよりしたものがあつたけど、体育祭とか文化祭で爆発させたりして。それだけでもなかったけど。

L うちの高校は、課外とかあつたにはあつたけど、やりたい人がやればいいていう感じで。でも担任がのせるのがうまくて、偏差値とか点数とかが上がったらすごく素直に喜ぶ人で、あんまり素直に喜ぶから、ああそれじゃ勉強しようかって。それで勉強したとこがなにしもあらずだなあ。でも、切羽詰まった感じはなかった様な気がするよお。のんきだったんだね。今振り返ってもテスト

がいやだったとかそんなことよりも、楽しかったなあっていう方が残っているから、結果的にはやっぱり高校は好きだった。

Y 私は、年とってから思い出すのはきつと大学時代だと思う。ほんとに自分が期待していた以上の大学時代だった。そのかわり、さつきも言つたけど、高校の時は記憶になくらい不毛で。高校は一応一番いいといわれる高校だった。でも、すごく勉強していたというわけじゃなくて、どこか参つていて。勉強はむしろ大学にきてからの方がやつたと思う。

L でも、大学へ入つて思ったのはさ。テストの時に特にそう思ったんだけど、今までの憶えればいいテストと自分の考えを書かなきゃいけないテストは、絶対勉強の自身が違う。だから、大学の勉強の仕方になれるのに結局四年間かかったという気がする。高校までやってきたことって一体なんなのかしらって感じね。

Y 私もそう。英語なんか勉強したこと全く憶えていない。数学なんてあんまり勉強しなかったのに、むいていたというのがあるかもしれないけど。私は数学科だけど、数学でも、大学の数学と受験のそれとは全然違う。

L 私も大学に入った時のカルチャーショッ

クは大きかった。このギャップはたまらなあって思ったのはさ、私の学科(国文)は、例えば解釈がいろいろあるとするでしょ。でも高校の時の国語のテストなんか、一つの答えを絶対決めなくちゃいけなくて、でも、大学では一つの答えそればかりいってもしようがないのよね。だから、今までのあれは何だったのかしらってなるの。

Y うん、そうだね。共通一次も一コ選べだもんね。あれは絶対テクニクの問題だ。

L なんにも勉強しなくても全問正解だったりしてね。

O えっと、何て言つたらいいのかな。今の大学生って、授業中はおしやべりが多いのに、かんじんな時は自分の意見が言えなくて。それは今までのそういう勉強の仕方が原因でないかとは思わない? 受身っていうか?

Y あ、それは思う。大学に入って目が外に向いたつていうのはそのせいもあるのかもかもしれない。

L 小学校の時は割に意見言わなくちゃと思つてハイハイ手を上げていたじゃない。中学へ入つたらパタッとそれをやめちゃった。

Y 私も、中一くらいまでは手を上げてたけ

ど。

O 私も中一まで。

R 私は、高校でやめた。

Y かつこ悪いって思わなかった？ 手上げたりするの。発表したりするとからかわれる雰囲気なかった？

O 確かにあった。それって一体何なんだ!!

Y それが日本の土壤なんじゃない？

L 小さいころ考えもしないでしゃべったけど、だんだん変な知恵みたいのついてきて……。

O 知恵？

L 知恵っていうか、なんていうか、見栄っていうか変なところで。小学校の時は単純だったのかな。でも、やっぱりあれは何なんでしょうね。

R でも、ほんとにはしゃべりたいと思ってる部分あるんだよね。私も発表したいと思ってたところあった、わかれば。高校に入って先生があてて答えるという雰囲気になってきて、それから、自分では言わなくなった。
O でも、発表とかそういうんじゃないけど、自分の事を、うんうんって誰かにきいてもらいたがってる人は多いなって時々思う。

R さっき、受身って言ったけど、例えば、

反抗とか道はずれるとかやったとしても、その後にくる結末ってだいたい想像がつくじゃない？ それがわかって、それで反抗できないってところあるんじゃないの？ 冷めてるっていうか。それなのになんで反抗できるのか、私にはちよつと思議な部分があったのよ。どうして……。

L でも、中学の時とかそんなにわかってたかなあ、その結末みたいなものを。授業中、シンナー吸ってるやついたよ。

全 えーっ!!

Y でも、私も同じクラスにいた。

O 夏みかん食べてる人ならいたけど。

R 私はマンガ読んでたわ、そういえば。

L 道はずれるといっても、私たち大学まできちやっただしよ。だから、小中高大までいって一流企業に就職してそれが一番いいコースだって思ってるところある。自分の中で。
Y ある!! だんだん似たものが集まってる。友達同士の価値観が似てる。高校卒業してすぐ就職した人だって、同級生の中にもいっぱいいるのにね。

L 自分でも時々なんていやらしいんだろって思うけど、大学まで行っていることが一番だ

ってへんなエリート意識があつて。やだなあ
って思うけど。大学に入るっていうのは、もちろんある種の能力は必要かもしれないけど、それがあつたからといって別にね……。
それなのに、自分の中ですごい拡大解放しちやつて。

Y 私は、親に「あんたには、最高の教育受けさしてあげた」って言われたことがあつたけど、なるほど私は、東京に出してもらつて好きなことやらせてもらつて。家庭環境がそろつてないと大学は行けないところがある。たまたまその要因があつただけで、それで、ここまで続けられたんだと思う。友達で、女の子で四月生まれだから、短大しかだめだつて親に言われてる子がいた。

O 学校といえは、「先生」というものがないわけだけど、例えば、あの先生との出会いが私を変えた!とかある？

全 ない!! 全然ない!!

Y あ、でも私は小学校三年の時に言葉遣いが悪いつてげんこつもらったことがあるの。とても好きな先生で、母親なんかも仲良くしてて、だから授業中になれなれしく「先生、これやって、やって」って言ったら「先生に

そういう言い方はないでしょ」、「ゴツンって。その先生とは今でも仲良くして。でも、それから、私は先生になれなれしくできなくなった所ある。目上の人に対する対応の仕方はその先生からきてるなあと思う。」

O Lちゃん是以前、私は先生に期待してはなかったって言ったことあるけど。

L 先生に期待するの高校の時でやめた。でもみんなほどほどに好きだったけど。一人だけ大嫌いな先生いた。

R 私もうごく嫌いな先生が一人いた。

O その先生が、自分に何か影響与えた？

R そういうわけじゃないんだけど、反抗すると損するっていうこと知った。自分を冷静にみれるっていうか、うまく生きていくにはどうしたらいいかっていうかね。あまり、いいことではないかもしれないけど。

L 先生は、生徒のことそれほど深刻にみてるわけじゃないなって思った。私はわりと中学の時までいい生徒だと思われてて、でも友人に言わせるとあんたのどこが真面目なのっていうの。私は、中学の時勉強できて当番とかもさぼんなかったのよ。先生の真面目でおとなしいっていう基準は一体何だろう。

先生ってみてる様でみてない。過小評価され

るのも、過大評価されるのもすごいやでしょ。先生は勝手な基準つくって、自分のいうこと素直にきいてくれる生徒はみんないない子なんだなあって、私は単に反抗するのがかったるかっただけなのね。

Y うん、私も中学の時、どっちかっていうと先生に重宝がられて、先生の思い通りに動いてた人間だと思った。優等生タイプで、その分、私は友達とかいなかったなあって。小学校の時は先生が絶対だった。先生のいうことと鵜呑みにして。中学の時、髪が長いって先生にチョコキ、チョコキ、どんぐりの様に切られただけど、あの時、全然何にも思わなかったの。今してみれば、あれは人権侵害よね。なのに何も思わなかった。だから、怖いなあって。

「風が吹くとき」読んだけど、あれはもうかわいそうなくらい気の毒。政府がいうからって、最後の最後まで信じて。私、道はずしたくないタイプだったから、先生のいうことハイハイって。でも大学に入ってすべての事にこの人がいうからってだけで信じるのはやめにして、世の中のこと自分で知ろうとしなかったら絶対判断できないなあって思う。教育の問題でもあれ決まりました、こうなりまし

たって言われても、それだけじゃ本当にそれだけ、実はそれが何を示すかっていうことを自分がわかってなきゃ絶対だめだって思うの。

L 社会科の解体にしても歴史的背景とかなんにも知らなかったら、単に名前が変わっただけで、それがなんなのよ、になる。

Y それが示す裏の意味は絶対知らなきゃ。自分の身を守るために知る努力は絶対続けたいかなきゃならないことだね。

(まとめ・大沢和子)

はじめての家庭科は

「よもぎだんご作り」から

岩瀬 志津子

四月、大阪では、桜が満開。花吹雪の校門をくぐって、入学式や始業式を迎える。

新しい五年生が家庭科室にやってくるのは、学校の時間割が決まってから。桜は葉桜になり、校庭のクローバーや雑草は、青々と伸びている。

第一回目は、自己紹介と家庭科でしたいことを発表する。クラスの男子の全員が、カレーライス、ハンバーグやたこ焼きなどの調理をしたいといい、女子の大部分は、ナップザックなどの袋や小物を作りたいという。どれだけかなえられるかわからないと言ってしまう。次に私が家庭科で勉強することを話し、家族の紹介の作文を書いてもらいうちにチャイムがなる。

一週間後の二回目は、校庭やグラウンドの周辺の雑草の話をする。私は雑草の名前に弱くてなかなか憶えられないので、春の七草の本を用意して、これだけは答えられるようにしている。それに、よもぎがグラウンドの西側の土手にとれきれない程、群生しているので、よもぎ摘みに出かける。

よもぎは茎の上のやわらかい葉だけを摘むように言っても、子どもは手あたり次第、枯草なども混ぜて、ちぎってしまうので、家庭科室にもどって種類分けしている間もなくチャイムがなる。専科の授業は、子どもも私も時間割に縛られて、中途半端に終わることがある。あと一時間、このまま続けられたらと思う。摘んだよもぎを一カ所にあつめ、昼休みや放課後に有志の子にきてもらいうよう頼む。次の時間までに、「よもぎだんご」の材料になるようゆであげて冷凍室に保存しなければならぬ。次の時間、子どもたちが、来る時は、もうよもぎがボール状に冷凍されたのを見せられるのでは学習とはいえない。これはよもぎ摘みに出かけるまでの説明に時間をかけすぎるのだろう。校庭とはいえ、土手にのぼつてのよもぎ摘みで、けがをしては大変と、つい注意の口を出してしまう。このあたりの時間の使い方を工夫して、今年は、「よもぎだんご」にするよもぎをさがしに行こう」と宣言して出かけようと思う。摘んだよもぎを洗い、湯をわかつて、ゆ

でてあくをぬき、ボール状にして冷凍庫にいれておく。

第三回目がいいよ「よもぎだんご」作りだ。

前回冷凍しておいたよもぎを前日に冷凍室から出しておくか、当日なら、湯に入れて、溶かすのが早い。ミキサーに水と一緒にに入れて、どろどろのよもぎジュースを作る。

よもぎだんごの材料		
8人分		
だんご粉	400g	2
ヨモギジュース	カップ	少々
水		少々
きな粉	80g	
さとう	56g	少々
塩		

ミキサーの音にどよめきがおこり、粉とよもぎジュースがくぼられると、気持がわるいのか、手を出すのを渋る子もいる。五本の指の間につくのをいやがって水で洗ってしまいう子もいる。耳たぶくらしいの固さというと、

これでよいかと、どの班からも声がかかる。中には水を入れすぎて、どろどろの班もあってたくさん粉を足すことになる。いよいよ形づくりではさらに賑やかになる。こんろのなべの湯をわかすのを、うながしてまわらなければいけない。湯が沸騰すると、火を止めてしまいう子もいる。ともかくも目まぐるしく、調理台の間を見まわらねばならない。

何とか、大中小、様々な形のだんごがゆで上がり、きな粉をまぶしてでき上がり。これは、どの子も喜んで食べる。初めての後片付けを細かく見回りながら、実習は終わる。

新しい家庭科を創るために—小学校では—

なんでもないようなこのよもぎだんご作りが、子どもたちに喜ばれるのはうれしいことだ。家に帰ってすぐ近所でもぎを摘み、さっそく、だんご作りに再挑戦する子もいる。

PTAの役員をしている若いお母さんは、東京から引越して初めてよもぎを知ったという。全国どこでもよもぎはあるはずだ。都会育ちの子どもたちは、こんな経験をしなれば、よもぎに目を止めることなく、おとなになるのだから。

このあとの五年生の授業は、「家庭の仕事」「裁縫箱の使い方」「野菜サラダ」といつもながらの教材での授業が続く。

五年生の教材に「楽しいおやつ」がある。

教科書では、

5年のおやつ学習計画		
4月	よもぎ摘み よもぎだんご作り (実習)	2 (時間) 2
2月	おやつ調べ 牛乳を使ったおやつ (フルーツヨーグルト) (カスタードプリン) (実習)	2 4
	おやつに使われている 着色料の検出 (実験)	2
	着色料の害 (スライド) まとめ、感想文	2

割に簡単にすませて
いるが、私は全部で
10時間もかけてしま
う。子どもたちの希
望では、ケーキやク
ッキー、たこやきな
どが多い。クラス別
に、希望の多いおや
つを作らせたことも

新しい家庭科を創るために—小学校では—

あったが、今回はヨーグルトの種があったので、学校給食の残りの牛乳を給食室からもらい、少しずつふやしていった。

このヨーグルトの種は、昨年、豊中市の家庭科研究会の先輩から分けてもらった。市販のヨーグルトより酸味が少なく味も淡泊だ。人の好みで、このヨーグルトなら、食べられるという人もあるし、酸味や甘味がないのでおいしくないという人もいる。あるクラスの四十三人中、四十一人までが、市販のヨーグルトの方が、おいしいと答えている。市販のヨーグルトは、甘味が強く、フルーツ片が入っていたり、プリン状で食べやすいのだろう。しかし、ヨーグルトの嫌いな二人が学校のヨーグルトの方がおいしいと言っているのに、何

材料（8人分）

フルーツヨーグルトあえ

かんづめ	みかん(中)	1かん
ク	もも(小)	1かん
リンゴ		1こ
キューイ		2こ
ヨーグルト		カップ2
さとう		大さじ2

カスタードプディング

卵	約150g（3こ）
牛乳	300cc(1.5本)
さとう	40g
カラメル用	
さとう	60g
水	30cc

かほつとした。このヨーグルトで、フルーツのヨーグルトあえを作ることにした。二年前より採択された開隆堂の教科書にものっている。これに「カスタードプディング（むしプリン）」をつくることにした。この二つのおやつを作るのに、九十分（二限）では時間が窮屈だが、手順と分担を書いたものを黒板に貼って、仕事の手早く進むように注意をした。

家庭科室はテーブル兼調理台が六台しかないで、一班あたり七、八人のグループとなり、これでは、仕事が少ない、おとなしい子はただ見ているだけだったり、グループに入りこめない男の子は、他の班の同じような子と家庭科室をうろうろして注意されることが多い。よもぎだんご作りでは、一班をさらに半分にして三、四人の班にした。今度は材料の分け方が、少しややこしいので、七、八人の班にした。

いざ実習が始まってみると、手順表の通りにはいかず、材料が配られるとプリン作りより、くだものかんづめをあげたり、果物を切りにかかる子が出てきた。プリンの型にバターをぬるのに、どうしていいかわからない子が多く、バターナイフで、ぬっている。指でぬれば簡単なことを示して、カラメル作りに移らせる。カラメル作りもむずかしい。色づきはじめたらすぐ火を止めたり、カップに流し込むのに時間がかり、途中で固くなってしまう、スプーンでとるもののか

ら固い糸状のべっこうあめができてしまう。もう一度水を加えて火にかけもどして、やわらかくしすぎたりしたのもあった。

こうして、オーブンに入れるまでに、四十分もかかって、三限目のチャイムで驚いてしまった。

フルーツの切り方では、リンゴの切り方が、くし型をただ薄くしただけで、実に大きいので、スプーンで掬って食べる大きさに切り直させる。あとの果物の切り方には目をつぶり何とか分ける段取りとなった。

小鉢の器がないので、紅茶茶碗だから、山に盛っているものもいるが、底に僅かに盛られているだけの子もいる。あとでわかったが、キューイとバナナ、それにリンゴの嫌いな子もいて好きなしか取らないようである。食べ物を平等に分けて、皆で食べることの楽しさは、この子たちにはないようで、それをされたら苦痛なのだろう。ヨーグルトも然り。このヨーグルトなら、嫌いな子も食べられると思っただけだが、嫌いな子（二人だけ）にはよかったが、平等に分けられはおらず、残ってもどってきた班もあった。

プリンの方は、二台のガスオーブンで150°C、30分間焼いた。一台で三段を使ったので、中段は熱の通りが悪く、再度10分程焼いた。フルーツヨーグルトの試食だけで、プリンは給食

新しい家庭科を創るために——小学校では——

時に食べるようにして、給食当番を先に教室に帰して残った人数で後片付けにとりかかり、ようやく実習は終わった。

次のクラスの時もプリンができたのがったのは同じ時刻だった。前のクラスに嫌われたヨーグルトに砂糖を加えて子どもに試食してもらったら、「おいしい」というサインがでたので、それでフルーツをあえた。このクラスでは市販のヨーグルトが好きと答えた三十七人中三十五人までが学校のヨーグルトを受け入れたことになる。やっぱり、子どもの舌を魅了していたのは、「砂糖」だった。甘いくだものを、甘いヨーグルトであえるのは本意だったが、プリンの砂糖を減らすことで、少しでも砂糖のとり過ぎを防ぐことにした。

——あめで毛糸を染める——

この実習の前にはいつも「おやつ調べ」をする。この数年子どもによく食べられるおやつのは、「スナック菓子」である。その種類も増えて、これからもこの位置は変わらないと思われる。そのあとに続くのが「あめ類」だったのが今年少し順位はさがすが、相変わらず多い。このあめの色に合着色料が使われていることを、白毛糸を染めることによつてわかってもらおうというねらいだ。これは八年前、雑誌

「家庭科教育」八月号の中一の実験を読んで、これなら小学校でもできるというので始めたものだが、今では小学校の教科書にも載るようになった。

実験の材料のおやつは、子どもに持つて来てもらった時もあったが、今年は、私が、子どもたちがよく行く駄菓子屋に行つて買つてきた。店のおばさんは、私がそんなことをするとも知らず、「あんまりいいものは置いていないんですよ」と言いながら、売ってくれた。

この実験は、本当に簡単にできる。ビーカーにあとと水を入れて火にかける。あめがとけてきたところに白い毛糸を2、3本入れてしばらく煮て、染まったら水流いするだけ。酢で色止めなどしなくても、何年も色は落ちない。不気味な染料が入っているのを目でみせているが、子どもは、どれだけ理解しているのか、定かではない。今度は直接、食用染料を買つてきて、毛糸などを染めるのを合わせてしてみてもどうかとも思っている。もちろんおやつだけでなく、多くの食物に使用されていることを、市教研の学校給食部会が作った冊子からマスプリして配った。子どもたちは驚きの声を上げて聞いている。中には、「何を食べたらいいの」という声も出る。また豊中市の教育研究所で作成したスライドを、研究会の会員校数だけ、複製したものがあるので、まともに使った。

添加物について、いたずらに子どもたちに不安を与えてはいけないと思い、できるだけ少ないものや色の薄いものを買うようにという以外に言いようのないのが現実だ。

こんな実験や学習をした後、残った色付きのおやつを欲しがって寄つてくる子もいる。なんともむなししい時でもある。

もう一つ、私には、かんづめに關して、ひっかかるものがある。かんづめの缶に表示してある製造年月日の古さである。スーパーの棚に置いてある果物のかんづめで、製造年月日より一年以内というのがめつたにないのはどうしてか。

昨年、私の家で見舞用にもらつたのは、かろうじて一年以内だった。子どもたちにそれを見せると、「古い!」という声上がる。作りたてのかんづめは、どこにあるのだろうか。

また、かんづめにするみかんの中綿は、ある薬品でかしてるといふ。この薬液が、その後の缶みかんに残っていることはないのである。ともかくも、缶みかん等のシロップは飲まないようにしている。これらの疑問を解くべく、もっと勉強して、この学習にのぞみたかったが、八年目の家庭科、少々マンネリか、他の雑用、雑学に忙しすぎるのか、たいてい工夫もせずに終わつた。次回は、「石けんづくり」です。

—私の家庭科—

染めもの（三年共学）

常陸 れい

〈はじめに〉

朝、職員室に入ると私の服に「そろそろ、ろうけつ染めの時期になりましたか」と声がかかります。現在の学校で四年目、一、二年は技術科も家庭科も共学。三年生は週一時間のみ共学です。三年の共学内容は年間通し、前半「ろうけつ染め」後半「保育」にしました。前任校では技術科も家庭科も全面共学でやっていましたが、現在の学校では共学は実践されていなかったのです。一年目の三年生は男子にとって小学校以来の家庭科で、生徒にとっては家庭科Ⅱ食物であり、何か食べられるとひそかに期待したらしいのですが……。

〈染めものをなぜとり上げるか〉

「織物の街—八王子」とは市の観光タイトルですが、昔は繁栄した織物も今は影が薄く、現代の子にはもう無関係なのですが、ファッションに対しての関心は強いので、私もろうけつ染めの時間には、自分のありったけの染めの服を変えるがわる学校に着ていきます。プロが作ったものもあるが、自分でリフォームして染めたTシャツやスカート、修学旅行の時、奈良で古美術商から買った藍染めのふとん地、ろうけつの源流ともいわれるジャワ更紗の服などを着てみます。教室に入るとき、生徒の視線や反応に胸をときめかせ、興味をもってくれるのを期待しながら。

これはろうけつ染めを学校という枠の授業の中だけで指導し、理解させたという事で終わらせるものでなく、日常生活でいかに応用され、実践できるものであるかわかってほしいという私の願いであり、意志表示でもあるのです。時には植物染料である紅花を手に入れながら、理科の教師から染料に使われる植物についての知識を得、社会科教師に地域的な事に関する話を聞き、その事を生徒に伝える。これは単に生徒の知識を豊かにするだけでなく、他教科の教師にも「家庭科」を理解してほしいからです。

新しい家庭科を創るために—中学校では—

図案の考案の時は美術科の教師に事情を話し、生徒への指導助言を求めます。くらしの中の美意識は家庭科のみにとどまらず、ましてろうけつ染めの効果は図案によるところが大きなので美術科に頼らざるを得ません。美術の教師にとつても作品が文化祭に展示されるとなれば無関心でいられるはずがありません。お願いすると、いつも快く返事が返ってきてます。今年は加えてテレビのろうけつ染めの講座をビデオにとり、授業で活用することにしました。そのビデオを見てから数日後、「お母さんもやって見ようって！」と耳うちしてくれた生徒がいました。家庭にもわかつてほしい教科ですから、家族の話題になった事をうれしく思いました。

三年生の生徒は、ろうけつ染めの作品を文化祭の展示で一年の時から見ていたので、ある程度の予備知識を持ち合わせていたのと、授業で参考作品として先輩の作品を示していたので関心を高めました。あわせて昨年は植物染めを夏休みの課題にしました。技法的な説明はくわしくしなかったにもかかわらず、日常生活の中で使っている紅茶、お茶、ウーロン茶、玉ねぎ、カレー粉などや、登下校の通学路、土手などに咲く草花に目をとめて、ヨモギ、コスモス、キツネノカミソリ、クリ、ヤマゴボウの実など自分なりにいろいろ試してみたいようです。自由課題だったので何人位試みるだろうか、私

はあまり期待しなかったのですが、予想外に大勢の生徒が関心を持ち、試しました。

染める糸も、麻、綿、毛など、いろいろで、一人で二十種類の植物で染め、見事な標本を作り、私を喜ばせ、またそれぞれ染めた糸を昨年技術科の授業で製作した簡易織物機で、マフラー、コースター、ポシェット、壁かけなどを織り、りっぱな作品に仕上げました。作品とともに提出したレポートを読むと、友達と一日のんびりとおしゃべりを楽しみながら、河原へ草を摘みに行つたこと、植物図鑑を持ち歩きながら植物の名前を覚えたと、染めあげるまで、出来上がりの色を想像しながら作業を進める時の、あのわくわくした思いや、母親と共に歓声をあげながら台所で仕事をうばいあい作つた事など、染めあがった時の驚きと感動を感じとつたようで、その思いが私にも伝わりました。

〈生徒のレポートから〉

夏休みの課題

使つたもの

○コットンの糸

2たま

簡易おりもの機

○水

適量

○おなべ

○コスモスの花（オレンジ色）約30個

使い方

- 1、コットンの糸をほぐす。
- 2、おなべに水を入れて、火にかけてわかす。おゆがわくまでの間、コスモスの花を花びらだけにする。
- 3、おゆがわいたら、コスモスの花びらを入れて、約15～20分にする。
- 4、おなべから花びらを取り、糸を入れて、15分くらいにつめる。
- 5、火をとめて、糸をざるにあけて、しばらくさまし、さわれる状態になったら、糸をしぼる。
- 6、糸をほす（こんがらがっているの、なるべくほぐすように）
- 7、糸を玉にして、簡易おりもの機でおる。

感想

花びらをにているときに、最初、ピンクっぽい色になっていたのに、あとからだんだんきいろっぽくなったことが、おもしろかった。

それと、私の糸は、普通の糸じゃなくて、と中にボツボツと玉があったから、あむときにすぐくあみにくくて、つかれてしまった。

新しい家庭科を創るために—中学校では—

やっぱり色が糸につくときが、ワクワクしてなんかいい気分でした。

また今度やりたいと思います。

失敗談

私が一番最初に染めたのは、木の葉でした。たくさんとってきて、にてみたら色がうすくて、もとの糸の色とかわからなかったのです。しょうがないから、もう一度やりなおそうと、今度は、家にあった、ハチスという大きな花でやってみました。これも色がうすくてダメ。けっきょく成功するまでに、2回失敗してしまったことになりました。こういう人は、ほかにいるでしょうか……？

〈授業の流れ〉

一、染色について

- ・種類と昔の染めもの
- ・世界の染めもの

二、染料について

- ・植物染めと日常生活
- 各地方に残る染めものと、昔の生活の中での染め方、女性の仕事。

新しい家庭科を創るために—中学校では—

・化学染料と日常着

現代の洋服と染料、日常着のリフォーム

三、ろうけつ染め（実習）

・図案の考案から作品完成まで

①身近なものを図案化しアイデアスケッチする。

②ろうがきの効果を考え、図案のくふうと図案の配置を考える。



③試し染め

ハンカチ大の布を染める。

（板染め、絞り染め、ろうけつ染め等図案、染料もやりたい方法も自由にしてみる）

④ろうけつ染め

下絵↓ろう描き↓染色↓ソーピング↓乾燥↓仕上げ

⑤完成（文化祭展示）

〈おわりに〉

日頃から、授業でも父母会でも機会ある毎に家庭科について「くらしやいのちにかかわる教科」であることを話します。社会の動きはすぐ我々の生活に影響があるし、それに対応できる確かな目をもち実践する力を男女にかかわらず人間として学校教育の中で培ってほしいという思いが、いつも私を教科書のみにとどまらず外に目を向けさせ、好奇心を旺盛にさせているのかもしれません。

（八王子市立横川中学校）

「原発」と食物汚染(2)

浅井 由利子

原発に対する不安はあるが、電気がたりなくなったら困るし、原発の存在を否定するわけにはいかないという生徒たち。しかし、原発の危険性を、しっかり把握しているとは思えない。なんとなく、こわいと思っているようだ。

まず、原発のしくみについて、プリントを使って簡単に説明。次に、原発が本来に必要な、資料に基づいて説明。アンケート結果も知らせた。

『原子力読本』(東研出版)を参考にして、原発の問題点をあげた。事故の危険性はもちろんのこと、事故を起こさなくても、常に、放射能を環境中に出している。核燃料を運ぶトラック―目立たない小さなマークをつけているだけの普通のトラックが、すぐ近くの道路を走っている。もし、交通事故が起きたら、どうなるのか。放射性廃物(捨てることのできないので、棄という字をとった)の処理をどうするか。低

新しい家庭科を創るために―高等学校では――

レベル放射性廃物であるドラム缶、現在60万本、2000年には200万本をこえる。もっと危険な高レベル放射性廃物の処理問題も未解決である。アメリカが海洋投棄したドラム缶が水圧のため海底で破れ、ドラム缶に付着した海綿やイソギンチャクは直径一メートルほどの巨大生物になっていたという。(日本も核のゴミを、太平洋にすてる計画をたてていた)。原発労働者の被曝については、『原発ジプシー』(現代書館)にくわしく書かれている。あまりにもひどく、胸が痛くなった。石油の浪費、非経済性、廃炉の問題など。短時間では、とても説明しきれないほど、大きな問題をいくつもかかえている。

チェルノブイリ原発事故後の各国の動き、フィンランドでは「原発をとめない」と子供はうまない」と四千人の女性がデモ。西ドイツでは、中・高校生がデモ、政府に政策変更をせまっているのは、一部の特別な人ではなく、「普通の人々」の力なんだということを伝えたかった。イタリアの国民投票の結果も、「原発ノー」だった。それに対して、日本の動きはどうだったか、知らせた。

最後に、食物連鎖と人体に対する放射能の影響について話した。コロンビア川(アメリカ)での放射能濃縮データによると、川の水を1としたとき、プランクトンでは二千倍、魚

は一万五千倍、水鳥の卵の黄身では百万倍になるという。一九八一年、敦賀原発事故のあと、ホンダワラ、ムラサキガイから微量の放射能が検出された。しかし、科学技術庁・通産省は「これらは通常食べるものではないし、毎日食べ続けてもたいした量ではない」と言う。おかしい話だ。それなら、水保病はなぜ起こったのか。また、福井の原発から出る温排水でハマチの養殖をし、大阪に出荷するということを、ある本で読み、ぞっとした。

以上、一方的な講義ではあるが、二時間近くかかって、話し終えた。いったい、生徒は、どのようにうけとったのだろう。残りの時間で、授業に対する感想と自分に何ができるか書いてもらうことにする。

J、私は、今まで、原発について、ほとんど関心をもっていなかったで、今日の授業をはじめは、かったるく思っていた。でも、資料もとてもわかりやすくて、見ていて面白いし、話をきいていても、今まで知らなかったことがたくさんで、いかに、自分が知らされていないか、知ろうとしなかったのかを知らされた。「原発ジプシー」の話は、初めはウソかと思っただけ、びっくりした。チェルノブイリの事故の時も、テレビとかで特集を見たが、実感

がもてず、他人事のように感じていたが、まちがっていたと思う。

K、原発がなくても、火力と水力だけで、十分やっていけるのには驚いた。まちがった情報をそのまま信じていたので、これからは、もっと原発に関心をもって、いろんな本を読んでみようと思った。いなかにも、すぐ近くに原発があるので、そこに住んでいる人たちから、実際にいろんな話をきいてみたいと思う。事故もおこったことがあるので、そのときの被害なんかも知りたいと思う。とりあえず、今できることは正しい知識を身につけて、大人になつたときに反対運動をしていけるようにすることだと思う。

L、原子力に私は反対だけど、別に何とも思っていない人多すぎると思う。自分は何の影響もうけないと勝手に思いこんでいて、大丈夫だと信じている。そんな人達に一人一人、私は教えてあげたいと思うけど、まわりは無関心な人多すぎて、どうしようもない感じ。

M、原子力発電がなかったら、やはり、生活がなりたっていないのだから、やめるわけにはいかないと思う。だから、こういう授業においての目的が何なのか、あたしにはよく分からなかった。本や何かで、自発的に知ることと他人からおしつけられた知識とではかなりちがうと思うから

だ。

N、私は、原子力発電が必要だと答えた方だ。なぜなら、現在、原子力に従事している人たち、いなかの方の人達で自分たちの土地に原子力発電ができれば栄えるから、できてほしいと言っている人たちがいるというのをきいたことがあるので、その人たちのことを考えると必要だと思ったからだ。もちろん、危険だとは思ひ、もし、今、原発新設反対の署名が回ってきたら、きつと署名するとは思ひけれども。私は、矛盾したふたつの意見をもっている。自分たちにできることは、せいぜい、住民運動をすることぐらいじゃないでしょうか。最後に、先生の話をきいていると、原子力発電の正社員の人たちなどは、まるで、悪者のようにきこえます。実際に父親などが、そういう仕事について、そのおかげで生活している人がどんなふうに思うか、考えて話して下さい。

Q、私は父が原発で働いているにもかかわらず、無関心すぎるなと思った。もっと、いろいろ、原発について知りたいなと思った。

P、先生の授業は、あまりにも一方的だと思う。原発について習うことといったら、「原発は悪い」ということだけ。プリントに情報操作されていると書いてあったけれど、授

新しい家庭科を創るために——高等学校では——

業で反対派のプリントや話ばかりで、メリットについて「経済に関係する」という一言で片付けるようなら、これも、情報操作ではないか。先生は、原発がなくても、やっていけるとおっしゃいました。確かに、現在はそうかもしれない。けれど、やめればすむなんてことはいえないと思う。たとえば、原発をやめることによって失業した人たちの生活はどうするのですか、国がめんどうみればよいでしょうか？ たとえ原発が経済のためだったとしても、経済なしで国が成り立ちますか？ たしかに原発は危険です。では、車は事故が多いから、ガスは爆発する、飛行機は落ちる、だからといって、それらをなくせますか？ 先生は、昔にもどればいいようなことをおっしゃいました。が、我々は本当にそんな生活ができるのですか。一方的な授業はやめてほしい。いい面と悪い面をもっと対等にして下さい。

これらの感想を読んで、考えこんでしまった。

授業が一方的、押しつけがましいという批判。確かに、原発の恐ろしさを伝えたいという思いが先走り、生徒たちに、じっくり考える余裕を与えなかったと思う。

Mの感想を読み、はじめ、カチンときた。私が話すことは

信用できないということなのか。客観的と思われるデータをもっとたくさん示せばよかったのだろうか。しかし、考えてみれば、私の言うことが、いつも、絶対に正しいなんてことは言えない。人の言うことをそのまま信じこんでしまうのではなく、疑問をもち、自分なりに調べ、考え、判断していく態度が大事だ。今回、大きなテーマなのに、あまりにも短い時間しかとらず、生徒と一緒に考えていく姿勢に欠けていたと反省した。

Nの感想に対しては、原発のある町の人はどう思っているか、生の声をきかせることができればよかったのではないかなと思った。「電力会社の社員が悪者のようにきこえた」というのには、難しい問題だと感じた。授業をする前、生徒の親が、関西電力に勤めている場合もあるかもしれないということは考えていた。話し方には気をつけていたつもりだが、配慮に欠ける部分があったのだろう。どうしたらよいのか、もう少し考えようと思った。

Pに対しては、どう答えたらいいのだろう。原発事故と車や飛行機の事故とは、やっぱりちがう。原発事故の影響は、とてつもなく大きく、取り返しがつかない。科学技術の進歩をどう捉えるのか。いつ大事故が起き、人類が滅亡するかもしれないという基盤の上で、それでも、便利で豊かな生活を

選ぶのか。いったい、私たちはどういう生き方を選ぶべきなのだろう。原発推進の理由、それは、私にもよくわからなかった。①核戦略との関係 ②後もどりができない ③経済機構の問題、と本には書いてあったが、もうひとつ納得できなかった。

Pのいら立ちは、私の一方的な授業のやり方に対するものか、それとも、原発をなくして、どうするのかという展望をきちんと示さなかったためか、これについても、考えているところだ。

ちょうどその頃、二学期中間テストがあり、原発の授業について、ふり返ることができた。社会科の先生に本を借りたり、去年の授業のようすを教えてもらったりもした。

十月二十六日は「原子力の日」というらしい。科学技術庁・資源エネルギー庁の政府広報「明るい暮らしをおくります。原子力。(電気の28%は原子力)」、関西電力「ふだん着エネルギー(関西の電気のおよそ50%が原子力。もうすつかり暮らしのふだん着エネルギーです)」、電気事業連合会「働きものなんだって、日本の原子力発電!! うん、定期検査以外ほとんど休みなし」、新聞に出ていた広告だ。原子力に関する資料は、電気事業連合会広報部(〒100千代田区大手町1-9-4 経団連ビル)に申し込めばもらえる。



編集室から あなたに II

◆原稿募集

7月号 “なぜ、家庭科にコンピューター”

8・9月号 “コンピューター、何をどう変える”

に、あなたのご意見をお寄せ下さい。

「家庭科新時代」とは、コンピューターに振り回されることではないと思います。かと言ってコンピューターを毛嫌いしていても、だめでしょう。コンピューターに、どうしても任せられない領域をお互いにしっかり確認しあいたいと思います。

虎穴に入らずんば虎児を得ずとコンピューターの講習会に出かけた方は、その様子を、またあなたの学校や職場などへのコンピューター導入状況、あなたがもしコンピューター労働者であれば、そのご体験はいっそう貴重です。たくさんの方のご意見をいただいて、百家争鳴したいと願っています。

ぜひ、あなたのご意見をお寄せ下さい。

①コンピューターと教育にかかわることー7月号に

②コンピューターと生活にかかわることー8・9月号
メ切りは

①5月6日 ②6月5日

原稿は2000字程度

住所・氏名・お立場をお書き添え下さい。

◆Weにご意見を

新しいよそおいになったWeにきっと意見がおりでしょう。ハガキに気軽に書いて、どんどんお送り下さい。待ってます。

新聞で、反原発の集会有ることを知り、出かけていった。星の部は女性が多かったらしいが、私が行った夜の部は、どちらかというと男性が多かった。いのちとたべものを考える会やよつ葉牛乳を飲む会など、安全食品を求める市民グループが呼びかけ団体に入っていた。チェルノブイリ原発事故以来、そういうグループに、反原発運動がひろがっているように感じた。映画「ドキュメント・チエルノブイリ」「虹の民」若狭の中島哲演さんの講演。若狭でとれた魚は、若狭の町では売れないのだという話をきいて、ショックだった。危険な原発を若狭に15基もたて、大都市に住んでいる私たちは、原発を身近に感じることもなく、若狭から送られて

くる電気を消費しているのだ。

次の授業で、二時間では話しきれなかったことを補足したり、新聞の切りぬき（「原子力の日」の広告、朝日新聞、語り合うページ、天声人語11月6日付など）や核燃料輸送のパンフレット、『まだ、まにあうのなら』（地湧社）その他、何冊かの本を紹介した。反原発の集会に行った時のようすも伝えた。

とにかく、授業をきくだけでなく、自分にできることを何か考え、行動してみようと呼びかけた。そして、3週間後、自分が行動したことを、レポートで報告することにした。

（大阪府立茨木高等学校）

私たちが願う学習指導要領を作らせるために、 出来ることは何？

◎「家庭科の男女共修をすすめる会」は、教課審の答申を検討し、下記の要望書を提出しました。指導要領が出来上がる前に働きかけをしましょう！

中学校「技術・家庭」高等学校「家庭」の 学習指導要領作成についての要望書

家庭科の男女共修を含む教育課程審議会の答申が出されました。しかし、私たちは、男女共修が名目だけのものになることを恐れています。現在作成中の学習指導要領によって、女子差別撤廃条約の精神になかった、実質的な男女共修を実現されるよう、私たちはつぎのことを要望いたします。

1. 男女平等の推進を学習指導要領の基本にすえてください。
2. 新学習指導要領の中に、男女の役割についての固定的な観念が、入り込まないように十分注意し、男女の役割を変えて行くための教育内容を積極的にとり入れるようにしてください。
3. 生徒の能力適性に応じるとか、内容を弾力的、流動的に取り扱う等の名目で、男女差を助長することがないようにしてください。
4. 中学校『技術・家庭』については、つぎの点に留意してください。
 - (1) 領域の学年指定や、教材の指定をしないこと。
 - (2) 選択領域が家庭的、技術的のどちらかに偏しないよう明記すること。
 - (3) 選択によって、男女差が生じないよう明記すること。
 - (4) 「家庭生活」に、道徳的内容を持ち込まないこと。
5. 高校『家庭』については、つぎの点に留意してください。
 - (1) 科目選択によって、男女差が生じないよう明記すること。
 - (2) 「家庭一般」については、女子向き色を払拭すること。
 - (3) 「生活技術」については、「家庭生活で用いられる電気、機械、及び情報処理」の名目で、家庭生活の学習から外れた内容に、ならないようにすること。
 - (4) 「生活一般」の後半二単位の代替履修は、本来望ましくないと明記すること。また、代替履修が認められる（やむをえない場合）とは、

どんな場合か、(当分の間)とは、どの位の期間か明記すること。

6. 男女共学制の学校では、必ず男女一緒に学習するよう、明記してください。

昭和63年 1月 8日

文部大臣 中島源太郎殿

家庭科の男女共修をすすめる会

渋谷区代々木2-21-11 婦選会館内

- ◎新潟県高教組家一共学推進委員会による「家庭一般」男女共学に関するアンケート調査結果

'87年8月21日発足したみだしの委員会は、新教育課程完成実施の1994年に向けて、何をなすべきか討論。その第一弾として、10月高校家庭科担当教員232名対象にアンケートを行い、今年2月4日付の号外で発表しました。主なものをピックアップしますと、

- 家一共学の実施について(数字は%, 以下同じ)

賛成41.9, 賛成だが不安43.8, 反対2.5

- 賛成だが不安の理由のトップは、

教科内容46.5, 次いで県の方針定まらず43.7, 施設, 設備不足37.0, 他の教職員の協力得られるか36.6, 男子に教えた経験がないから18.3

- 生活的自立・役割分業の打破・新しい生活文化の創造が教えられるのは、家庭一般58.6 生活一般9.9 生活技術2.5

- どれを履修させたいか

家一69.1 生一2.5 生技1.9 女・家一, 男・生技17.9

- ◎大阪府立松原高校 '88年度から家庭一般男女共学(2単位)

家庭科教師の努力, 婦人部のバックアップ, 分会体制のまとまりによっていち早く, 家一男女共学に踏み出しました。半田も分会研修会に参加し, 若手教師が多い同校のパワーに感動しました。校内研修に, 日程が合えば喜んで参加します。ご連絡下さい。

- ◎家庭科の男女共修をすすめる会, パンフ作成中

「会」では, 家庭科男女共修運動を盛り上げ家庭科教師のよりどころとなり職員会議や父母の理解を得るのに役立つパンフを作成中, 夏休み前に完成

- ◎『男女で学ぶ新しい家庭科』(森幸枝著)

『家庭科新時代』(半田たつ子編)をどうぞ

私たちが望む形で, 家庭科の男女共修が位置づくために, 中学・高校の家庭科の先生の力量が問われる時です。他教科の先生も, 父母も, どうぞバックアップして下さい。あなたが家庭科教師であればもちろんのこと, そうでない場合も, 今注目の家庭科について深く知るために, 「新しい家庭科—We」とウイ書房の2冊の単行本はきっとお役に立ちます。周りの方にもおすすめ下さい。

女性民教審の

公開審議会から

■レポート

佐尾和子

日が暮れて、白い綿毛のような小雪が、フワフワと風に舞った二月十八日（木）、午後六時半より新宿区立婦人情報センターで、新生女性民教審第一回目の公開審議会が開かれました。昨年六月に最終提言を発表して以来八カ月ぶりの公開会議です。テーマは「なぜ社会科をなくすの?——競争原理を強める教課審答申——」。会場には、懐しい顔、新しい顔、メンバーも含め六十名ほどが集いました。

まず、俵さんより、これまでの女性民教審の経過と、今後は臨教審答申を錦の御旗に具体化されてくるであろう教育政策や問題に対して、コメント、アピール、学習会等を中心とした活動が続けていくこと、会の運営は、今までのように事務局体制にとらず、全員同じメンバーとし、当番制で仕事を分担する、当面連絡場所は俵宅とするなどの報告があり、続いて、三人のメンバーのレポートに入りました。

○教課審のねらうもの 暉峻淑子さん

国（財界）にとって必要なのは、新しい技術を開発し、そ

れを海外に売り捌き、世の中の不平分子を鎮圧する能力を有した五%のスーパーエリートで、後は分に応じた教育で、教育の効率性を高める（一九六三年経済審議会）というこの能力主義は、臨教審の理念として受け継がれ、教課審では、中学での習熟度別授業の導入等更に選別度を高め、高校の多様な選択制につなげるという形で具体化されている。

社会科とは本来、人権、民主主義、平和を身につける教科であるため、歴史がその価値基準の枠内にあることへの危機感は大きく、昭和五十年代から懸案であった社会科解体は、とても強引なやり方で行われた。地歴を独立させることで、国家主義も含むいかなる歴史観を教えることも可能な道を開き、同時に社会科科目相互の融合性も希薄にしてしまった。

○社会科はどうなる 樋浦敬子さん

「現代社会」は、例えば一本のバナナを食べながら、フィリピンについて、更には日本の資本の進出について学び、自らを考えるといった魅力的な授業ができる科目なのだが、その実践の積み重ねで教師自身が問われ、鍛えられ、意欲的な教科書も生れてきた矢先に必修からはずされた。生徒は、自分の生活に即して世の中の仕組について考える機会を奪われ、その結果トータルな視点と判断力を失っていくだろう。更に怖いことは、教員養成課程の中で、現代社会の視点を持って地歴を教えられる教師がいなくなることだが、もはや、船に

乗せられ、北方領土を見ながらの初任者研修等が現実のものとなっているようだ。世界史必修のねらいは、世界に日本の商品売り捌く時即役立つ等の観点からで、およそ社会科の理念に基づいた世界観の涵養とはほど遠いものである。

国家主義や道徳教育は、日本の国をまとめる時、能力主義により生じた格差をつなぐ精神的絆が必要という所から出てきている。その任を帯びた校長の権限も又強化されている。

○家庭科はどうなる 半田たつ子さん

明治以来、国策に奉仕させられてきた家庭科は、戦後社会科と並び、民主的教育のホープとして登場。にもかかわらず高度経済成長の過程で、男女役割分業を推進するための女子用教科に変貌。女子差別撤廃条約批准上の必要から男女共修が決められたものの、教課審答申では、大変なまやかしのものと骨抜きにされようとしている。臨教審の「家庭の教育力の回復」を受けて、家庭科は、人間に関わる学習をほとんどとり入れられないまま、「親になるための教育」として位置づけられ、小学校低学年の生活科と共に、道徳教育の重荷を負わされることになった。更に情報処理が入ってくることで家庭科の意味はぼかされ、また選択の段階で、男子用、女子用、共学用と分かれたり、体育で代替の懸念もある。情報処理がおかれる真意は、パソコンを教育界に導入することで莫大なシェアが見込まれること。また末端技術者として「産業

界にすぐ役立つ人材の育成」の任も負わされそうである。

今、私達にははつきりと見えます。一握りのエリートと、物見えず、物言わぬ、よく働く群衆の姿が。教育という最も有効な手段で、新しい階級作りが進んでいることが。自然科学が暴走させられた結果、ずたずたに傷つけられた地球が。これ以上学問の、思考の細分化が進み、人間がトータルな視点を奪われていったら……底知れぬ恐怖を感じます。

参加者を交えての自由討論では、これらの動きにどう抗したら良いのかに話題が集中。習熟度別学級だけでも廃止するよう区議会に請願しよう。教員研修の社会科部会は解散しないで、教師自身が力を高めよう。おかしいと思ったことには声をあげ、働きかけよう。良いことしか書かないマスコミを何とかしなければ。教育の問題を平和、自然保護などの市民運動にも投げかけ大きな輪に、等々、共感しました。

教育も含め、首尾一貫して巧みに迫りくる差別や矛盾。そのからくりを見きわめる鋭い目、確かな視点を、私達皆が培い、伝え、力にしていかなければ……。そしてその視点の確かさは、同時に自らをも問うものでありたいと思います。暉峻さんは「現代社会」の教科書も朗読されましたが、印象深く、手にとって読んでみたいと思いました。

女性民教審連絡先 104 中野区弥生町四ノ三五ノ一

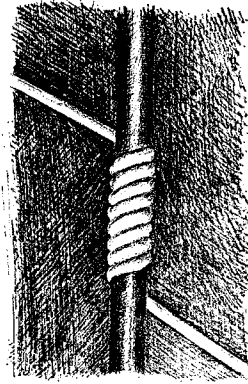
俵萌子宅 ☎ 〇三(三八四)三二一六

海の輝く日

みかんの季節

されど……

佐藤通雅
(カットも)



壁面歌集をはじめたのは一九八五年五月のことでした。学校の廊下の壁に自作の短歌を掲示します。それで壁面歌集というわけですが、けっして上等な作品ではありません。社会や学校のさまざまな出来事を素材にして、即席に三首ぐらいい作り、毎週一回掲示します。それに気まぐれに描いた絵も添えますので、「壁面歌集 短歌十絵」とタイトルがつけられています（なおこの欄のカットはその時に使った絵の縮小版です）。まあ、私のささやかな遊びです。ところで第八十六号（一九八七・一一・三〇）は「みかんの季節、されど……」の題のもとに、夫と妻の掛け合いを構成したものでした。

妻「美しい色はしても皮までは食べちゃいけない害があ

るから」

夫「害がある?! なぜ人体に悪いものみかんの皮にぬらなきやならぬ」

妻「つやつやと見せて人目をひきつけて買わせてもうける策略なのよ」

夫「そういえば化粧の厚い生協のおばさんたちも語ってたっけ」

さらに夫……

「それならば女の化粧とワックスと[※]同んなじようなものじゃないかい」

妻 シーン。

よく生協に買い物に行きます。生協が好きです、少し前までは。でも大型化するにつれて生協の理念が拡散してきましたね。このまま行くと普通のスーパーとかわりなくなると思えます。だいたいレジのところにはタバコを置き、有害食品もどんだん並べて、そのくせ公害に気をつけようなんていつてます。大いなる矛盾です。ここをどう切りぬけていくかは、実は他の場に居る者にも一様に課せられている問題です。みかんの歌はある日の生協で目撃した実話です。それを読んだ家庭科講師の西沢先生が、この本見てみませんかと貸してくれたのが『あぶない化粧品』（日本消費者連盟 三一書房）

です。前号の話はここからはじまったのでした。化粧品は詐欺商法だ——とは前から感じていたことでした。しかし科学的データによる記事は、私の予想を上まわるものでした。

シャンプー・リンスを使いすぎるとハゲになるなんて今まで思いもよらないことでした。私は自分自身に実験をはじめました。するとシャンプー・リンスのときの脱毛は50本ぐらいあるのに、ふつうの石鹸と酢によるリンスでは10本から20本ぐらいです。なるほど、やがてハゲになるのはウソじやなかった。以来、一切の化粧品を遠ざけたのはいうまでもありません。

しかし私は内心、自分の眼に対して自信をなくしていたのです。なぜなら、一昔前は化粧のうまい女性は美しいと思っていましたし、家内と外出するときもたまには口紅ぐらいつけたらなんていったこともあるのです。家内は化粧しないたちでした。他人に会うとき、それは失礼なことだと思っていたのは自分の方で、今では赤面するばかりです。こういう美意識は本当は根拠のないもの、何かに強いられて作りあげられてきたものだとしだいに気づいてきました。『あぶない化粧品』はそれを決定的にしたのです。普遍的な観念なんてありえないのだと、今の私は考えています。それならば、一つ一つの問題に出会うたびに自己解体をしていかなければなりません。ホントのところ、一番つらいのはそれです。なぜ

なら、化粧品に害があるとわかっててもそう簡単には捨てられません。タバコだって、わかっちゃいるけどやめられないのですからね。どんな運動に取り組んだって、最後は自己解体を、自己変革を迫られるのだと私は思います。もし運動がそこを抜いたら、必ずや自己正当化に傾き、反〇〇運動のわくにはまりこんで終わるでしょうね。

さて、化粧の問題は生徒にも広く訴えようと、策を練っていますが、ここで自分たちが立ち会っているのは化粧だけでなく、本質的には近代文明の問題そのものだと考えています。ノーメイクとはいかなれば自然に還るということです。私はそれすらも一つのやり方であって、決定的なものではないと相対化しておきたいのです。なぜなら、自然に完全に帰還するように自分たちは出来ておりません。もし今の化粧に害があるなら、無害のを研究しよう、ハゲたら害のない養毛剤を、それでもダメなら品質の良いアデランスを……というように近代科学は限りなく進んでいくはずです。この構造は医療でも、教育でも全く同じです。これが現在であるなら、自然に還る方向に発想するのは、その人にとって一つの決意であり、大切な生き方ではあっても、多くの人を説得する力は必ずしもありません。私はここで頓挫しています。してはいるけど、まだギブアップはしていません。少なくともこの現在から眼をそらすことはするまいと思っています。

今、子どもたちの世界は

塚越敏雄

「遊び」の変化

“最近の子どもたちは変わってきた”
そんなことが職員室の話題になることがあります。

「朝から大きなあくびをしていて、いかにもやる気がないという態度の子がいるから、いやになっちゃう」

「授業中も、自分から課題を見つけたり追求したりすることが苦手。すぐに答えを求めるし、考えること自体めんどくさいと思う子が増えているね」

“最近の子どもたち”の話は、まだ続きます。

・体力的、精神的なたくましさがない。人の気持ちを考えず、自分中心の行動をする子が多い。

・リーダーがいらないし育たない。

・トラブルが生じたとき、それを解決しようと積極的になるよりも、トラブルを避けて通ろうとする。

・自分と仲のよい少数の友だち以外のことには無関心であったり、冷淡だったりする。

“最近の子どもたち”を話題にするときには、必ずといっていいほど、子どもたちの問題点が口にはのびります。

そして、このような子どもたちの様子の変化を、子どもたちの遊びの変化との関連でとらえている教師が、かなり増えてきました。

つまり、こういうことです。かつて

の子どもたちの生活は、外で大勢が一緒に遊ぶ「群れ型」遊びが中心でした。その遊びを通して、知らず知らずのうちに体力が向上していったり、人間関係のあり方や社会的ルールを学んでいたりと、集団の中の個人の責任を自覚していったり、創造力を身につけていったり、情緒の安定を得られたり……といったことができたわけです。

ところが今日の子どもたちの遊びが「孤立型」に変化していったため、友だちとの協力や助け合いなどを経験しないまま、幼児期から学童期を過ごす子が増え、その結果として、冒頭にあげたいろいろな問題も起こってきているのではないかと考えているのです。

遊びの変化だけが今日の子どもたちの行動の変化に影響を与えているわけではないとしても、それがかなり深く関係していることは確かだろうと私も思っています。

こうした現状を憂える小学校の教師

の何人かは考えます。「もつと子どもたちを遊ばせなくては」と。

地区の教研集会でも、このことが話題にのぼりました。ある教師は、子どもが五人以上の友だちと遊んだらシールを与えるようにしたといいます。シールの数を競わせると、子どもたちはたくさん友だちと遊ぶようになったそうです。ある学校では、休み時間には子どもたち全員を運動場に出しているそうです。それ以外にも、「七夕のかざり作りを他学年の子たちと一緒にやらせている」「地域行事に参加をよびかけている」などという取り組みが紹介されていました。

私は、そんな話を聞きながら、「子どもにとって遊びとは何なのだろう」と考え込んでしまいました。内から湧き上がる遊びたいという欲求につき動かされてやってしまうのが、「遊び」なのではないでしょうか。大勢で遊べばほめてもらえ、遊ばないと叱られる

という条件を作っていくとしたら、その遊びは「義務としての遊び」になってしまうのではないのでしょうか。

子どもは、体力をつけようとして遊ぶわけではありません。社会性を身につけようとして遊ぶわけでもありません。何かの目的のために遊ぶのではなく、遊びたいから遊ぶのです。それが遊びの本質ではないかと思うのです。

ところで、子どもたちの遊びが成り立つ条件は、何でしょう。私は、たっぷり遊べる時間と場所があることと、友だちがいることではないかと考えています。その条件を満たすことができなくなってきたために、子どもたちは、外で群れになって遊ばなくなっています。狭い路地まで入り込んで来る自動車は、子どもたちを道路から追い出しました。新興住宅街は、自然の遊び場をこわしてできあがりしました。安全性を最優先する大人の配慮は、冒険心をく

すぐる遊びを取り除きました。そして、「将来」を考える親は、子どもを学習塾や習いごとに通わせ、たっぷり遊べる時間を取り上げてしまいました。

子どもたちが大勢で遊ばなくなった条件には少しも手をつけず、遊びの意義を持ち出して子どもたちをもっと遊ばせようとするのは、大人の身勝手というものではないでしょうか。子どもたちが自由に使える時間と、自由に使える場所を今より増やしていく方向を持たず、「望ましい遊び」に向けて教師たちが「指導」していくとしたら、それは、大きなまちがいでないかと思えます。

教師を含め大人にとって必要なことは「友だちと遊びたい」という自然に湧き上がってくる意志をなるべく邪魔しないことだと思います。あるいは、自然に湧き上がらないようにさせているものを、可能な限り取り除くことと言ってもいいかもしれません。

経済の目

生活サイドから見た経済

「生徒たちの

税金への疑問」

福島澄香

昨年Weの五月号で売り上げ税の問題を取り上げたが、それを読んでくれた生徒たちには「貧しい人に負担の重い不公平な税金ではないか」「何に使うための新型間接税か」という疑問が一番多かった。

国税庁のパンフ 国税庁から生徒用に配られたパンフレット(現代社会資料「わたしたちのくらしと税―財政と国民経済―」高等学校学習指導要領準拠・昭和62年版)を見ると「税金は国民の幸福と繁栄のために」「公共サービスや財貨を提供するための大切な財源であり、またわたしたちにとつて共同社会を維持するためのいわば会費である」「そのため、義務として税金を納めるだけでなく税金の使いみちも十分に知る必要がある」と述べている。

また国税庁のパンフは「税はどのように使われるのだろうか」の中で、「文教及び科学振興費」について「日本は国際的に見て教育熱心な国」「国の費用に占める教育費の割合から見ても世界のトップクラスにあり」、このような「文教予算は我が国の教育制度の根幹を支える重要な役割を果たしている」と胸を張っている。一方で「しかし、最近の行財政改革論議の中で義務教育費国庫負担金(公立小中学校教職員給与等の二分の一を国が負担している)教科書無償配布制度(小中学生が使う)の廃止を求める意見も出されています」としぼむ。

ここに転載した図1は、国税庁パンフにのっていたものが、国の費用に占める教育費の割合は昭和50年以降急速に下がり、税収の多い63年度も8.6%に下がっている。「私立学校助成費の推移」(図2)を見ても、'87年度の助成額は七年前よりも少なくなっている。このように国税庁のパンフから教育の充実への国の配慮を読み取るのは無理で、家計の教育費への負担が一層重くなる方向を示している。

「社会保障関係費」についても、国税庁のパンフは「社会保障制度の充実、国民生活を安定させて真に豊かな社会を建設するために欠くことができない重要な課題です」と言いながら、国の予算に占める社会保障関係費の割合は、'80年以降次第に下がり、厳しく抑制されて来たことがわかる。

「防衛関係費」については文教費に匹敵する金額で、'80年代

図1 文教及び科学振興費とその
歳出に占める割合の変化

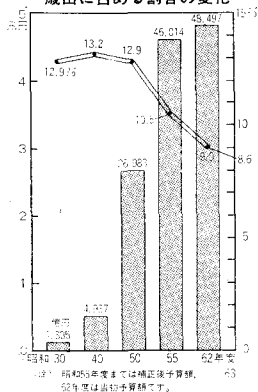
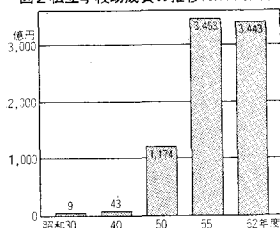


図2 私立学校助成費の推移(当初予算額)



の八年間に54.2%も増額しているにもかかわらず、国税庁のパンフには急増の理由には触れず、「国を守るための経費で、主として自衛隊の装備や自衛官の給料をまかなうための支出です」と非常に簡略化してたった二行しか書いていない。生徒たちに国税が使われている現状を正確に知らせるのだから、国税庁パンフの中に書かれていた「次代を担う力」を持ったわが国の主権者は育たないのではないのか。

EC型付加価値税の導入 政府はなぜ急ぐのか？ EC型新聞接税はEC諸国で採用しており、廃案になった売上げ税、一般消費税と余り違いはない。EC型付加価値税は、原則として総ての商品・サービスに対して取引きのあらゆる段階（製造・流通・販売など）で課税する多段階型の新型間接税のことである。新型間接税案の中では最も取立ての厳しいものといわれ、「資本主義最後の税制」ともいわれている。ECの

中心組織、EEC（ヨーロッパ経済共同体）では共通税制度として決定され、加盟国には採用が義務づけられている。この税制の特徴は、売り手が買い手に取引きの都度、税額を明記したインボイス（仕送り状）を発行し、最終的には消費者が商品・サービスの価格として負担することになる。

昨年、廃案になった売上げ税の税率は5%、新型間接税は税率3%に下げるとも言っている。EC諸国の付加価値税は導入時の低い税率がNATOの軍拡などにともなって次々に引き上げられてきた。導入時に税率が低くても、いったん新型間接税制度が導入されてしまえば税率の引き上げが容易になるため（物価に含まれてしまうので何となく税痛を忘れてしまっているうちに）、EC諸国のように税率が次第に引き上げられ、庶民への増税が強められる危険がある。

イギリスのサッチャー首相は就任早々の79年に付加価値税の税率を10%から15%に引き上げた。その後、サッチャー氏は福祉を切り下げ、ホークランド戦争を起こしたりするのであるが、彼女の就任以来85年までの五年間に英国国民の貧富の格差は拡大し、五分の一の最下層世帯では平均収入が43%も減っている。こんなふうに、EC諸国の付加価値税の推移をみてくると「なんに使うための新型間接税か」「それは不公平な税金ではないか」といった生徒たちの素朴な疑問は、大変に重要な問いかけのように思えてくる。

アメリカの共働き夫婦は今

⑦ アンとロッドの場合 その2

アンは夫が神学部の一大学を終えるまでは、生計をたてるのは自分の責任だと考えている。いわゆるPh.T (Putting Husband Through) 博士号Ph.Dをもじったもの) という役目を今担っている。幼い子供三人をかかえ、夫にあえて博士課程修了をすすめるということは、アメリカといえどもそう多くの妻のすることではない。二十万円の収入で決して住居費も安くはない地域でのやりくりをどうしているのか、そしてそれをアンはどう受けとめているのだろうか。以下、家事分担チェックリストについての妻への質問と答で、家計についてふれた部分である。

Q―家事をどのように分担しますか。どの位の家事をあなたはしていますか。

R―(妻) ウーンそうね90%位私かな。

Q―ロッド(夫) もその位あなたがしているっていったよ。それで私はそれは公平じゃないのじゃないかと思っただけだ。ロッドは自分でもっとしているのじゃない？

R―いいえ、彼はその位のもののよ。一般的にいつて家事の中でいつもロッドがするのは皿洗い位よ。でも朝私が洗濯物干してゆく時間のないときは彼にやっというてもらうけど。でも洗濯するのは私よ。

Q―あなたはいつも洗濯を干すの？ 干しというというのはあなたなの？

R―(もの静かに) そう、どうしても干しという欲しいの。
(注)多くのアメリカの家庭ではドライヤーで洗濯物を乾かすので、外に干すことはない)

Q―そうなの。

R―掃除機でそうじするのも私。私、掃除機かけるの大嫌いなよ。本当に感覚的にあは嫌いな。人が家にきて泊まったりするときは、ロッドに掃除機かけてもらって、私が床をモップでふいて、シーツを替えたり、細かい片づけをしたり、という具合に分担するわね。

Q—いろいろすること増えますね。

それじゃこれから言う家事を誰がしているか答えて下さい。ゴミを出すのは？

R—ロッド、そうね——やっぱりロッドね。彼がするようになってるの、もう一度彼にいつとかなくちや。

Q—というと？

R—きのうの晩ゴミを出しとく日だったのよ。思い出させてくれてありがとう。

Q—朝食の準備は？

R—ロッドがします。

Q—夕食の準備は？

R—だいたい半分位ずつかしら。

Q—お客さんが来たときの食事の準備は？

R—半々ね。

Q—皿洗いは？

R—半々ね。

Q—居間の片づけは？

R—私。

Q—居間の掃除機かけは？

R—私。

Q—朝、ベッドを整えるのは？

R—私にきまつてるわ、（皮肉っぽく）ロッドはどうやって

ベッド整えるか知らないのじゃないかしら。

Q—洗濯は？

R—私。

Q—つくろいものは？

R—（笑いながら）誰もしないわね、でもどうしてもしなくちゃならない場合は私、私よ。

Q—車の故障の修理は？

R—ロッドがします。

Q—芝を刈ったり庭の手入れは？

R—ロッドが $\frac{3}{4}$ 位で、私が $\frac{1}{4}$ 位かしら。

Q—家の中のいろいろな器具の修理は？

R—ウーン、そうね、ロッドかな、私電気さわるのこわいのよね、それで私さわれないから電気器具類は全部ロッドね。私、電気おそろしくてね、かわいそうでしょ。

Q—買物リスト作るのは？

R—五分五秒ね、両方ですの。

Q—食料品の買物は？

R— $\frac{3}{4}$ 位の買物はロッドがするわね、というのは、私達が持つてるフードスタンプを使うの私嫌いだから。あれ使つて買物するのイヤなの。

（注—フード・スタンプ＝収入が正当な理由で一定以下で、家族のある家庭には社会福祉の一環として食料購入券が与えられ、定

められた店で食料を無料でもらえる)

Q—フーン。

R—とてもはずかしいのよ。

Q—私も使った経験あるけれど……。

R—でもそれも月末にはなくなってしまうわね。

Q—それでもロッドは全く気にしないの？

R—いいえ、全然気にしないわよ、全然よ(大きな声で)、そのことでいつも口論になるの。なぜって私がいつも、ソーシャル・ワーカーに会いに行かなくちゃならないのだから。いまいましいったらありやしない。イヤな福祉事務所で待たされて医療費や食費やらの報告を書類に記入して……いつもそれを私がしなくちゃならないのよ。ロッドは学生だからそれする資格ないの。私でなくちゃならないの。私それ大嫌いなよ。それにそういうことするのってとても、自分が格下げされるみたいでね。でもこの二年間ずっとやってるわ。大嫌いよ。今月も月末にはそれもなくなつて、その更新手続きにもう行かないの。私、この間職場で少し昇給したから、もう資格なくなと思うし。それはいいのだけれど。もういらないの。あのはずかしいような気分や、だからとても疲れるのよね。それにいつも私が、郵便局に行つてフードスタンプをもらわなくちゃならないし。仕事の後や、昼休みに。それでもうとう言ったのよ、私は

もう絶対あれはしたくないって。だからロッドに書類渡して、郵便局に行つてもらうの。そしてそのフードスタンプを使つて買い物するのはロッドなの。私はイヤ。プライドの問題よ。

Q—あなたのプライド？

R—そう、私の。私はそういうもので買物するのイヤなの。

Q—経済的にこの二年苦しかったみたいね。

R—そりやひどいものよ。今までで最悪だった。ここに引越してきて、家賃は上がるし、光熱費も上がるし、食料も上がるし、収入だけは増えないし。でも私この間少しだけ昇給したのよ。でもねそのためにフードスタンプも、医療保障ももらえなくなつてしまったの。政府つてしつかりしてるから、私の少ない収入でなんとかやれというわけよ、いつも、うまく前に進めないのよ。私はロッドに早く大学院修了して欲しいの。いつも借金してまわるのに疲れたのよ。全部済んだらセイセイするわ。もうあと一年の辛抱よ。

家事分担の話は、妻の家計の苦しさへの不満のぶちまけのチャンスとなり、夫のあと一年の大学院生活を首を長くして待っている様子がひしひしと伝わってくる。夫が牧師の資格を得たら夫の仕事のあるところに引っ越し、家を買ひ、のんびりしたい、というのが今のアンの夢である。



乙女になった熊

朝鮮にも神話は多い。中でも有名なのは、檀君神話である。「天の神が息子の桓雄に、下界に降りて人々を治めるよう命じた。桓雄は雨・風・雲の三神をはじめ、三千の従者を率いて太伯山の神檀樹の下に降りた。桓雄は人々に三六〇の知恵を教え、よく治めたので、みんなは桓雄を慕った。

ある日、虎と熊が来て、人間になりたいと願ったので、桓雄は蓬と大蒜を与え、これを食べる百日の間、日光を見なければ人間になると教えた。虎は途中で挫折したが、熊はよく耐えて、見事に美しい娘となることができた。熊女とよばれた娘は、桓雄と結ばれて、檀君王陵が生まれた。檀君は平壤に都を定め、国を建て、その名を朝鮮とした。千五百年の間、国を治めたが、中国の箕子が朝鮮に封ぜられたので、阿斯達^{アシダ}の山にかくれ、山神となった」

神が天降る話は、日本のいわゆる「天孫降臨」とも共通しているが、熊が娘になるというほえましい話は日本にはない。

熊は北方アジアの物語によく登場する。アイヌのイオマンテにも見られるように、熊を神の使いとする信仰は、ユーラシア大陸北部全体に分布していると言われる。熊は神の国では、人々と共に、同じ姿で暮らしていたのである。

でも、動物園の熊の顔を、いくら見つめても女性の顔は浮かんではこない。最初、私はこの話に、ちよっと違和感を抱いたものであった。韓国でつくられた絵本を見てはじめて納得した。熊女は愛くるしい乙女に、描かれていたのである。

この檀君が朝鮮全体の始祖として、はじめて記されるのは、十三世紀の「三国遺事」という本においてである。当時、高麗を占領していたモンゴル（元）との戦いの中で、朝の鮮やかな国、美しい朝鮮を建てた神の話は、朝鮮民族の誇りをかき立てた。檀君は、十五世紀以降、国の神となるが、十九世紀末からの民族の苦難の時代において、またもやクローズアップされることになる。檀君教も生まれ、韓国では一九六一年まで、この神話に基づく檀君紀元を使ってもいた。

太古の昔、人々は、自然を恐れつつも、それと溶けこみ、動物の肉を神の贈り物としていただきつつ、人間との同質性を信じていたのである。大らかな営みを映し出す神話を、政治に利用しなければならぬ人間の不幸は、それらの物語が、人間のチエによって記録された時から始まったと言えるのかも知れない。

共産党弾圧と学園

—赤い女子学生と恩師の真綿—

明治中・後期の日清・日露戦争、さらに大正期の第一次世界大戦を契機として、わが国の資本主義経済は急激に発達したが、反面その歪も大きく、貧富の差は拡大し、労働運動も続出した。続く、昭和初期には、神戸の鈴木財閥の崩壊に伴う多くの関連会社・銀行の倒産や、世界大恐慌の影響による企業倒産で失業者が百万人を超え、他方これらの弱者の犠牲の上に大企業の独占化が進むなど、社会不安は増大した。

一方、大正デモクラシー運動の成果として、大正末期に選挙法が改正されて普通選挙権が成人男子に与えられ、その第一回普選が昭和三年二月行われた。その結果は、労働農民党や社会民衆党など左翼政党より八名の当選者を出し、保守政権を震撼させ、翌三月十五日の共産党員の大検挙（三・一五事件）を皮切りに、翌四年四月十六日の大検挙（四・一六事件）など、昭和七、八年頃までに共産党員及びその

同調者の検挙が続いた。これらの被検挙者には、不況に苦しむ労働者や農民のみでなく、彼等に同情した多くのインテリ層、特に一流大学や女子大学の教員や学生が含まれていた。

中でも東京女子大学生の名はしばしば新聞紙上に現れた。当時、この様な左翼学生を出した他の学校では、いち早く彼等を退学処分して学校に累が及ぶのを避けたり、当局又は新聞社に手を回して学生の名が巷間に出るのを防ぐのが普通であったが、東京女子大学々長安井哲は、当局に迎合せず、また教授会においても、学校の名譽を守るため問題学生の退学処分を強く主張した教授に対し、「学校は学生のための存在である」と言い切つて、断固として学生を守り貫いた。さらにある寒い冬の夜、学園寮から検挙されていった数名の左翼学生に対し、安井学長は、「……取しらべに對して、あなた方が考え信じている真実をお答えなさい」と励まし、「……人間は誰でも、何処にいても、自分の居る処を清めることが出来ることを忘れないでほしい」と諭しつつ、一人一人の背中に真綿を差し入れて送り出したと、大学の沿革史は伝えている。

このように、当局に對する毅然とした姿勢及び学生に對する深い愛情を有した安井哲学長の東京女子大学は、それゆえに世間からは「赤い女子大」のレッテルを貼られ、入学者が激減し、卒業生の就職にも支障を來した苦難の一時期を耐えねばならなかったのである。

通信教育

その2

湯沢静江

通信教育とは、講義や実習に出席し、レポートと試験で単位をとっていくのに比べると、睡魔や怠け心との戦いであった。テキストにしろ、ガイドブックにしろ、自分が読みすめない限り、一ページたりとも先へ進まない。加えてほとんどの通信制の学生がそうであるように、他に定職を持つていたので、予定どおりにことは運ばないのである。まとまらないレポートに呻吟したことがどのぐらいあったことだろうか。入学する際に厳しい選抜がないのだから、単位取得が大変でもないし方のないことではあるが、気持ちの上では常にテキストが追いかけてくるような焦燥感があった。しかし、この長い暗いトンネルの中の、地を這うような勉強が、のちの私にとって大切な財産になるとは、その時、思いもしなかった。

通信教育の勉強が残ったまま、飯田風越高校で一年を経過した後、結婚を

した。二十五歳である。いろいろなことにキリをつけてからという気持ちがないわけでもなかったが、このなりゆきでそうなってしまう。結婚するにあたって、勤めや家事をどうしようかということ、あまりきちんと話しあうことをしなかったという大きな誤算もあった。結婚したら、子どもが産まれたら、女性は仕事をやめるというのが一般的な社会風調だった時代のことで、しばらくは学校へ勤めながら通信教育の勉強も続けることを認めてもらうというのが最大の約束ごとだったように思う。勤めを終わって夕食をすませたあとは、ただひたすら机にむかっていたという新婚時代だった。二人だけの生活だったからできたとは言うものの、夫にしてみたら、とんでもないものを掴まされたという気持ちではなかったのだろうか。翌三十四年の夏、最後のスクーリングを受け、三十五年三月、やつと卒業することができた。「ことのなりゆき」や「誤算」はあったが、岐路に立ったときは、自分の主張をどこかで通して来たあしあとがあることにあとで気付いた。大上段に構えなかった分、実質を採って来たのかもしれない。部屋が散乱していようと、埃がたまっていようと、そのことだけで私を責めることをしなかった夫は、消極的な協力のしかたをしてくれていたのかも知れないと、今は思っている。

(第二回)

男に

見える

家事の幅

男そして女
田川建三

よく言われることですが、男が家事を妻と五分に分担していると思っている時には、実際にはせいぜい四分六分、下手をすると三分ぐらいにしかなくていいようです。どうしてそうなるかというと、男の頭の中では、家事というと、名前をつけられる部分しか考えられないからでしょう。炊事、洗濯、掃除、買い物が家事の四大部分であるにせよ、それ以外にも、何となく身体を動かすことが多いのに、その部分にはなかなか目が向かないのです。

自分の失敗談をお話しすれば、わかり易いかもしれません。年末の私の仕事の一つは、ガスコンロとガス台を磨くことです。ガスコンロをはずして分解し、一つ一つを磨き、ガス台も時間をかけて磨きます。かなり前の話ですが、その際いつも不満に思っていたことは、コンロのまわりに料理した時の細かい汚れがついて、たまって、ガスの熱でこげつき、その上にまた汚れが少しずつたまり、それがまたこげつき、という具合に一年すぎると、コンロを磨くのは大変な仕事になります。

そこで、磨きながら、もしも女房が料理の後で毎日この小さい汚れを拭いておいてくれれば、こ

げつく前ならちよつと拭けば落ちるのだから、ことは簡単なのに、それを手を抜くからこんなことになる、といまいましく思うのです。実際、彼女に對して口にも出して文句を言いました。しかしある年の暮、同じことをしながら、同じ文句を彼女に言おうと思つて、ふと気がついて、赤面したものです。それがどうして彼女の責任でなければならぬのか。家事が共同責任なら、彼女に對して言う前に、自分でやればいいではないか、と。名前のつく「家事」の一部分だけを自分の責任と思ひ、それ以外はすべて女房の責任と思ひ込んでゐるから、こういうことになつたのだと思ひます。それ以後はずつと、ほぼ毎日、ガスコンロのまわりを拭くのが私の日課に加わりました。

こういう話を書く、ぬけているのはお前だけだ、と言われるかもしれませんが、この話、何年か前に、数百人の女性が集まつた場所で話して、男がいかに家事の広がりにつかぬかぬことかと申しましたところ、拍手喝采でしたから、どうやら大部分の男が似たりよつたりなのでしょう。男の家事は、まず、気がついて身体を動かす幅を広げる、ということでしょうか。

土地の問題

春になると、日本のきれいな土地のことを考えます。ある日本人のご親切で、いろいろなきれいなところを見ってきましたから。

東京に住むようになる前、日本の土地の問題について、もう知っていました。日本は80%山からなっているから、土地の値段が高い。その上に人口は、少なくとも10%が東京に住んでいるから土地の値段は世界一高い。普通のサラリーマンは、貯金を十年しても家を買えない、などです。

ですから東京で小さい畑がたくさん見えることにびっくりしてしまいました。こういう大きさでは畑として便利でないでしょう。もうからないだろうと思いました。新聞によると、売りたいくない人の家や店などはやくざに焼かれたりするのに、ある地主は畑をもって値段の上がるのを待っているということ。アメリカでも普通の人にとって家は高いですが、これほど問題ではありません。

日本の都市の中の畑を信じられませんでした。けれどもあとで、畑の税金は安いと聞いて、不思議

不思議の国ニッポン

クレートン・ナフ

議に思いました。答えは日本人は島に住み、土地に特別な強い感情があるということでした。年とった人は戦争の時の飢餓を覚えていて、若い人も一九七三年のオイルショックを覚えています。新聞によると、日本人の70%は、アメリカや外国から米やオレンジや肉などを輸入することに反対しています。これも関係があると思います。

このことを知って、日本人の女性三人に「土地と食品が安くなるために、外国から食品を輸入した方がいいかどうか」と聞きました。この三人は若くて家のない人ですが、みんなが畑のために外国から食品を少しだけ買うほうがいいと答えました。そして一人は「戦争があったら日本の畑がいるので、外国を頼みには悪い」と言いました。けれども、もう一人は「次の戦争があれば十分以内に終わるからあとでは何もいらない」と答えました。みんなすっかり混乱してしまいました。軍隊の戦争より商売の戦争があるようです。世界の問題をどう直すのかはわかりませんが、普通のサラリーマンと食品を買う人のために、土地は小さい畑としてより家をたくさん建てて、食品を輸入したほうがいい、と思うのですが。

桃の咲く頃はあの道、桜の頃はこっちの道、若葉が萌え出したらむこうの山道と、散歩コースはいろいろありますが、時には、思いもかけず、秘密の林や新しい散歩コースをみつけることがあるものです。

小高い丘にある休暇センターの裏門から南の方へ登っていくと、道の脇をせせらぎが流れ、左側にはぶどう畑が広がり、右側には田んぼが並びます。その田んぼの奥に雑木林があるのに気づきました。「行ってみよう」と五歳児の健ちゃんが先頭にたって進みましたが、草やつるが生い茂ってチクチクするし、道ありません。さすがに健ちゃんが、「僕、戻りたい」と言いだすと、小さい子も同調して「戻りたい」と情ない声を出します。「まあ、もうちょっと」と後ろから保育者が励まします。すると、長い長い木が斜めに傾いて他の木に寄りかかっているではありませんか。サツと保育者が登ると「よし、やってみるか」と健ちゃんが続き、ほかの子も登りだします。女の子達は倒れた木に座り込んで、おままごを始めます。うっそうとした林の雰

囲気に溶け込むと、不思議な世界が広がります。アーチ型に

ひよっこクラブの探検家



林の中に家をつくらう

佐多和子

倒れた木をみつけ「家をつくらう」と保育者が動き出すと、子ども達は長い枝を探して運んできたリ、「台所はどこにしようかな」と設計する子もいます。次第に勢いにのった保育者が夢中になり服も一枚脱いで大きな家を造りだすと、子ども達の枝運びも忙しくなるのです。入り口に花を飾り、中にシートを敷いたら、立派な家のできあがり。子ども達も集って中に入りこみ、「夜ですよーっ」と言ってはみんな手枕で眠り、「朝ですよーっ」と言っては松葉を集めたほうきで部屋を掃除し、青い実をままごとのご馳走にして遊びます。「家」の外では倒木にまたがって乗りものごっこをし、虫を探します。こうして、子ども達は林の中で思わぬ宝をみつけたのでした。——でも、あとで二人の保育者は「ちと、頑張りすぎたかな」と肩を叩いていたのです。

後日、健ちゃんがお母さんに「雑木林の本を読んでもらいました。「雑木林ってなあに？」「健、ほら、ひよっこで家づくりをしたところよ」「あつ、そうか」こんな会話が交されて、ひよっこクラブの探検はこれからも続くのです。

(カット・加藤友子)

何を迷っているのか

幸せ気分の演出

毎日のように茶の間の四角い機械で「演出されたもの」をみているせいなのだろうか、人々は実に演出が上手くなった。三代目までの比較的若い層での話だ。それより上の世代になると、ステキな男とキレイな女がカッコイイ恋を演じるドラマをみても、うつとりとした後で、「ああはいかないわよねー」ということになり、さっと頭を切り換えることができるようだ。しかし、物質文明を享受しつつ育った世代は、そうはいかない。自分もあんな服を着て、あんなインテリアに囲まれて、あんなふうに素敵になって……と自己演出の望みは幻想にはとどめられない。視覚メディアは、その都度みる者の欲求を挑発し、さらに新しいモノとフニキへ、気持ちを駆り立てる。

かくて欲望は増えていく。

さて、増やされた欲望に、ヒトは奔走させられ、次第に呑みこまれていくことになる。現代人は社会に管理されているが、どうも自己管理は不十分なようだ。自分の欲望を、自分の心と相談しながら、管理していくことが必要だ。満足とは欲望が満たされる状態のことであるから、欲望が増大すれば、それだけ得難いものになる。

ところで、ヒトはなぜこうも演出したがるのだろうか。当然のことながら、幸せに近づくためである。しかし、モノやフニキは、ヒトを幸せ気分にはさせてくれるが、幸せにはしてくれない。幸せを得るために、いい学校に入り、いい会社に入り、「よくできた」相手を見つけ、金持ちになったが、幸せにはなれなかったというのと同じことである。演出された幸せのなかで虚しさを覚

える者は、こんなはずではなかったと、さらに新しい演出を考え出す。こうすれば満足なはずなのだ、と思う不満足なヒトは、やっきになって「満足」という言葉を自分の心に押しつけてみる。

次々と増やされる欲望は、目的を見失わせ、次々と生み出される幸せ気分は、ますます幸せの本質を見まがわせる。かつて日常の色どりであったはずのものは、現在、生活のすみずみに入りこみ、時に中心とさえなり、ヒトは今度は、自分の足元、自分の特徴、自分の一貫性を探し求めて、右往左往しなければならぬ。演出は、あくまで現実のささやかな色どりであってほしい。

では、一体なにが、人を満足へと導いてくれるのだろうか。祈りと時間と過程である。幸福は、となれば、それに、愛とものの考え方とが必要になろう。

井田朋子(大学生)

はなにつき

けし

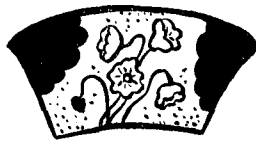
源氏物語

藤尾知子

かの御息所は、かかる御有様（葵の上が難産のすえ男
子出産）を聞き給ひても、ただならず（心がおだやかで
なく）、「かねては、いと危く聞えしを（危険な状態だとい
う噂だったのに）、たひらかに（無事生まれた）、はた」とう
ち思しけり、あやしう、われにもあらぬ御心地を、

思し続けるに、御衣なども、ただ芥子の香に、しみか
へりたり。あやしさに、御ゆるする（洗髪）参り、御衣着
かへなどし給ひて、心見給へど、なほ、同じやうにの
みあれば、わが身ながらだに、うとましく思さるるに、
まして、人の、言ひ思はむことなど、人にの給ふべき
ことならねば心ひとつに思し嘆くに、いとど、御心か
はりも、まさり行く（悩みが深くなつてゆく）。（葵）

光源氏の正妻である葵の上の出産の時、色々なもののけが
現われ、その一つが御息所の生霊だったということを本人が
悟る場面である。御息所は葵の上を悪く思ったこともなかつ
たのに、生霊の話を聞き、気がついてみると着物にも髪にも邪
気払いの護摩にたかれる芥子の実の香がしみつき、着物を着
がえても髪を洗っても、その香は消えなかったというのであ

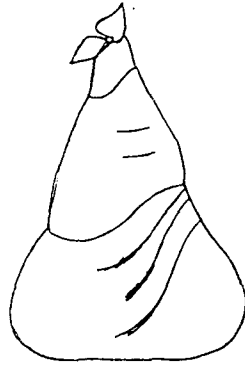


る。今ではモーニングシャンプーなど日常的であるが、当時
は髪を洗うということは、年に数度のことで、整髪は米の研
ぎ汁をすき櫛につけてすぐ方法で、身の丈に余る髪を洗い、
くせをつけないように乾かすというのは大変なことだった。

『源氏物語』には、すばらしい女性がたくさん登場する
が、その中でも御息所は源氏に気おくれを感じさせる女
性であった。だから源氏はこの人といると疲れるのであ
るが、男のエゴから人に取られるのもいやという状態で
関係が続いていた。御息所の邸宅は貴族達のサロンの存
在で、まさに平安貴族文化の体現者として君臨していた
女性が、こともあろうにもののけになり正妻に取り付い
たらしいと噂されるだけでもプライドをきずつめたもの
が、それが真実であつたと自分自身で認めねばならなかつた
時にとまどい、悲しみはどんなであつただろう。

けしは悲しい花である。この美しい花にどうして麻葉など
という恐ろしいものを作る力があるのか不思議な気がする
が、けし自身も御息所と同じように、自分の内にこめられた
魔性にとまどい、嘆いているのではないだろうか。

よそおい 文と絵 内山裕子

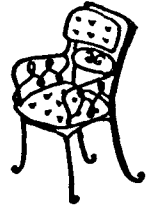


これはなんでしょう？
正解は来月号の
おたのしみ

「よそおい」第2回目は「バフバフコートのひみつ」です。モンペハウス御自慢のバフバフコート、型は一見四角い布、着るというより、はおる、まくという感じのコートです。このコート、似合う人と似合わない人がはつきりわかれちゃうのです。なぜかなあ？ 服ってボックス型の服とシャツ型の服があると思うんです。ボックス型は、服の中に身体を入れるタイプ、その代表選手は、制服・軍服、ビジネススーツ類、片やシャツ型は、皮膚感覚の延長の服、身体をしめつけず、なんの身分、特権・権威を示さない、いたって素っ気ない。以前、某雑誌でイツセイ・ミヤケのコートをほおった市川房枝さん、すてきでした。文句なくすてきでした。人が着て、はじめて完成する服、そして着る人の存在感が現れる服、服

のもつ権威や特権にたよらない、その人自身の生き方が映える服。コム・デ・ギャルソンやワイズの服、黒ばかりでずろつと長く、穴ぼこなんかわざとあいてたりして、なにかしらあれ、と思われた方も当初多かったはず。でも私達もついていた既成の服のイメージを、これでもか、これでもか、と破ろうとしたその姿勢。おしやれ！ 女らしく装うことではないという主張。ファシヨンの伝統とその年の流行色の上にたっていたパリ・コレクシオンで、人々を驚かせたあの黒い服達の快挙。服を単なる流行でみないで、着ないで！ 時々思うんです。もし教会やお寺に、突然キリスト様やお釈迦様がタイムトリップなさったらどうなるかなあーって。バフバフのシャツのような布をまいたスタイルに、居合わせた人々は目をパチクリ。まさか「そんな格好で来るなんて不謹慎、ここをどこだと思ってるの！」なんて怒る人はいないと思うけど、あーでも、もしタイムトリップなさったら、モンペハウスのバフバフコートを是非きていただきたい。どうも疲れてるなあーとか、頭が固くなってきたなあーとか、なにかに頼ろうとしているなあーとか思ったら、押し入れからゴソゴソシャツを出して下さい。そして鏡の前にたって、まいてみて下さい。どうですか、すてきでしょ。すてきだったら、まだまだ大丈夫、まだまだやれますよ。モンペハウスのバフバフコートのひみつは、こちらへんにありそうですね！

〜今月の読書から〜



半田 たつ子

『学校を疑う』

学校化社会と生徒たち

佐々木賢

◆教育現場から発言しつづける佐々木賢さんの存在は貴重だ。佐々木さんには沢山の著書がある。それらは私にとって、現場感覚をとりもどすための恰好なテキストだった。

いま、あえてこの一冊を推すのは「語らいの場を求めて」で、立川昭二氏の論文から展開した佐々木さんの考えに、感電したからだ。

立川氏は「反撃する子どもの生理」で言う。

江戸時代の伊勢神宮への集团的巡礼運動「おかげまいり」の発火点は、少年たちの行動だ

った。ヨーロッパ中世にも、フランスのオルレアン地方で、子どもたちばかりの十字軍が起こっている。少年は、農民一揆の先頭にも立った。

佐々木さんは、中国でも農民叛乱の中心になったのは、一〇歳から一五歳までの少年たちだったことを思い合わせる。一九六六年の文化大革命には、のべ一千万余の少年少女たちが紅衛兵として参加、「造反有理」を宣言し、公然と父母を批判、熱狂的・破壊的な独自の集団行動をとった。

歴史上中世から現代まで、世界中に見られる少年少女たちの集団行動から、佐々木さんは、次の教訓をひき出す。

1. 子どもたちは突如として彼等だけの独自の集団行動をとりうる。「子どもは純真で秘れを知らない」「子どもは無知だから教育するべきだ」は、双方とも大人に都合よい子ども観だ。子どもは彼等だけの独自の感性を共有し、それ故独自の文化を持ち、独自の行動をとりうる。

2. 「我が子だから」ということで子どもをみくびつてはならない。大人の庇護をたてにとつて子どもを全面的に支配し、管理しうろと思うのはまちがいだ。もともと子ども

もは、「このようにしてやろう」と大人が勝手に操作しうるものではない。また理解を示そうとしても、そうおいそれと理解ができるものではない。

3. 一三歳から一五歳の年齢の子どもたちは子どもたち全体の代表者であることを知るべきだ。この年齢の子どもたちは自分の力で勝手に全国どこへでも旅をしうる能力をもつ。大人が「まだ不十分だ。一人前とは認めたい」と言おうとしても、彼等はそのエネルギーをたてに、大人に異議を申し立てる。

4. こうした少年少女の集団行動は、しばしば時代を先取りする要素を持っている。彼等は論理性がなく、組織力も弱く、知識・経験に乏しいが、直感をたよりにその瞬間をとらえ、それが未来を予知していることがある。大人も混沌の中にいるいま、子どもがその時代閉塞状況にあきあきして拒絶反応を示したとすれば、大人はそれを馬鹿にしてはならない。

最後に、佐々木さんは現在の非行を、歴史上に見られた少年少女たちの集団行動と同一直線上において見直すことが必要だという。多くの人が子ども個人の性格や生い立ちのせ

いしているが、非行は全国的規模で起き、日本だけでなく世界的な広がりを持っている。

子どもたちは、中世の昔から、時代特有の閉塞状況を彼等の皮膚感覚でキャッチし、大人の文化に真向から叛乱を起こしてきた。

現代における閉塞状況は、文明と学校だ。両者ともサービスを押しつける。子どもたちは、その中で「してもらおう」ことを無限に求めはじめ、同時に「勝手に何かをしたい」という潜在欲求も持っている。この矛盾した態度が現代非行の特徴である。

大人は子どもの潜在欲求にこそ目を向けよう。ティーンエイジャーの文化として表面化しているそれは、歌、おどり、リズム、移動、興奮、悠久の時の流れ、叫びなど、だ。

子どもたちは既存の文明と、学校を中心とした秩序や平穏さに反発する。大人は「どうするつもりだろう」「将来はどうなるだろう」と訝しむが、大人の不安をよそに、子どもは自らの勘をたよりに、もっと人間が動物に近かったころの自律的な行動に思いを馳せる……。

教育現場にうずくまり、そこから一歩もひかず、思想を紡いだ佐々木さんは、スゴイ。

(三一書房 一四〇〇円)

『ええやんか 生徒と教師の恋』

私の真実、私の選択

大今紀子

高校在学中、同じ学校の教師と愛し合い、周囲に祝福されて結婚した紀子さん。ところが卒業後三か月で赤ちゃんが生まれるや、夫の歩さんは、停職三か月の処分。理由は、大今氏が「女生徒と特別な関係を持ち、妊娠させるに至った」というものだ。

紀さんは怒った。「私は妊娠させられたんやない!」

大今氏は、人事委員会に不服申立てを行い、四年間、公開審理の場で処分は不当であると争い続けた。紀さんの友人たちは「大今処分を高校生・未成年・女の立場から考える会」を作り、「高校生は子供を産めないか」シンポジウムを開いた。

紀さんは「処分は、高校生はまだ自分で考えられない、自分で食っていけないから『妊娠させ』られる存在だと決めつけて行われたもの」「私が産む・産まないを決めた。私の選択した恋愛・結婚を『妊娠させ』られた処分とすることは、女を保護することではなく、女性差別だ」と発言した。

そして、遂に二人は勝った。処分取消しの

裁決が出た。一九五一年に大阪府人事委の制度が発足して以来はじめてのことだった。

紀さんは、二、三歳のころよく遊んでいた野の、目の高さにあったタンポポの群れから筆を起し、その生い立ち、アメリカ留学、池田高校復学後のとまどい、疑問、そして大今歩氏との出会い・恋愛・妊娠・結婚・出産と、二十五年の生を書き上げた。彼女には、すでに二人の子どもがある。

アメリカ留学の一年間を、彼女は「ありのままの自分だけが、一瞬一瞬の私の言葉、行動すべてが勝負という毎日」「孤独感のひとつではありませんでしたが、一方でそれは最高の解放感であり、自由でした。ただ自分でありさえすればいい。その自分とは何かが見えてきた貴重な一年でした。アメリカ留学の体験は、それ以後の私にとって大きな支えになりました」と書いている。

アメリカ社会では、意見をちゃんとさえ苦勞した紀さんは、日本の学校では、意見がありすぎてなじめなかった。だが『受難の記録』というドキュメント映画で、大今氏と出会った。彼と愛を生き抜く中で、彼女は、大輪の花を開いた。

(にじ書房 一四〇〇円)



―― 蕨山高校の差別を問う ――

半田 たつ子

東京都生活文化局が、85年九月実施し、86年十一月に発表した「マスメディア文化と女性に関する調査研究」をご存じですか？ 東京都民以外の方はもちろん、都民の方にも、ほとんど知られていないでしょう。

その中に「男女の能力観」があります。「すじ道をたてて物ごとを考える能力」「人に頼らないで物ごとを処理する能力」「決断力・実行能力」とした上で、男女で差があるかどうかを尋ねたものです。

これらの能力は、いままでなんとなく男がまさるように思い込まれてきました。しかし、論理的能力―47%、決断力・実行能力―42.7%の人が「男女で差はない」と答えています。年齢別にみると「論理的な能力に差はない」という人が、10代では70%、以後ぐつと下がります。「決断力・実行能力」については、40代で50.3%。この年代が最も高いのは、家庭・地域・職場で、40代に入って初めて、女の人が決断力・実行能力を発揮する場を持つ現実があるからでしょう。同様に、学校で学んでいる10代の七割が、「論理的な能力に差はない」と答えたのは、身近に男性に比して遜色ない女性がいるからでしょう。ところが、同じ10代で「決断力・実行能力に差がない」と答えた人は39.7%です。この大きな開きは、女生徒が決断力・実行能力を発揮する場が学校にないため、と見ることもできます。能力は生かす場がなければ開花しないのです。

三月八日、朝日新聞の夕刊で取り上げってから、大きな波紋を生んだ静岡県立蕨山高校理科の合格者選抜における差別を、私は次のように整理しました。

1. 女子差別撤廃条約を批准し、教育を通してあらゆる差別をつき崩すことが求められ、教課審が高校男子の家庭科履修を答申したといういま、時代に逆行する行為である

2. 成績がたとえ上位でも、女子を落とす理由は、大学入試に関係ない家庭科を設けたくないため、女子は入学後の成績が伸びにくく、大学受験において実績アップにつながらないため。すなわち大学受験最優先の高校教育が、教科差別・女性差別を生んだ

3. 事前審査を行った真意は、理数科志望の頭のイイ子を浪人させまいとする「恩情」だろう。合格内定者が形だけ入学試験を受けることは、優越感に上塗りし、不合格者も普通科受験のチャンスを保障される。だが落ちこぼされた頭のワルイ子には、どんな配慮があるのか

4. 理数科は、「専門教育を主とする学科」とされている。手元の『全国学校総覧』によれば、東京都をはじめ十数府県が設置校ゼロ。百を越す設置校のバラまかれ方を見ていると、後ろの住民意識が浮かび上がる。イイ大学に進学させるためには、あらゆる方策をとろうとする意識だ。

5. その東京都立高校も、女子の定員枠を設けている。イイ高校で

は女子のボーダーラインが○点高いとの噂も聞く。朝日新聞「声」欄に、十五歳の永田真琴さん（厚木市）が書いている。「校長がはつきり女子はいらない、と言う高校もありますし、ある県の進学校では、女子が十人以上男子より上でなければ不合格と聞いています。また、ある中学では、その高校を受ける八十人中、女子は十五人未満とか」「自分に責任のないところで差別された時、そのショックの大きさは言い表せません。女子というだけで差別しないでほしいのです」と。

6. 埼玉・千葉以北の公立名門校には、男女別高校が多いという事実。おかしいとの声は挙がっているが、一向に改められない。蕨山高校の地域にも女子高校がある。女子はそこへ行けばいい、という意識が、今回の行為を支えたのだ。

7. 蕨山高校と同様の行為は、他県にもあった。昨年、秋田・山形でも人権擁護委員会に申し立てがあったという。あちらでも、こちらでも、歴然とした差別が十五の春を泣かせてきた。昨年、今年とひき続いて、人権の立場から取り上げられたのは、ようやく差別を許さない気運がきざしてきたと見るべきなのだろうか。

8. 現行高等学校学習指導要領、第一章総則第三款各教科・科目の履修に、普通科において「『家庭一般』はすべての女子に履修させるものとし、その単位数は、4単位を下らないようにする」とある。だが専門教育を主とする学科では「『家庭一般』は、すべての女子に履修させるものとし、その単位数は、4単位を下らないようにすること。ただし、女子生徒数がきわめて少数である場合は、この限りでない」となっている。蕨山高校は、「きわめて少数」にするために、男子三番の成績と同じ女子を落とした。

旧学習指導要領（昭和48年度―56年度）では、「専門教育を主とする学科では「……ただし、女子生徒数がきわめて少数である場合など特別の事情がある場合は、この限りでない」となっていた。「特別の事情がある場合」を削除した理由を、『高等学校学習指導要領解説 家庭編』は、「従来該当の事例としては、施設・設備の未整備の場合を考えていたが……必要な整備が図られたと考えたからである」と説明している。物的条件が整っても、女子生徒数さえきわめて少なければ、家庭一般をやらなくてもいい、と文部省が抜け道を教えていた。このことを問わなくてよいのか？ 家庭一般は「高等学校においてすべての女子に履修させる科目」という一方で、男子生徒の中に、「きわめて少数」に絞られてまじった女子を無視するのはうなずけない。いま進捗中の新学習指導要領に向けて、きちんと要望しなければならぬ。

私が新聞記事から考えたのは、右の八点でした。聞くところによると、蕨山高校で内部告発をされた先生には報復人事があったとのこと。学校や教育行政をとりしきる人に、ごくあたりまえの人間的心情が洩れてしまっていることに絶望します。しかし、こうした風土の中で、勇気をもって事実を公にした秋田・山形そして静岡の関係者の方に、限らない希望を感じます。

子ども・生徒をイイ大学に入れることに狂奔する親・教師にとって、家庭科は邪魔。家庭科履修を材料にして、差別がまかり通ることがはつきりしました。学びたい・学んでよかった家庭科を編み上げよう。男女、子ども・大人、生徒・教師、障害者・健常者……様々な色と風合いの糸で。その過程で、差別をつき崩し、学校をよみがえらせたい。私はそれを希望の灯としたいのです。

Weに

なんでも言おう
なんでも聞こう



◆We十一月号で、Weの危機的状況が編集室から訴えられましたが、この号から連続して二・三月号に至るまで、その編集内容が凛とひきしまり、一冊を読み終えた時、一段と充実感の深まるものになってきていることを、読み手側として、非常に重要なこととして受けとっております。私も衿を正して受け取ったものを、更に増幅して送り出せる人間になれるよう、Weの中で外で学びながら、力をつけたいと思っています。

「Weはなぜ創刊されたのか、私はいつもここに立ち帰る」と「Weのルネッサンス」で記された半田さんの一行の向う側に「私はなぜ、Weのなかに『I』をおいたのか」と、いつもここに立ち帰っている自分を見る思いが

して、一瞬感慨にふけてしまいました。

Weの編集者と読者との関係は、いわば夫婦の間柄のようなもので、たえず双方の緊張感と、相互に影響し合って、互いに内的成長を続けていけるかどうか、その存続の可否はかかり、その空間にかもし出される豊かさが限りなく広がっていくかどうか、そこにかかっているような気がしています。

「アメリカの共働き夫婦は今」、大変興味深く毎号待ちかねて読んでいます。特に「……妻にあつた大学教員としてと、母としての役割の間の葛藤というものは、夫の側にはない。それはなぜなのか」。ここには、性別役割分業という社会通念をつき崩していく上で、非常に大切な鍵になると感じました。この部分の追求を続けてほしいと思います。このレポートのみにとどまらず、Weの編集企画のなかでも、考えてみてほしいところですよ。

(長岡京・金森順子)

◆Weの中で、一番好きなのは「はなにつき」です。素敵です。一月号「わかな」は最高。私がクラスの子供たちとやっていることと一致したので大喜びでした。七草探しをしたこと、百人一首かるた会を設け、和歌の意味を

学び合ったこと。季節感を日常の授業で大事にして取り入れてきましたから、ああここにも、私と同じようなことを考えている人がいるという感激でした。ちなみに、私は連日百人一首を読み続けたおかげで九十七首覚ええました。難なく、です。子供たちからも、毎日やらせてとの声があがり、女の年取りを境に百人一首カルタ会は終了しましたが、子供たちの中にはしっかり根づいたようです。五年生の子供たちです。

羽生さんの巻頭詩もいいですね。特に一月号の「生きる」は最高。その詩がじんと心に響いてくるような状況の中に、私がいたからかもしれないが。羽生さんはずいぶん苦労をなさっていたのだのでしょうか。そうでなければ、あのような心やさしい表現はできませんもの。私に「泣かないで」と言ってくださっているようで、涙が出ました。うれしくなりました。

(東京・鈴木まき子)

◆二・三月号「波」を読み、考えさせられました。社会科学問題問題は、ほんとにいきなり出てきたって感じで、新聞を読んでも「なぜ? どうして急にこんなふうに変えるの?」

よくわからないなあ、と黙っていたのです。無関心ではいけないなと思いました。これは、「社会科の問題」と片づけることはできないし、これからも家庭科のことだけをみていてはダメなんだ、と痛感しました。私は何もわかっていないのだなあと思いました。これから、いろんな事を知る努力をし、しっかり考えねばと思っています。

特集もそれぞれ読みごたえがありました。教課審まとめを私はこう見る、と自分の意見を述べるところまでいきません。「私はこう思う」というものをもてるようにしたいと思っています。

「私からあなたに」の西内さんの呼びかけ、私も同感。Weの仲間をもっと増やし、教育のこと、人間らしい生活とはどんな生活かなどなど、もっとたくさんの人と、もっともっと真剣に話し合える場をつくっていききたいと思っています。

大西さんの「日本その日その日」いつも楽しみです。とてもわかりやすく、すっすっと読めます。そして、読んだあとも印象に残るものなのです。「アメリカの教育は、決してけなさない教育なのだ」、そうなのか、と考えさせられました。私は毎日の授業の中でど

うしているかなあ。

いろいろなことを考えている中にテストのことがあります。家庭科のテストがあるってことが、生徒は不満なのです。男子は家庭科のテスト勉強をしなくていい。テストの時も早く帰れる、私たちは損だ、ということなのです。テストさえしなかったら、問題は解決するという訳ではないと思いますが、でもよく考えてみたら、いったい私はなぜテストするんだろう。別にテストしなくてもいいのでは？

点をつけるためにはテストが便利かもしれませんが。レポートの点をつけるのはなかなか大変だし、今までは、テストとレポートと両方で点をつけてきたのです。それからシユタイナー教育のことを思い出して、また本を読み返したりして考えているのですけど。点数をつけなくていいんだったら、テストはいらないかもしれないね。ひとりひとりのレポートをもっといいねいに見ていくことのほうが、意味があるような気がします。

けれど、そのレポートも、「女子だけ」。生徒は、それについても不満を述べています。「家庭科、男子にも」というより「女子だけ」だから損という気持ちが強いのかもしれませ

ん。なぜか不満が強いのは、二年生のほうです。もちろん、いわゆる受験教科より家庭科で今やっていることのほうが大切だと思うという生徒や、ただ点をとるためにレポートを出しているのではなく、一生懸命やっている生徒もいます。

毎日、生徒からいろいろな問いかけがあり、私自身考えさせられることだらけです。私の授業の中身、そして私の生き方も問われているんだなと思います。ただ既成の知識を与えていくだけの授業ならどんなに楽だろうと思いつながら、だけど、やっぱりそんな授業はつまらない。深く考えることのできる授業にしたい。

もう八年も教師をしていながら、自分の授業が中身のないペラペラのような気がして、厚みがないというか、ふくらみがないとか……。だから去年やった授業は、もう自分でしようもないなあと感じてしまっ、全く同じ授業をする気になれません。その時その時は、それなりに一生懸命考えてやっているつもりなんです。

(大阪・浅井由利子)

◆一生日本にいうねなどと、夫と話し合っていたのに、突如わたしの人生に赤い雪が降ってきたかのように、人生が一変、地球の反対側に移り住むことになり、とまどいました。ここストックホルムは、十七年前に住んだことがあるとはいえ、昔のことで、はたして、東京で楽しくにぎやかにくらしていた生活を沈黙そのものの社会で、順応して生きていくだろうか、仕事はどうするなど考えすぎました。そして皆さんに心配をかけました。

でも、住めば都とはよく言ったもので、住んでみると、いろいろ新しい発見をし、今のところ、毎日の経験がとてもおもしろく思えます。黒い帽子をかぶった品のよい老紳士がスーパード安売り食品を選んでいたりとか、うちの前の大通りを見ていて、一瞬、これは中世の時代？ 着飾った騎馬隊が。パカパカ、議会の開会に向かっていたりとか、日曜の朝の教会の鐘に今一度ヨーロッパにいたことを確認したりとか、まあなんでもないことによく驚きや感激を味わっています。

また、よく散歩をします。日曜日など、三

時間ぐらい街を歩いたり、森を歩いたり、歩きます。うちの近くは町の中なので、博物館などが沢山あるのですが、いつも人がいっぱい、スウェーデンにこんなに人がいたかなあと思うほどです。クリスマス前の買い物はすごかったなあ。秋葉原を思い出したくらいですから。

今のところ、毎日ニュースにのぼっているのが、イスラエルのガザ占領、本当にイスラエルはパレスチナ人にひどいことをするのですね。バルチック海に時たま現れるまぼろしの潜水艦についても今ホットなニュースです。東西のはざまに位置するスウェーデンはなかなか微妙な立場なのですね。金がない、経済が悪いと人はいうけれど、どこもかしこも建築ラッシュ。それにショッピング街での買いっぷりをみていると、なかなかどうしてという感じです。

(ストックホルム・ピヤネル多美子)

◆最近、新聞でもあまり学校のドロドロした部分を載せなくなりましたが、問題がなくなつたのではなく、学校の一部になつてしまつ

て、学校そのものと化したためでありました。教育より経済が勝るので、地上げで得たカネでも、ワイロとしてもらったカネでも、どっちゃりあれば身は立ちゆくのだということとを、多くの人間が知ってしまったからでありましょう。ひとり辻説法をする坊さんは狂人あつかいされひつくられて、集団で甘い汁を吸っている者があつて歩する。

終末論が盛んですが、人間はやりたいたい。今にとんでもない痛い目にあうかもしれない。大人でも子どもでも、やりたいことをやっているからです。善悪の判断とは全く無関係に。そこで次の文を書きました。

「自分が正しいと思う事は、まちがいか？」
少数ではあるが、絶対型自信人間がいる。

つまり、自分の考えは正しいと言い切れる人間であり、たとえ1対100になろうとも自分の意見を引つこめない、強い精神力を持った人間である。

一般的に、このような「いつでも自分が正しい」と思っている人間は嫌われものでありその考えは、まちがいだとされている。しか

し、それこそまちがった考え方で、自分の考えが正しいと思う事は、必要なのである。

普通、人間が行動をおこす時にはまず考える。考えて①それは、正しい事であり行動にうつしてもよい ②それは、まちがいであり行動にうつしてはいけない のどちらかを判断する。

行動にうつしてもよいのは、①の場合だけである。ただ気に入らない奴というだけの理由で、ブツブツしてはいけないのは、まさにこれによる。つまり、正しいか否かの判断なしの行動は許されない。

もし、それが許されてしまうと、善悪とは関係なしに「やりたいからやる」といった事がまかり通ってしまう。従って、まず自分の考えは正しいと判断してから行動にうつさなくてはいいけない。

行動にうつす以上は、少なくとも「自分は正しい」と判断しているはずであり、もし反社会的な事をした人間が「自分のやった事は正しい」と思っていたら、それは反社会的な事をしたから責められるのであって、正しいと考えたからではない。罪は、まちがいを正しいとインプットした事にある。

思考と行動を切りはなすような教育はまち

がいである。今は、ナグリタイカラナグリ、金ガ欲シイカラウバイトル連中が多すぎる。

欲望のままに行動するようなものは、人間ではなく野獣である。もっともその欲望にしても、動物のそれには限度があるが、人間には限度がない。だから、人間の方がタチが悪い。

思考には、自信が必要である。

行動には、責任が必要である。

今、集団の中でひとりだけ違った意見を主張するのはむずかしい。もし、それが可能としたらよほどの自信がなくては無理だろう。

今、集団で行動をおこすとしたら、一人ひとりの責任はゼロかそれに近いものだろう。

本来、そういう事があつてはならないのだが。集団の中の一人ひとりが他人に求めるものは、責任であつて自信ではない。また、自分が密かに持たたいと願うのは自信であつて責任ではない。

よほど無理のある（反社会的な）意見でない限り、遠慮する事はない。自分の正しいと思つた事は主張しよう。

強い精神力を持った一人の人間が百人に圧力をかけられるのは、多数決の原理もあるが、百人の人間から見ると、自分たちに無いもの

を持った人間だと思えるからである。（自信を）持たぬ者のヒガミである。加えて、大勢でかたまつていれば責任から解放されるのに、一人がそれを妨げるからである。

善悪の判断は、人数で決まるものではない事は誰でも知っている。しかし、人数の力で押し通してしまつたほうが便利だから、そうしている。

便利なら何でもやってよいというわけではない事も知っている。しかし、たいいてい人間はやりたいからやるのだ。そこには、善悪の判断はカケラもない。

（東京・斎藤 裕）

◆結婚制度を見直すことについては、世に「非婚」なる言葉も定着し、ずいぶん議論するところが楽になってきました。

しかし、「学校は刑務所」を見直すには、まだまだ時間がかかりそうです。まちづくりの面からは、校舎を民家風にする、門を開放的にするなどありますが、教育の中身まで……となると、色々からんでものすごく大変です。Weとも交流しつつ、一緒に考えていきたいです。

（八幡市・安東尚美）



〈We 東久留米の会とWe 埼玉の会との交流会〉

◆一月二十四日Pm2時—5時。滝山団地集会所にて。働く女にとって、殊のほか日曜日は貴重な一日ではないかと思えるのですが、さすが五年のキャリアをもつ埼玉Weの会の方々は、ズバリ行動派を感じます。

もちろん話題は「家庭科の男女共修」です。脇さんから「これにも色々問題があるのよ」と顔を曇らせて話されたことでは、日頃から問題意識に欠ける私は、男女が人間として、いのちに関わるすべてを共に学べる事になるって素晴らしいと単純に喜んでいたり、「下りてくる教育課程がどうであろうと、それは形・器でしかなく、その中身が問題なのだ。……中身は私が決めていく」と、きっぱり書かれた村上昌子さんの力強い姿勢に感動し、安心したりしていましたので、具体的な

事を知らなかったという思いで、やっぱり多くの問題や教育委員会の権限の強化なんて空恐ろしい事へも関心をもちつづけてはと思いました。日頃、We誌面で様々な考えと接することが出来て勉強になります。これからもWeを楽しみにしていきます。

(植松かをり)

〈京都・家庭科の共修と共学を考える会〉

◆一月三十一日「家庭科の共修と共学を考える会」では、今年のはじめでの集まりを持ちました。東京都杉並区の清水博子さんたちがつくられた「高校家庭科の理念の推移」という冊子を取り寄せて、「主な時代の動きと家庭科教科書の理念」(年表)の部分を読み合わせという、地味で小規模な集まりを企画しました。

参加した八名(うち高校家庭科教師二名)で、一人一人が自分の高校入学の年度を明らかにしながら、当時の学校の様子や家庭科の授業の思い出、時代背景、そして自分の子どもが受けた家庭科の授業、学校生活などを盛り込んだ自己紹介をたっぷりし合って、年表の記載記事をふくらませながら読み合うことができました。参加者の高校入学年度が、団

塊の世代といわれる一九六〇年～六五年～四名を中心に、一九五〇年一名、五七年二名、七四年一名と幅広かったため、話の広がりも出たように思います。

この年表では、一九八一年の時代背景のところに「新しい家庭科—We」出版、と明記されています。この項では参加者一同ニヤリ。

「創刊」とか「発刊」とかでなく「出版」がすばらしい。こんな年表は、きっと他にはないと思います。この年表は、きつと他にはない五年までなので、続いて高校の先生方に、その後現在に至る教科書の内容と授業の様子を話していただきました。

そのあと和田洋子さんから、家教連京都サークル冬季学習会での教課審情報の報告を開く予定でしたが、内容については、We二・三月号最新情報を読むことにして、特にその日和田さんの印象に残ったところを、当日の講師高月佳子さん(家教連の本部理事)と森幸枝さんの話から伝えていただきました。

そこで一同ハツとしたのは、高月さんの「社会科解体」と新聞に書かれているが、「家庭科も解体なのです」という一言。解体というのが、組立てであるものをバラバラに分解していくことであるなら、家庭科も「家庭一

般」という科目が、家庭一般・生活技術・生活一般のうち一科目選択必修という形に解体されたことになるというところから、私はこの時、今までのモヤモヤがすっと消えて、事の本質がはっきり見えてきました。解体されたものは、組立てなおさなければなりません。

そこで、森さんの「男女共修4単位の教科として、この教科の科学性をしっかりとのおさえた新しい教科の内容を、現場にいる者の手で一日も早くうって出るように！ 京都では（家庭一般2単位男女共修は）すでに実践していることなのだから」という今すぐやらなければならないこととして提示されたことの重要性が、いっそう浮きぼりにされました。

こうして、一九四九年からの年表の上に、現在と未来を重ねて、今年はじめての集まりを終えることができ、大変有意義でした。

（金森順子）

〈We 大阪の会〉

◆二月十四日 森ノ宮の教育青年センターにて。話し合ったテーマは「男と女のいい関係」。参加者十七名。初参加は、元中学校教師の浜野さん。市立盤学校教師、中村さん。小学校教師、大藤さん。

まずは、自己紹介を兼ね、テーマについて語ってもらいました。時に、テーマから離れてしまおうのが気になりながらも、その熱い語り口に、女が情熱を持ち、生きることが、常に、男と女のいい関係を問うことになるのだからと納得して聞いていました。男女のいい関係は、単に、家庭科を共修したり、男女が同じだけ家事を分担することでは決まらないということ。その中身何が本当にすばらしいのかを見抜く力を育てるということなどが話し合われました。「Weが、その捨て石となるつもりで、がんばらねば」と飯田さん。「それは、自分との闘いなのだ」と福本さん。「女性解放の視点を欠いてはならない」と宮崎さん。もっと、もっと話していたかった。本音のところで女と男の闘いとか、これぞ本物！ のいい関係とかも聞きたかったなあ。

大阪の会も、強烈な個性が充実してまいりました。参加者は、しっかり個性を磨き、決して負けない迫力を持ちあいたいものだと思っています。

次回は、五月十五日（日）一時より。同じく森ノ宮、法円坂会館の右隣り、教育青年センターにて。テーマは「自分を、どう変えていくのか」で話し合う予定です。

（北川好美）

〈We 和光の会〉

◆Weの定期購読者を中心に、毎月一回の会合が続いて、もう何年になりましたか。いろんな仕事をしている四・五十代の女が「家庭科の男女共修」や「男女の役割分担固定化反対」に共鳴して、日常生活の中のエピソードや不満を語り、できるところから小さな取り組みを通して、世の中を変える作業を心掛けています。

その一例、メンバーの何人かが参加している公民館の中国語講座では、当番（湯茶サービス、講師接待など）は男女年齢を問わず一律平等です。提案はもちろん私達でした。それに対して、若い婦人から戸惑いと、男性への同情（立派に定年を迎えた方々もいますから）の気持が表明されましたが、丁寧なユーモアを混じえて説得をしたところ、なるほどということになりました。それ以前に、講師の中国青年が「私達の国では男女が共同して家事育児をやります」と授業中に話してくれていたのも効果がありました。

これまで機会がなかったですから、やり始めれば男性も上手にお茶を入れてくれま

す。時間の節約のために、当番以外も手伝いますから、和気あいあい、女性が当番のときも男性が卒先して手伝ってくれます。

過日、私費留学生数人も招いて餃子と米粉^{ドリアン}パーティを催した時は、全員エプロン着用、^{ドリアン}「働かざるもの食うべからず」をモットーに、とても楽しく、中国語で料理の実習をしました。その折、男性三人の留学生たちの手慣れた調理ぶりには、びっくりしました。十歳位から餃子は男の子も作りはじめるということでしたが、作るだけではなく、ひよいひよいと、台布巾で、その辺の水をぬぐったり、使ったボールをさつと洗い流すさまは、一朝一夕の腕ではないと感心しました。参加していた日本の男子大学生―彼も親元を離れ自炊しているのですが―も、同世代中国青年の様子に、受験勉強一途の多くの同輩との比較をして、感じるところがあったようです。

私たちはWeの精神を、「みんなで」あるいはいいことは仏語の「ウィ」とばかりに賛同して、これからも実践していこうと思います。

(和光市・坂井和子・加藤真代)
グループ連絡先 太刀川正子(ピッピ)

星(03)九四三―五六一二

〈We兵庫の会〉

◆一月十日、神戸市立勤労会館で「子育てと女性の生き方」というテーマで21回目の例会を持ちました。福知山から村岡さん、そして大阪の会の方たちも加わり、年齢的にも幅広いメンバー、男性三名(いずれもユニークな方ばかり)と女性一七名の参加でした。

兵庫の会の多くは教師、そこでゲストとして、損害保険会社に勤めて16年、小四・小二の二児の母でもある佐藤さんに来ていただき共働きの実感を話していただきました。数年前からOA化、女性の戦略化が進み、残業も多く、きびしくなってきたということです。

実家の近くに住み、おかあさまががんばって続けなさいと励ましてくれたこと。おつれあいが高校教師で、保育所の迎えや子供のめんどろをよく見て協力してくれ、今日までのりきってこれたということ。彼女からみるおつれあいの生活は、人間らしく羨やましいとのこと。

続いて参加者が、わが子育てについて話しました。井上さん(高校教師)は「子育てをしながら仕事が続けられるはずがないと思っていたが、先輩に励まされながらやってこれた。今は二人とも小学生になった」

乾さん(中学校教師)「教師同士では時間的にきつuitと思ったが、農業(アマリスの品種改良をされている)なら、自由になる時間があるのでやっていけると思ひ結婚した。今は職場で女性の年長となり、若い共働きの人々を励ましながらやってる」

星野さん(短大勤務)「自分は何のために働いているかという目的意識が大切では。やめることで解決してはだめ」と。星野さんが帰られたあとで、お姑さんが入院中で、親戚や周りから、仕事をやめて! という圧力がかかっていることを知り、そんな中でのこの言葉、深く心にしみ入りました。

浅井さん(高校教師)から「今の高校生は押しつけがましいのはきらいだけど、彼女らの柔軟性に期待したい」と。

自分の働く意味をしっかり見つめながら、身近なところで学校現場で何ができるか考えさせられた一日でした。

(西本和代)

水辺の空間を市民の手に

「三多摩問題調査研究会」

〈金子 博〉

三多摩問題調査研究会というむずかしい名前のグループが東京・小金井市に生れたのは、昭和四十七年のことでした。当時、市内を流れる多摩川の支流・野川は汚濁が激しく、悪臭にみちており、住民からは暗渠化の声も上がっていた。そんな中で、清らかな水を求めて必死に泳ぐ一匹のユイの姿を、会員の一人が見つけたのです。このまま無関心であり続けていいのだろうか。汚濁した野川の水は多摩川を汚し、東京湾を死の海にするのではないのか。

野川流域には七〇余の湧水地点があり、この保全が清流を取戻すための必要不可欠な課題となり、その後一〇年に渡って湧水量調査などを実施したのです。その間に開発から湧水を守る運動にも住民とともに取組み、それらの一つのまとめとして昨年、『都市に泉を』（NHKブックス）として出版しました。

今、会には野川問題研究班と自治体問題研究班があります。が、他のどんな問題についても自由に取組んでいけるような会則で運営されています。会員数四六名、職業、年齢も様々、住んでいる所も全国各地です。

連絡先 〒184 東京都小金井市中町2-5-13

☎ 0423-84-6827

We networking

♪イキイキぐるうぷ♪自己紹介♪

We networking

あそび心の学校づくり

「学校レクリエーション・ネットワーク」

〈田中 一行〉

子どもにとって、学校が楽しく、生き生きしたものであってほしい。

子どもに豊かなレク力（自己実現能力）を身につけてほしい。

こういった願いのもとに、学校にレクリエーションを導入し、あそび感覚の学校づくりを目指しています。そのためにどうすれば、与えるあそびから自発的なあそびになるか。あそび感覚の学びが生まれるか。それをどう組織だてていくのか。その方法や情報を共有し合うネットワークです。

8月には横浜で「全国学校レク研究会大会」を開きます。Weの夏季フォーラム（8月6、7、8日、大阪）とは、日程的に重なるのですが、関東地区で開催されますので、大阪までは行けないという人、ぜひ参加してください。

8月7、8、9日、全国の学校レク実践家が、横浜に集まります。目指すのは、レク力のある子ども。自分の時間を、自分にとって有効に使いこなす子どもの育成です。

連絡、問い合わせ、申し込みは

全国学校レクリエーション・ネットワーク事務局へ

〒151 渋谷区千駄ヶ谷4-25-2 修養団会館内7階
(財)日本レクリエーション協会内 ☎03-423-1241

泉

この頁は、あなたと私の情報交換の場。小さなスペースですが、ご利用ください

◆第七回イキイキ子育てセミナー

♀女にとって、男にとって、家族にとって、子育てとは何かを考えてみませんか！ 子どもの自己形成と家族関係を問ひ直そう。

。四月二十四日（日） p.m 十二時～四時半

。東京都婦人情報センター（セントラルプラザ十五階）

。一部 石川由紀、平井雷太両氏他二名のパネラーによる基調報告

二部 ワークショップ

。参加費 千円 保育室あり（有料、申込み制）

主催「幼稚園一〇番」

問合せ先 森本 ☎0474-67-8232

山田 ☎0474-91-0676

◆「今、天皇制を問う」全国フォーラム
「昭和Xデーを前にして——天皇の戦争

責任問題について論議するにせよ、天皇制そのもののありかたについて討論するにせよ、

天皇・天皇制についての議論を公然と展開することは、天皇の死と新天皇即位を理由とする戒厳体制に反対し、自由に開かれた空気をつくりだす上で重要な意義があるのではないでしょうか」（チラシより抜すい）

。四月二十九日（金）全体集会（p.m 六時から）
豊島公会堂

。四月三十日（土）分科会（a.m 九時半から）
（会場未定）全体集会（p.m 六時から） 豊島公会堂

主催および問合せ先 「今、天皇制を問う」
全国フォーラム運営委員会（千代田区九段北一ノ十一ノ十二） ☎03-239-3020

◆「反核・軍縮・地球をまもる女たちの集会」

「日本の高校生の三分の二は「核戦争はおおると思っている」と言っています。今はもうひとりひとり、立上って「ノー」を言う以外にこの状況を打開することはできません。私たちは生命を生み育てる女たちの「平和への強固な意志」を集結して世界中の為政者たちに警告し、核軍拡競争への歯止めをかけなければなりません。

被爆の地ヒロシマに、アジア・太平洋地域の仲間の方々をお招きして、『反核・軍縮・地球をまもる女たちの集会』を開きたいと思っています。それぞれの国の事情を交換し理解しあい、アジア・太平洋地域の非核化と軍縮、外国軍隊の撤退を要求する連帯行動をおこしましょう」（チラシより抜すい）

I ヒロシマ・フォーラム

。五月十七日（火）・十八日（水） a.m 九時～p.m 五時 広島県民文化センター（参加費 二千元）

II 問題別懇談会

＜女性の力を結集して、

核のない21世紀を！＞

。五月二十一日（土） a.m 十一時～p.m 四時半

日本教育会館・総評会館（参加費 五百円）

① アジア・太平洋地域の女性の連帯のために

② アジア・太平洋地域の反核運動を学ぶ

③ 子どもを平和の担い手に育てるために

Ⅲ 東京集会

＜まもろう！ 反核・軍縮で美しい地球を＞

。五月二十二日（日） a.m 九時半～p.m 一時

九段会館（参加費 千円）

（終了後、銀ブラデモ）

問合せ先 反核・軍縮・地球をまもる女たちの集会（千代田区一ツ橋二ノ六ノ二 日本教育会館内 ☎03-234-3495・265-2191）

◆反原発ビデオテープの貸し出し

横須賀市の武田 節さんより、左記のビデオテープが寄贈されました。貸し出しご希望の方は、ウイ書房までご連絡ください。（但し、往復の送料は、ご負担ください）

広瀬 隆氏講演会

『チェルノブイリ原発事故と私たちの未来』
'88年二月二十一日 於金沢市文化ホール

◆三冊目の実践集『くらしを見つめる』—家庭科は、共学にせにゃん—

「熊本では、官制の研究会でさえ、共学抜きでは論議が進まない状況まで変化してきたのは、共学の必要性を主張してきた人々が、自らの足元での活動を続けてきたからです」（本誌、あとがきより）

サークルを発足して、20年を経過。「平等と平和な暮らしを創る」「食べものを考える」に続いて、三冊目の実践集を刊行しました。

問合せ先 熊本県阿蘇郡白水村中松335-1

後藤方 熊本県家庭科サークル

編集室からあなたにⅢ

三月十八、十九日の両日、一泊二日の「夏増刊号」編集会議合宿が、都立八王子青年の家で持たれました。

参加者は、山本真規子・若竹キミイ・鈴木昭彦・榊野良平・ごじらりようこ・杉村祐美諸氏とウイ書房の五人の計十一人でした。そこへ飛び入りで現れたのが、この四月から岡山大学に学士入学をするというビッグニュースを携えた丹原恒則さんでした。帰りにには、すっかり原稿依頼というおみやげをもたされましたが、希望を胸にいっぱい詰め込んで、今まさに春という感じでした。

この十一人が夕食後の七時から十二時まで、その後は有志が寝たり起きたりしながら朝まで、話題は「増刊号」に限らず、Weのことであったり、自分の人生のことであったり、夜を徹して語り尽くし合ったという感じでした。翌朝、この輪に平井雷太さんが加わって、まとまらないものを何とかまとめるかたちで終了しました。

＜We夏の増刊号編集会議 合宿の報告＞

二日間十三人で話し合ったことのすべてをここでお伝えできないのが残念ですが、「夏増刊号」のラフスケッチということでご報告します。

★テーマ「教育はどこへ」

★内容……(1)春ゼミの報告と座談会／(2)「お訪ねしました」——二十代の若者が人生の先輩（小沢牧子・富永健一・後藤安子氏）を訪問／(3)鈴木昭彦氏の友人の教師たちの対談記録「今、教師であること」／(4)今の教育状況をつき抜けて、独自の学びを試みている個人・団体の紹介——共学舎・デンマーク牧場・丹原恒則・ごじらりようこ氏のこれまでとこれから、など／(5)日頃教育について考えていること——Weの読者からの投稿はがきの紹介

——特に(5)については読者のみなさまからのお便りをお待ちしています。——

十字路

〈石川〉すべての命を奪う原発に反対します

(朝日1/10)

「だまっていたのは能登原発が建設に向かつて進むだけ、県内の女性が立ち上がり、生命を脅かす原発の建設を中止させよう」と、高校家庭科の教員木下雅子さんから五人が、県内人口の半数の署名を今秋までに集めようと活動を始めた。また二月下旬の公開ヒアリングの前に、知事と北陸電力社長に建設中止の申し入れをする。北電が羽咋郡志賀町赤住に建設を計画している能登原発は、去年十二月準備工事に着手、今年十二月には本格着工したいとしている。

(荒井紀子)

〈千葉〉「丸刈り強制の校則撤廃」を決議

(毎日1/18)

「男子中学生に頭髪の丸刈りを強制しないで……」。こう訴える市民の集いが、一月十七日我孫子市民会館で開かれた。集会には中学生や父母、児童・生徒の教育を考える人たちが百人が参加、「丸刈り強制の校則撤廃」を決議し、市教委、市内の六中学校長に①頭髪は

体の一部、子供の意思に反し強制的に丸刈り統一することは個人の尊重を侵し、人権の侵害②丸刈り強制は体罰、登校拒否を誘発する——など六項目の要望書提出を決めた。今春からの同校則撤廃を訴え、さらに幅広い市民運動に展開していく。

(木田直子)

小学校授業もハイテク時代(毎日1/30)

松戸市馬橋の市立馬橋小学校に県内で初めてコンピュータ授業が取り入れられることになった。授業は二月五日から行われる。二月十八日には、河野太郎教諭が五年の算数「割合とグラフ(百分率)」の公開授業、次いで、深谷哲大阪大学教授が「コンピュータを使った学習指導のあり方」を講演する。同校では児童用コンピュータ四十台と、教師用の二台を備えた。今後は一年生から六年生まで二十三クラスが一週間に一時間ずつ授業する。ソフトは同校教師が独自に作ったもので、算数、理科、社会、国語、音楽など。同校は視聴覚教育センター校でもあり、四十一人の教職員全員がコンピュータの勉強に取り組

んできた。田原校長は「人間的触れ合いがなくなるのではと心配したが、“人間疎外”は全くない。児童も友だち同士で相談するなど夢中になっています」というのだが。(木田直子)

〈神奈川〉「池子の森を守る思いを伝える」

——訪米の市民外交(朝日2/55/27)

長洲知事の調停案に基づき、建設が進む逗子・池子の森の米軍家族住宅を横目に、富野逗子市長は十四日訪米の途についた。米国では上・下院議員や自然保護団体関係者らと会见する。また「日米両市民の草の根の力で池子の森を守ろう」と逗子市民らの「セイブ・イケゴ」ツアーの一行六十七人は、十六日成田を発ち、史上例のない「市民外交」で市長を支援する。「池子の森を守れ」との逗子の市民運動は、83年六月の主婦三人による「ベリタゴン直訴」以来、さまざまなルートで米国民に直接訴えてきた。

(渋谷裕子)

〈京都〉「女のフェスティバル」に千人参加

(朝日3/7)

女性同士、手をつなぎ合おうと、シンポジウムからダンス、ヨガ、パザーまで、さまざまな催しを盛り込んだ「第三回あながつく

る女のフェスティバル」が六日、京都市中区の京都市社会教育総合センターで開かれた。参加グループは「アジアの女たちの会・関西」「原発なしで暮したい・京都」「婦人民主クラブ」など約六十五団体。参加者は約千人。女の体や婚姻制度、アジアの女性との連帯などについて話し合った。原発についての討論会には約百人が参加して、それぞれの体験に基づいた提案や呼びかけがなされた。

(塚崎美和子)

〈大阪〉浪速っ子は遊び上手 (朝日2/22)

くもん子ども研究所の調査により、東京と大阪の子どもの遊びについてのアンケート調査がまとめられた。対象は大阪、東京の小学生(四、五、六年)各百人。調査によると、遊びに使える自由時間の差はなく、平日は三時間半、休日は七時間半、よく遊ぶ場所はどこでも屋外が多く、校庭で遊ぶ割合は大阪43%に対し、東京71%。自宅周辺で遊ぶ割合は大阪64%、東京45%。一般に大阪よりも東京が、女子よりも男子が大きなグループをつくっている。遊びの相手は同級生が多く、兄弟や父親など家族的な遊びは大阪の方がはるかに高い。男女合わせて最もポピュラーな屋外

の遊びは大阪ではローラースケート、東京は鬼ごっこ、屋内ではどちらもテレビゲームだった。

(徳永美知子)

72%が「いじめ減らぬ」(朝日3/7)

府人権擁護委員連合会は府内全域の父母を対象に「いじめ」に関する調査をした。それによると「いじめは減っていない」とするものが7割を超え、「わが子がいじめられた」というものが33%を占めた。これまでの調査によると、いじめられている子の半数以上がだれにも言わずがまんしたと答えていることから、相当数のいじめ被害が広がっていると考えられる。いじめの内容は、「無視されたり仲間外れにされた」32%、「物を隠されたり、壊された」19%など目につにくい内容が目立つ。

(大江美香子)

〈鳥取〉日本海新聞にみる鳥取女性の歩み

昭和30-34年(新日本海2/21)

「もはや戦後ではない」と言い切った昭和三十一年の経済白書。世の中がめざましい進展をとげる中で、鳥取の女性も「女ばかりの労働組合」(境港・中央物産)を結成(30年12月26日付)、米子では東京に次いで「商工会

議所婦人会」もできた(32年2月22日付)。

「売春防止法」が成立したのは三十一年、施行されたのは三十二年だが、法律ができたからといって即、更生できるわけはなく、「やめたい者は15%、続けたい者は53%」の結果

が出ている(9月12付)。県政に婦人の声をと「県婦人懇話会」が三十年に発足、婦人相談所、婦人寮が三十二年に開設され、翌年には鳥取婦人会館が設立されたが五十五年に閉館した。

(前田享子)

〈徳島〉特殊教育とは何か——32年の体験が

本に(徳島1/22)

四国四県の障害児教育に携わる教師たちでつくる四国特殊教育ゼミナールは「暖かいまなざし 特殊教育三十二年・枝川豊の卒業生訪問記」(A5判、181頁)を作った。本書は二章から成り、一章は、鳴門教育大学学校教育学部付属養護学校副校長の枝川さんが若い教師らに書いてきたものをまとめたもので、明るく元気な学校現場が生きて描かれている。二章は生徒たちの卒業後の暮らしぶりを調べ、今後の教育の指針、反省につなげようと、枝川さんが訪ね歩いた記録。申込先は同養護学校 井村雄三 ☎0886-53-0151



あ ん て な



★理科入試、事前判定で女生徒を制限 ——家庭科の授業の設置を嫌う★

静岡県立韮山高校で、入学試験に先立ち「予備選考」が行われ家庭科授業の設置を嫌った同高が女子の志望者10人のうち6人を門前払いしたとして、沼津市内の弁護士が8日までに県弁護士会人権擁護委員会に人権侵害救済を申し立てた(3・8付朝日夕、3・9付毎日)。県教育委員会は9日、高校教育課の指導主事3人を韮山高に派遣、事実調査に乗り出したが(3・10付朝日)、県下の大手進学塾発行の進路資料の中にも「事前審査」が明記されており、受験生や父母、進学関係者の間では公然の事実だったことが明らかになった(3・11付朝日夕)。

★小・中・高校でエイズの正しい知識を ——文部省が指導の手引書作成★

3月24日、文部省はエイズについての正しい知識を子どもたちに教え偏見や差別を生まないようにしようと、教師向けの指導の手引書を作成、全市町村の教育委員会に配付することになった。また、来年度から小学校高学年と中・高校の授業やホームルームなどでこの手引きに基づくエイズ教育を取り入れることを決めた(2・25付各紙)。

★皇室国家に生まれた喜びと誇り教えよ一 東久留米市小学校教頭会研修で違憲文書★

昨年12月18日に行われた東京都東久留米市の教頭会研修会で、「日の丸・君が代」をテーマにした研修が行われ、そこで「実施にあたって〈普段より〉皇室国家に生まれた日本人としての喜びと誇りを持たせる指導」を行うこと、反対者を説得するためには「PTA幹部の意向を握り、協力を求める」、「職員会議で多数の反対意見があってもこれに惑わされず校長の信念や学校管理・運営権を貫くこと」、「子ども達に新しい国家意識をもたせる」といった文面の違憲文書が配付されたことが明らかになった(2・19付朝日夕、2・20付朝日〔多摩版〕、2・23付読売)。

★今も昔も「隠れんぼ」「鬼ごっこ」が人気 ——「馬とび」は男女逆転★

3月11日、青少年交友協会が約5万人に對するアンケート「野外伝承遊びの実態調査」の結果がまとめられた。もっとも多くが体験していたのはどの世代でも「隠れんぼ」「鬼ごっこ」「縄とび」「シャボン玉」の順で、世代を通じて減ってきたのは「イナゴ捕り」「トンボ釣り」「パチンコ」「おはじき」「チャンバラ」など。しだいに男女間の違いがなくなる傾向にあり、10—14歳の「馬とび」では女が男を上回った(3・12付各紙)。

★教育用パソコン試作機公開 「B-TRON」方式が主流★

3月9日、財団法人「コンピュータ教育開発センター」(CEC)は文部省と通産省が全国の中学校への導入を計画している教育用パソコンの試作機を9台公開したが、すべて新規格の「B-TRON」方式にもとづくものであった。文部省は現在8校ある研究指定校を来年度は14校に拡大、93年度には中学校の技術家庭科に「情報処理」を選択領域として導入する予定(3・10付毎日、3・19付朝日夕)。

★ポスト臨教審7人で構成 ——設置法案まとまる

中島文相は2月22日衆院予算委員会で、臨教審解散後に再び首相直属の機関として設置されようとしている「臨時教育改革推進会議」(仮称)の役割を臨教審答申に基づいた当面の具体的な改革の推進役に限定するとの意向を表明(2・23付朝日)、それを受けて文部省は3月4日、同会議を総理府に置くための設置法案をまとめた。7人の委員の任命には国会の同意を必要としておらず、臨教審や新行革審に比べて権威づけが弱くなりそうな見込み(3・4付毎日夕)。同法案は11日の閣議で決定された(3・12付各紙)。

★中教審、4年ぶり再開へ

——当面は「生涯学習」を審議★

文部省は3月10日、文相の諮問機関、中央教育審議会を4年ぶりに再開する方針を決めた。首相直属で設置予定の臨時教育改革推進会議（ポスト臨教審）が、臨教審答申の実現のための施策に限って審議する機関に役割が狭められたことに伴うもので、臨教審が積み残した課題や新しいテーマは今後、中教審が扱うことになる（3・10付朝日夕）。

★「いじめ」半減したが陰湿化★

法務省は3月13日、「62年人権擁護機関のいじめ問題取り組みの概要」を発表、昨年の「いじめ」は量的に半減した一方、「言葉によるいじめ」42.6%、「無視、仲間はずれ」34.3%が、「殴る・けるなどの暴行・傷害」29.7%を件数・増加率とも上回り、陰湿、潜在化の傾向を強めていることがわかった。法務局は「いじめ」の被害者のうち登校拒否をした生徒が107人を数えたことなどから、今年度は特に不登校児に焦点を絞った実態調査を実施することになっている（3・14付各紙）。

★まだわからぬか アイヌの痛み

——札幌で相次ぐ和人告発★

民族衣装を着た自分の写真を無断で掲載されたと、伊賀美恵子さんが学者らを相手取り、謝罪文掲載などを求めて東京地裁に起こした「アイヌ肖像権訴訟」で、2月22—23日、札幌地裁で出張尋問が行われた。

また、二風谷ダム建設用地の地権者として、アイヌ文化資料館館長の萱野茂さんらは15日、北海道収用委員会の審理の場で少数者としてのアイヌ民族の痛みを訴えた。

さらに、道や経済団体が企画している「赤レンガ100年祭」の計画書に「アイヌ」の表現すら出てこないことにアイヌ解放同盟の山本一昭さんらは抗議、「アイヌの心を逆なでするような『開拓の拠点』の100年祭を、なぜ今実施するのか」と反発している（2・25朝日）。

こういった中で、北海道教育大学は88年度からカリキュラムの中にアイヌ民族の歴史や文化を単独の科目として位置づけることになり、新年度から札幌分校で一般教育

科目「アイヌ民族」が開講、釧路分校でも「少数民族と教育・文化」と題する一般教育科目が89年度から始められることとなった（3・9付毎日他）。

★東大、大学院重点大学へ——

学内改組の中間答申、評議会です承★

東大では、昨年来大学院問題懇談会を設置して大学院問題を中心とした学内改組を検討してきたが（3・7付朝日）、3月15日、評議会を開き、学内の教育研究組織を大学院重点大学として改組するという大学院問題懇談会の第二次中間答申を了承した。この結果、東大は戦前から続く学部中心の運営制度を早急に改め、大学院と学部の連携をはかるための組織である「学院」を学内措置で新しく設けることになった。職組、院生協議会、学生自治会は、東大の特権的拡充と教養学部・研究所解体の危機をもたらすとして反対している（3・16付朝日）。

★韓国新政権スタート

——与党、選挙法を単独採決★

韓国では初の平和的政権交代である盧泰愚・第13代大統領の就任式が2月25日、ソウルで行われた（2・27付各紙夕）。

26日の初閣議で政治犯ら約7000人の特赦が決まったが、釈放者の中には在日韓国人政治犯は含まれていない（2・27付朝日他）。

韓国の与党・民主主義党は3月8日、臨時国会で小選挙区制を柱とする国会議員選挙法改正案を単独で採決し、可決・成立させた。野党は本会議場の議長席を占拠するなどして強く抵抗した（3・9付各紙）。

★米、ホンジュラスに派兵

——中南米情勢悪化★

レーガン米大統領は3月16日、ニカラグア政府軍がホンジュラス領内へ進攻したとして、降下部隊など米軍の派遣を決定、ニカラグア政府は17日、米国戦闘機が同国北部の軍拠点を爆撃したと発表した（3・17・18付朝日他）。

◎4月号本欄に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

- ・94頁左12行目、個体化→個体死
- ・同頁右6行目、岡山県教祖→岡山県教組

北海道

＜旭川＞京栄堂、樋口〈札幌〉
北東京堂、維新堂＜島松＞グ
イヤク＜苫小牧＞熊谷＜伊達＞新
生堂＜函館＞神田、森文化堂
青森県
＜青森＞成田本店、遠藤＜八
戸＞伊吉書院＜弘前＞とよはら
＜三沢＞好文堂

岩手県

＜盛岡＞東山堂＜花巻＞誠山房
＜水沢＞松山
宮城県
＜仙台＞こどもの本の店ア
ーの家、八重洲、萩書店、高山、
千恵、宝文堂＜古川＞高山
＜泉＞ホビット館

秋田県

＜秋田＞加賀屋、たかのずや、
中田、荒川＜大館＞石川＜湯
沢＞おびきゅう

山形県

＜酒田＞八文字屋、遠藤＜山形＞
高陽堂、ほんべい、教育用品
＜鶴岡＞阿部久

福島県

＜福島＞岩瀬、西沢＜郡山＞松
文堂、すばる＜会津若松＞ニ
シザワ＜いわき＞BSオオスカ
＜梁川＞第二大竹

群馬県

＜藤岡＞川島朝日堂＜前橋＞ア
ルプス社、遊書館＜中之条＞
島村＜渋川＞正林堂

栃木県

＜宇都宮＞杉山＜足利＞関口
＜栃木＞福田屋
茨城県

＜水戸＞ツルヤB.C＜土浦＞白
石、マスゼン
埼玉県

＜浦和＞岩淵、須原屋＜川口＞
新井、ブックスサトウ、文栄堂
新郷店＜越谷＞日野屋＜東松山＞
比企文化社＜和光＞山屋＜狭
山＞楓書房＜蓮田＞マスタグ＜大
宮＞阿里書房、若井＜飯能＞安
藤芳文堂＜入間＞ヤマトウ＜新
座＞みやかわ南口店＜熊谷＞
神田弘文堂

千葉県

＜船橋＞前原かっぱ、西武B.C、
はつらつ書房＜松戸＞元山＜津
田沼＞大和屋＜佐原＞多田屋
＜市川＞大杉、千里堂＜成田＞
日昇堂＜四街道＞モンジュ堂
千代田店＜東葛飾郡＞ブックス
さかき

東京都

＜千代田＞日成堂、書肆アク
セス、三省堂本店、書泉グラ
ンデ、東京堂、八重洲B.C、
芸能、笠原松文堂＜文京＞ビ
ッピ、文明堂＜豊島＞池袋、紀
文堂＜杉並＞木風舎、新愛、
ブラサード、たつみ書房、西
萩、結、大正堂、みどり書房、
山口＜新宿＞紀伊國屋、模索
舎、風書房、伊野屋＜渋谷＞す
べす、えいががさい＜練馬＞い
づみ＜葛飾＞宏精堂、中村、稲
田、大和＜世田谷＞やまべ、江
崎＜北＞愛京堂＜大田＞三州
堂、藤乃屋＜荒川＞昌栄堂＜江
東＞吉田書籍部＜品川＞雄文
堂＜目黒＞中川＜吉祥寺＞ウ
ニタ書房＜三鷹＞第九書房、
たべもの村＜武蔵野＞いからし
＜調布＞神代、小松＜小金井＞
かごや＜府中＞国府書店会、
一二三書房＜国分寺＞吉野＜国
立＞増田、富士見台店＜立川＞
オリオン書房、オリオン書房ウ
イル店、泰明堂、石井＜小平＞和
中、明文堂、大島＜清瀬＞マル
オカ、飯田＜町田＞久美堂＜日
野＞南友堂、ブックス伊藤
神奈川県
＜横浜＞有隣堂、栄松堂、とも
だち、みどり書房、有文堂、博
修堂＜川崎＞北野、早川、大塚、
ホーエイ＜相模原＞中村
書房＜鎌倉＞大船書房＜相模
大野＞相模書房＜藤沢＞東松
堂＜綾瀬＞藤美堂＜茅ヶ崎＞
文泉堂＜小田原＞伊勢治＜平
塚＞サクラ＜大和＞中央＜厚木＞
内田屋書房、相田
静岡県
＜静岡＞古見、森上、江崎外商
部＜磐田＞あつみ＜浜北＞谷
島屋＜浜松＞遠州堂、船橋＜沼
津＞マルサン、ランクイ社＜清水＞
戸田＜下田＞村上＜焼津＞谷
島屋＜富士宮＞小長谷＜榛原
郡＞大石
愛知県
＜一宮＞文正堂、資然堂＜名古屋＞
ウニタ、谷口文正館、白樺
書房西店、白揚、竹中、中田書
房、きたやま、丸山、ちくさ正
文館、兼松、丸善、前田、ボラン
の広場＜江南＞青雲堂＜豊橋＞
文教、耕文堂、豊川堂＜豊田＞
鈴彦＜岡崎＞カマクラ文庫＜尾
張旭＞活人堂＜瀬戸＞三浦、
＜西尾＞黒部＜愛知郡＞日進書
房＜刈谷＞酒井日進堂
岐阜県
＜岐阜＞文光堂
新潟県
＜新潟＞栗山、万松堂、野沢、
文信堂＜上越＞玉川、春陽館
＜新津＞英進堂＜長岡＞覚張

新潟県

＜新潟＞福豊
富山県
＜富山＞清明堂＜高岡＞清文堂、
イソップ屋＜氷見＞布瀬善＜新
潟＞川辺

長野県

＜岡谷＞笠原＜松本＞新光堂、
りょうん堂＜長野＞平安堂＜上
田＞英文堂＜飯田＞平安堂
＜伊那＞矢島＜須坂＞山下＜上
水内郡＞靴屋

石川県

＜金沢＞うつのみややセールスセ
ンター、北国書林＜鹿島郡＞
千間

福井県

＜福井＞ひまわり、品川、勝木
奈良県
＜天理＞海老山＜奈良＞広谷屋
南都書林、たけだ

三重県

＜松阪＞中村＜伊勢＞古川＜桑
名＞潮
大阪府
＜大阪＞紀伊國屋、ユーゴー、
樋口書籍、米原十六堂、藤川、
学の友、西坂、呼文堂、もり、
富士原文信堂、飯田集英館、
川口文書堂、坂口、篠田、丸
山、青泉社＜東大阪＞ヒバリヤ、
栗林書房＜和泉＞かつらぎ＜豊
中＞昌文堂、豊文堂、センリ
＜高槻＞コーベブックス西武
ダイハチ書房＜池田＞春江＜岸
和田＞斉藤＜堺＞ワールド、西
村、清城堂、三教堂、登美屋、
みいけ、カツヤ書房＜茨木＞サ
ノヤ＜寝屋川＞中村興文堂、
寝屋川団地

京都府

＜京都＞松香堂、オデッサ書房、
中島書院、洛陽＜宇治＞大久保
京都書院、井田＜長岡京＞恵
文社神足店＜東大塚＞亀岡書房
＜舞鶴＞舞鶴堂、北浦愛文堂
和歌山県

＜和歌山＞宇治、有馬＜新宮＞
荒尾成文堂
兵庫県
＜神戸＞流泉書房、ヒカリ、日
進堂、文進堂、幾久、明文館、
漢口堂＜西宮＞イカロス書房
＜尼崎＞宣文堂、塚新西武B.C
＜姫路＞姫路九善、浅野八代
＜明石＞学友書房、原＜豊岡＞
ひさや＜三木＞三木ブックス

岡山県

＜笠岡＞池田成章堂＜井原＞金
森＜岡山＞福島かねつき堂＜倉
敷＞吉川隆泉堂、ニビスヤ
鳥取県
＜米子＞今井MC本店＜鳥取＞

富士

島根県

＜出雲＞武田＜鹿足郡＞金山
文具店＜松江＞ブックス文化
の友＜浜田＞吉田屋＜邑智郡＞
森脇

広島県

＜広島＞やまびこ、いづみ、紀
伊國屋、ニシヤ、黙乎堂＜尾
道＞花本、啓文社＜福山＞岡田
香川県

高松県

＜高松＞みやたけ
愛媛県
＜川之江＞トウヤおおくぼ＜松
山＞丸三

徳島県

＜徳島＞雄徳堂徳野、森住丸
善
高知県
＜土佐山田＞依光＜高知＞金
高堂

福岡県

＜北九州＞北九州、白石、黒崎
ひとつりw.B.C＜福岡＞金文堂、
積文館、金進堂、尾崎堂、高
橋、丸山＜筑紫野＞丸山スコ
ーレ店＜直方＞みやはら＜田川＞
石川＜久留米＞菊竹金文堂
＜筑後＞吉田＜大川＞山口
＜粕屋郡＞尾崎堂

佐賀県

＜唐津＞まつら＜佐賀＞金華堂
長崎県
＜長崎＞好文堂、童話館＜松浦＞
丸屋＜佐世保＞金明堂

熊本県

＜熊本＞教育文化用品KK、三
章文庫＜本渡＞鶴田玉文堂
宮崎県
＜延岡＞池田＜宮崎＞大山成文
館、岩印

大分県

＜大分＞開書堂、今村、高校用
品販売、福田＜日田＞文化書
房

鹿児島県

＜志布志＞スズキ＜鹿児島＞加
世田
沖縄県
＜那覇＞朝野書房

大分県

＜大分＞開書堂、今村、高校用
品販売、福田＜日田＞文化書
房

鹿児島県

＜志布志＞スズキ＜鹿児島＞加
世田
沖縄県
＜那覇＞朝野書房

大分県

＜大分＞開書堂、今村、高校用
品販売、福田＜日田＞文化書
房

鹿児島県

＜志布志＞スズキ＜鹿児島＞加
世田
沖縄県
＜那覇＞朝野書房

大分県

＜大分＞開書堂、今村、高校用
品販売、福田＜日田＞文化書
房

鹿児島県

＜志布志＞スズキ＜鹿児島＞加
世田
沖縄県
＜那覇＞朝野書房